

花埋み心中

平  
龍生

プロローグ

- 第一章 紅花街道
- 第二章 ふるさと殺人行
- 第三章 春慕情
- 第四章 神々の戯れ
- 第五章 花埋み心中
- 第六章 愛憎の行方
- 第七章 殉教千里行
- 第八章 聖なる炎
- 第九章 薄明の闇

エピローグ

みちのく路の春は遅い。曇り空のせいもあったが、この日は空気も冷えた。

四月三日、東京では春めいた陽気だったのに、ここ、宮城・仙台の地に足を踏み入れると、まだ、冬景色の名残りが残されていた。

横瀬菊世と笹川義一弁護士は、仙台市長町にある宮城拘置所を訪れる途次だった。

三日前に仙台高裁の第二審判決で、赤石勇二には死刑の判決が下った。

金品目的の強盗・殺人事件であったことから、被告人には情状酌量の余地はなかった。

菊世は勇二の心を癒すために、特別の面会申請を笹川弁護士を通して行い、この日、三十分の接見時間を与えられたのであった。

宮城刑務所・拘置特別区の獄舎に、赤石勇二は収監されていた。

午後三時少し前に、二人は刑務所正門に着いた。

白ペンキで塗られた高さ二メートル余の通用門は監視が厳重で、衛所には警護の看守が数人張り付いていた。

笹川弁護士が来意を告げると、やっと、看守が鉄柵門を開けた。

菊世はこれで二度目の面会になるが、いつ来ても、一步、施設内に入ると背筋が寒くなった。コングリート道の向こうに、もう一つ、赤レンガ塀があり、わずかだが獄舎建物群の屋根の一部が望めた。

燻んだ建物群のどれが拘置支所かはわからなかったが、この施設内で死刑執行を行うための刑場も用意されていることを、菊世は聞き知っていた。

東北管区の重罪囚（死刑囚）は宮城拘置所に送られ、絞首刑の方法をもって刑を執行される習いとなっている。

面会者控え所の平屋の木造小屋に二人は通された。天井だけは高いが窓が少ないので室内は薄暗かった。暖房も入っていないので、手足が冷えた。

《昭和十年のことである。》

国家権力が横暴を極めた時代、また、日本は中国侵略の野望に燃え、この時代、軍国主義が台頭していた。

まだ、崩れ出さぬみちのく路の春まだきの空は灰色だった。その暗さに似て、内外とも、この時代、日本は今から冬の季節に立ち向かう予感を孕んでいるかのようにだった。

その上、赤石勇二の死刑判決、まだ、上告の道は残されていたが、それとて、延命策に過ぎず、そのことも、横瀬菊世の心を暗くしていた。

笹川弁護士が面会事務係の看守に呼ばれた。

少し時間が掛かっている。

菊世は冷えた長椅子に背をもたせ、笹川弁護士と看守のやりとりを複雑な思いを抱いたまま眺めていた。

（また、ここまでやって来たが、わたしは心底、勇二に会いたいと思ってやって来たのではない。わたしと勇二だけの間にある秘密：その秘密を守ってもらうために、わたしは勇二の心変わりを恐

れて、こうして、何度もここにやって来た)

誰にも知られたくない心の眩きを、菊世はこのとき、口にした。

笹川弁護士が戻って来た。

赤石勇二は面会の取り下げを願い出ており、本日の面会を取り消されたこと、笹川弁護士は菊世に告げた。

内心、菊世はほっとした。前回の面会時間では、無口の勇二は、ただ、強い視線だけを菊世に返し、菊世の内心を探ろうと努めているようなところがあった。

肚(はら)の内を読まれそうで、そんなときは菊世はつい饒舌になった。

笹川弁護士と横瀬菊世の二人は、結局、赤石勇二には会えぬまま、この日、宮城拘置所を後にした。

菊世が落胆していると思ひ、笹川弁護士はバスで仙台市内に戻った後、当時としては珍しいしゃれた洋風造りの喫茶店に菊世を誘い、薫りの高いコーヒを薦めた。

「また、歌を詠んでやって下さい。女々しい気持ちを捨て、本人としては菊世さんとの別れを男らしく覚悟したのでしよう」

笹川弁護士は席につくなり、慰め顔に菊世に言った。

松ヶ谷葉(まつがやよう)というのが、彼女の歌を詠むときの名であったが、その名が特に世間に知られていたというわけではない。

一時期、松ヶ谷葉は短歌の同人誌に加わったことがあったのであった。

「ええ」

とだけ、菊世は殊勝に頷き、顔を伏せるようにした。白いうなじにほつれた後ろ髪がまつわりついている。色白でやや細面、見かけは華奢だが着痩せをするほうで、菊世は自分の女らしい体付きには自信があるほうだった。

勇二のためにおしゃれをし、今日は薄墨色にえんじ色の紗綾形模様を配した着物を菊世は身に着けていた。帯はざっくりとした織り味を生かした黄橙色の袋ごや、それも、胸のふくらみが目立たぬようにきつめに締めた。

切れ長の目の端は少し吊り上がっていたが、二重瞼なので、男を見るときは、その目の潤いのせいで、女の色香が看取れた。

何より、菊世は唇のかたちが肉感的だった。全体に大き目だが、下唇はふっくらとしており、淫らな感じさえ与えた。

「歌はもう止めるつもりです」

と、菊世は小さな声で答えた。

「ほう、どうしてかね。赤石勇二とあなたの結び付けたのは、あなたの才である歌心だったのですよ」

「でも」

あとは菊世は口を閉ざしたので、笹川弁護士もそれ以上はこの話題には触れなかった。

世間的には、獄中にある死刑囚に女流歌人が恋歌を贈り、見知らぬ二人は知り合ったという美談話が仕上がっていた。

もつとも、太平洋戦争を前にした時代のこと、軟弱な男と女の話が世間に受け入れられるはずもなく、わずかに、地方新聞の片隅にこの美談は数行紹介されただけのことだった。

「死を賛美する歌を詠んだところで、彼の心が安まるわけでもありません。かえって、彼の心を乱すだけのことではないでしょうか」

「うーむ。仏の心を持ってと言っても、死ぬまでは生身の人間だ。生に執着があって当然のことだからね」

「出来ることなら、この世で、恋の思いを遂げたい。そう思い、赤石勇二は獄中で悩みに悩み抜い

たに違いありません。彼は到底、手の届かぬ恋をしていたのです。わたしは自分の作歌の世界だけに酔って：わたし、いま、自分がわからなくなっているのです」

「しかし、彼はあなたの歌のお陰で、東の間であれ、充実した生の時間を送れたのですよ」

「そうでしょうか。本当は赤石さんはわたしと獄中結婚をし、真実のわたしの心が欲しかったに違いありません。死の宣告を受けたいま、彼はわたしも殉じて死んでくれることを望んでいると思います。わたしが贈ったのは愛の歌なのですから」

菊世は面を真つすぐに向け、しつかりとした口調で告げた。目の奥に強い恫（あか）り点じているのを笹川弁護士はみとめた。菊世が一時的な感情であれ、殉ずるといふ文句を口にしたのに、笹川弁護士は心を打たれた。

いや、驚きを隠せなかったというのが、正直な気持ちだったかも知れない。

菊世の話は男と女のどこまで行っても空しい愛の話に及んでいた。笹川弁護士は口を挟むことができず、ただ、頷きを返しているだけだった。

女流歌人の激情ぶりに、戸惑っていたところもあった。

薫りのいいコーヒーを菊世は口にしたが、まろやかなその味を楽しむ心の余裕ではなかった。

仙台在住の笹川弁護士とは菊世は駅頭で別れた。一人、菊世は東京・上野行き列車に乗った。

どこか後ろ髪を引かれる思いがあった。赤石勇二が面会を拒絶したことに、菊世はこだわりの気持ちを持ち続けていたのだ。

これは菊世自身にうしろめたさがあったのことはあったが：

（わたしはわざわざ仙台まで足を運び、わたしなりに勇二には誠意を示した。そのことで、勇二はきつとわたしを許してくれるはずよ）

窓外の景色に目を転じながら、菊世はまた自分を安心させるための独白を口にした。

(昭和九年七月十九日)

黄紅色の紅花が山形の野畑には咲き乱れている日のことで、もはや、真夏日を思わせる日々が続いていた。それでも、最上三十三ヶ所観音霊場めぐりのお遍路さんの姿は後を絶たず、白い笈摺(おいずり)の袈裟衣に身を包んだ男女が、金剛杖を手に巡礼の旅を続けていた。

暑い一日が終わり、山形盆地に夕暮れの気配がすでに訪れ始めていた。

菅笠に笈摺姿の男と女の二人連れが、銀山温泉に至る街道を肩を寄せ合うようにして尾花沢の方角からやって来た。あたりはもう薄暗くなっており、二人の姿に気づいた者はいなかった。あと、四、五百メートルも歩けば銀山温泉に到着する。その姿を見た者がいたところで、お遍路さんの恰好だったから、誰もこの二人連れには不審の念を持たないはずだった。

「ほんとうにしこたまゼニは貯め込んでいるんだろな。むだ足を踏まされちゃかなわないよ」  
その男の声は若々しかった。背もしゃんと伸びており、足取りも早かった。

「大丈夫よ。タンス預金の他に床の下に千両箱が埋まっているってあの爺さん、わたしに自慢話しをしたんだから」

「千両箱はともかく、爺さんがやっている銀山温泉の旅館の売上金は毎日、せっせと運ばれているわけだから、文無しってことはないだろうよ」

「わたしが目を付けたのよ。あるところにはお金はあるもの、絶対にあるわ」  
女が自信たっぷりに答えた。こちら声に張りがあった。

赤石勇二は二十五歳、同行している横瀬菊世は二十二歳、二人の道行きは物騒な会話に終始したが、野辺路のこと、誰も聞き取った者はいなかった。

さすがに二人は東禅寺の寺門前を通過するときは口を噤(つぐ)んだ。札所二十四番の上ノ畑観音の管理を預かる寺で、高い寺の門と本堂がひっそりと控えていた。納経所になっているので巡礼者は東禅寺に普通は立ち寄るのだが、二人は門前を足早に通り返した。

東禅寺から銀山温泉街までは二キロとはない。巡礼者の宿はこの時間だと、銀山温泉ということになるのだが、途中、二人は山道をたどった。

目指す場所は上の畑観音で、参詣道は銀山温泉街を通り、銀坑跡を経てその場所に至るのだが、赤石が先導をし、銀山温泉の手前で脇道にそれた。

急な坂道を二人は三十分ほど登った。二人はけもの道に踏み入った。夏草を分けての一步、一步である。覆いかぶさる樹々の茂りが行く手を阻み、時間も経過して、無人の観音堂に二人が着いた頃は、あたりの夕闇はすでに暗く沈んで見えた。鳥居と小さな観音堂、それに南無観世音菩薩と染め抜かれた赤い旗幟(はたのぼ)りが、のたりとした風に吹かれ、参道際の石段道でわずかに揺らいでいた。

二人は観音堂内に一時身を隠した。

内部は六畳一間ほどの大きさがあり、正面には聖観音菩薩像が安置されていた。

赤石はろうそくの燭台を見付け、ろうそくの一本に火を点けた。ただの木小屋でしかなかったのに、明かりが灯されたことで、観音堂内は別の貌（かお）をそこに写し出してみせた。

「気味が悪いわ。あれは何なの？」

と、菊世が天井を指さし尋ねた。

「ああ、あれか、死者の結婚式だよ。あの世の幸せを願って奉納されたものなんだ」

赤石はあたりを見回してから答えた。

観音堂の天井や、鴨居の上の壁に水彩画の絵馬が飾られていた。花婿、花嫁が寄り添った組み合わせのもので、中には白黒の写真もあった。結婚式そのものに似せた絵柄のものもあり、仲人や三々九度のための長柄を手にした稚児が、配された絵馬もあった。

「よくわからないわ、何のこと？」

もう一度、菊世が子細（しさい）を質した。

ろうそくの灯にあぶり出された絵には、よく見ると奉納者の名があり、死者の没年月日が記されていた。

「このあたりの風習でさ。長子が死ぬと、親が哀れがってああして相手の花嫁を見つけてやり、絵の上のことだけど、結婚式をしてやるのさ」

赤石は山形・新庄の出身で、当地のしきたりには詳しくかった。

「何だか、悲しい話ね。気が滅入るわ」

「迷信だよ。親の勝手というやつで、大体が不憫（ふびん）がってもらえるのは長男だけ。おれのように三男坊は口べらしになったと感謝されるのがオチで、どうってことないのさ」

尋常小学校を卒業すると、直ぐに作男として農家に預けられた赤石は恨みがましい口調で言った。赤石が板の間にろうそくを据えたので、二人の影が揺らぎ、板壁に映じた。

「真夜中までまだ時間がある。もう一度、計画の復習をしておこうか」

犯罪者の顔になり、赤石は声を潜め言った。

菊世は両膝を抱えた姿勢のまま、頷くともなく頷いた。

「完全犯罪をやり遂げるんでしょ。絶対に躊躇いの気持ちを持つちゃだめ。相手は守銭奴の高利貸し、わたしは娘の身売りにも、あの爺さん、手を貸しているって話も耳にしたわよ」

「殺しやしないが、まあ、殺したって血も出ない相手だろ。金を握ったら一山当てて出直しさ。外地へ行っておれは大事実業家になる。一か八か、やるしかない。お互い、喰い詰め者だもんな」

何度も口にした台詞を赤石は自分の気持ち鼓舞するためか、菊世の耳に吹き込んだ。赤石は生糸の相場に手を出し、それまで貯めた金を使い果し、生計の道を失った。起死回生の金を元手に人生のやりの直しをする気だった。山形に舞い戻ったのは菊世に誘われてのことであったが、犯行をやり遂げねばならない理由は充分に持ち合わせていた。

狙いをつけた佐田仁助は、天童温泉で芸者の真似事をしていた菊世が一夜を共にした相手で、そのとき、寝物語で金を貯め込んでいる情報は入手した。

赤石と菊世が知り合ったのは、菊世が勤めていた東京・神田にあるカフェーに赤石が客としてやって来たのが初めてであった。相場で当て金離れの良かった赤石に打算づくで菊世が近づき、お決まりのように、その後、男と女の関係になった。お互い、深い思いを抱いてのことではなかった。菊世はなにがしかの金を赤石から何回かせびった。数回抱き合っただけで、一時、二人は別れた。揉めごとがあつたのではなく、自然消滅のかたちで、一旦、二人の縁は切れた。

菊世と同じ神田の他のカフェーに勤めを変え、そのとき来合わせた相場師の男が、勇二を客にしていた関係で、二人は再会した。

急に不景気風が吹き始めていて、勇二は大金を相場で失くした。菊世は菊世で借金を抱え込んでいたり、今度の話しが二人の間で持ち上がったのだった。

「その前に、二人で約束したことだけは守ってね。わたしとあなたは他人同士、共犯でも何でもないのよ」

「わかっている。金になる話しを持ってきたのはお前さ。やるのはおれ一人、見張り役のお前に罪を着せたりはしないよ。絶対にへまはやらない。ここらあたりの百姓家の造りは同じようなもの。入るのも逃げるのも、勝手知ったる我家のようなものさ」

二人の間には、どちらが捕まっても、相手の名を口にしないという約束が一応は出来ていたのであった。危うい約束事ではあったが。一日はもう間もなく、闇の間に間に吞まれようとしていた。

お堂の軒庇（のきひさし）に張られた蜘蛛の巣に、小さな羽虫が一匹引っ掛かり、羽音を震わせた。直ぐに、羽虫は動きを止めた。急にあたりに暗さが忍び寄った。

2

汗の匂いを勇二と菊世は嗅ぎ合った。袈裟衣の背もぐつしよりと汗を吸っていた。

「男の汗の匂い、好きよ」

と、菊世のほうから声を掛けた。

「余計なもの脱げよ」

「同行三人か。観世音菩薩様とはここでお別れね」

二人は会話を交わしながら笈摺の白い衣を脱いだ。二人は仏の加護など願ってはいなかった。菊世の口にした観世音菩薩は巡礼行を共にしてくれる観音様のこと、朱文字で二人連れなら『同行三人』と記し、巡礼年月日を書き加えるのがその習いであった。発願寺などで書き記してもらう場合もあるが、巡礼行に慣れた者は自分たちで文字を記したりする。それで二人の場合は、第三者に見られないように、各自が背に文字を書き込んだ。

板座に二人は座っていた。ろうそくの灯が高くなり、灯心がじりじりと焦げる音がした。

「凄く欲しくなっている。女がね、欲しくなると、知らない間にあそこに力が入っているのよ。何も感じないときは体の一部だということすら意識しないのに。欲情すると内部（うち）から潤ってくるのがわかるの」

「その目はもう濡れ光っている。お前のおそれも濡れてきてるんだ」

「きつとそうね。ね、たしかめてみる？」

菊世はそう言うと、板壁に背を押しつけたまま、長目のスカートの裾をたくし上げた。両膝があらわれ、白い太腿までが勇二の眼前にさらされた。

勇二は少しぎごちない仕草で右手を伸ばした。汗の滲んだ手の平を菊世の股間に置いた。ズロースの上からだったが湿った感じを勇二の指先は探り当てた。その勇二の右の手首を菊世がぎゅっと握り締めた。次の行為を促す。太腿の半ばほどもある木綿地のズロースが下ろされた。勇二は強引に指をすすめ、菊世のぬるみの箇所指をもぐらせた。すでに、ひそみの奥は欲情の汗をたっぷりと貯め込んでいるようだった。

菊世は勇二の肩口に頬を寄せた。体中がわななくように震え、そのまま、菊世の体は正体を失くしていった。立てた膝はだらしなく伸び、股間に挟み込むようにした男の指を逃すまいとでもするように、菊世は脚をからめていった。

「あ、もうだめ。わたし、気持ちが高ぶって」

「いきなりか。そうしてやるよ」

今度は勇二が逸る気持ちを押えかね、菊世を板床の上に押し倒すと、直ぐなるものをそのまま、菊世の火照った隙間に突き込めた。激情を込め、勇二が腰を打ちつけた。

ろうそくの灯が風もないのに揺れた。

菊世の上半身も裸に剥かれた。

真つ白の大ぶりの乳房が二つ、大様（おおよう）に揺れた。固く立った乳首は勇二が菊世の前腰を抱えている位置からは、時折り、裏返って見えた。

激しい突きを入れると、乳房全体が撥ねて、乳房は上反りになるのだった。

そうしながら、勇二は菊世の淫らさに火がつくのを待った。

男のものを借りているだけの単調さ加減では菊世は満足することはない。

菊世の手が下に下りてきて、勇二のしごぎに待ったを掛けた。心得て、勇二は腰の動きを止め、そつと直ぐなるものを引き抜く。

「いつものようによ」

唇の端を舌で湿してから菊世が言った。菊世は抜き取ったものを右手でつかみ、自らの股間に当てがった。男のてかりの部分で、花唇の下に隠された肉の溝を割り、そのまま、行き来させて遊ぶ。卑猥な音を菊世は楽しんでいようでもある。

二人はいまは夢現（ゆめうつ）の時の間に身を置いていた。さつきまで頭の中に描き取られていた犯罪劇は幻のものとなり、肉の愉悦だけがいまは生々しく息づき始めていた。最後まで、菊世が積極さを示した。

「わたしが締めつけたらよ。いいわね」

菊世が男の体の上に乗る、自在に腰を操った。

快楽を貪りつくすように、腰をこね回した。そうしながら、高まった瞬間に、下半身の一部に力を込めた。相手のものを口いっぱい頬張った。その後、菊世は充実感をたっぷり味合ってから、喘ぎ喘ぎ果てた。

「うーっ、うおっ」

と言った呻きの声を勇二が放った。二人は汗にまみれた。

夜半のことであった。

生ぬるい風がわずかに吹いていた。勇二と菊世は観音堂を出た。

真つ暗闇の行く手を二人は見遣った。

と、そのとき、観音堂の扉が風もないのに、ききーと音を発して開き、二人の一步を遮った。

ぎくつとし、二人は観音堂を振り返った。軋りの音はもう止んでいた。

暗い闇だけが、そこに残された。

菊世は死婚絵馬のことを脳裏に甦らせた。薄気味の悪さが緊張感になって背筋を走った。

（まさか、わたし、勇二の、死の花嫁に選ばれたってわけではないでしょうね。いやだわ。こんな考え方って。わたし、この際になって何を脅えているのかしら）

菊世は一人呟いた。勇二が菊世に決意を強いた。

「丑満つ時さ。さあ、頃はよし。おれたちはやるだけさ。ここまで来たんだから」

この後、二人は巡礼具を観音堂の下に穴を掘って埋めた。証拠の品を残さぬように。

足元を照らす懐中電灯の明かりを頼りに、二人はけもの道を下った。草の露がわら草履の二人の足元を濡らした。沢地に降り立つ。ここまで来れば里地はもう近かった。

川に沿って二人は歩いた。里地では明かりは消した。銀山温泉に抜ける道は一本道なので比較的わかりやすかった。

東禅寺の方角に戻ると、人家がまばらにあった。多くは畑地でいまは稲穂が広がっていた。菊世は勇二に手を引かれ東禅寺からさらに五十メートルほど進んだ。お目当ての佐田仁助の家は、すでに、お遍路姿のときにたしかめた。巡礼コースの道筋にその家はある。

母屋に仁助夫婦が住み、別棟に息子の一家が住んでいることは菊世が聞き及んでいた。このあた



りでは大きな農家で、門構えもしつかりしており、それに続く板塀もぐるりと回りを取り囲んでいた。母屋の他に別の棟が三つある。塀に沿った裏の勝手口を勇二は一本の針金を用い、わけもなく開けた。内側は簡単な門式（かんぬきしき）の止め錠になっていた。

初めに勇二は農具小屋に足を運び、草刈り鎌を一丁手にし、戻ってきた。刃先が鈍い月明かりを写す。母屋の藁葺き屋根が暗い空の一角に吞まれていた。見上げるとのしかかってきそうな威圧感がある。その母屋から十メートルほど離れた場所に長男一家が住んでいると思われる平屋の棟があった。菊世は勇二に指示され、母屋と平屋の両方が見える大きな柿の木の下で見張りについた。母屋はその場所からは三メートル余の距離で、菊世の役目は平屋に住む長男の動向を見張ることだった。危急のときは母屋に入り、勇二に声を掛けることになっていた。

雲間から月がわずかに顔を覗かせており、佐田家の広い庭先に青い闇が息づいていた。

「金さえ出せば殺しやしないさ」

低い声で勇二は言い、菊世の顔を見た。勇二の目を見返したとき、菊世の体は震えた。勇二はロ―プなどの盗みの道具を入れた風呂敷包みを腰に、日本手拭いで頬かむりをした。

（殺人など起きませんように）

菊世は勇二を見遣りながら願った。

「いいか。どんなことがあってもお前を道連れにはしないよ。おれが立ち直る機会を作ってくれたんだから、恩に着なくちゃな」

しつかりした口調で勇二は告げた。

ひよいと背を屈めるようにしたと思ったら、勇二はもう一步を踏み出していた。

足音がふつと地に吸い込まれた。

旧家の造りだけに母屋は頑丈に出来ていた。太い柱で支えられている。渡り廊下に面した周囲は暑い季節だというのに閉め切られていた。その分、高窓が開いていたがその場所は人の背は届かない。勇二は目的の場所に向け、最短距離を歩き、床下に潜り込んだ。蜘蛛の巣を払いながら、勇二は母屋の隅にある女中部屋の床下に到達した。どの農家も同じような造りになっている。元作男をやっていた勇二のこと、これぐらいの知識はあった。人は居着いていないことはわかっていた。

勇二は床下から手を伸ばし、床板の一部を外した。釘付けにされていないので容易に外れた。この小部屋の外は台所の土間だった。初めに、勇二は逃げ道を用意した。勝手口の扉のつかえ棒を外す。この外は菊世のいる柿の木のある場所にと通じる。

次に家の中に造られた元馬小屋のあった場所に行き、観音扉の内部からのつかえ棒も外した。ここも外庭につながっていた。

足音を忍ばせ、寝所のあるほうへと渡り廊下をたどった。障子の白さと高窓からの月明かりを頼りに勇二は寝所を探り当てた。しばし、息を整える。暗闇を透かして見た。障子は開け放たれていて、蚊帳が老夫婦の寝姿をおぼろげながら写し出した。人の噂では仁助は枕の下に札束を忍ばせ、枕代わりにしているという。吝嗇家（りんしょくか）で強欲、仁助の性向については余りいい話しは聞かない。

勇二は麻ロープと猿轡を噛ませるための二人分の日本手拭いを用意し、腰に差した草刈り鎌を手にした。

蚊帳の一方をめくり上げ、老夫婦のそばに寄った。老婆はこの場合、勇二は問題にしていなかった。仁助に近づくといきなり首に麻縄を当てがい、巻きつけに掛かった。

気配にこの家の主が目覚ます。

「てめえ、何の用だかわかるよな。金に用ありよ。さっさと出しゃ命は取らねえよ。がたがたぬかすと鎌でのどを搔っ切るぜ」

勇二はわざと伝法調で脅しを掛けた。土地の者ではないという印象を与えるためだった。

「お、おめえ、どこのもんだあ。銭っこがおらのうちにあるわけがねえで。なに血迷っている

だあ」

「そんなこと言っていられるのもいまの内だ。息の根を止めるのはわけはねえんだぞ」  
手にした麻ロープの両端を引っ張り、勇二は首を絞めに掛かった。のど仏に当たる部分には結節目を作っており、仁助の息根を圧迫した。

「そげえなごど言うでも……」

初めよりは声はすばまり仁助は恐怖を実感し始めたようだった。老婆は侵入者に気づき、逃げ出そうとして、布団の中で手足をばたはださせた。が、体がいうことをきかず、声も出せずにいた。

咄嗟に勇二は鎌の切り先をぐさりと畳みの上に刺した。老婆の枕元だった。

「金の有り場所を言え。三分で仕事は終えるつもりだ。容赦はしないぜ」

「息子が銭っこは預かっているだあ。あっちさいって、おらが話しをつけるのだがら、おめえ、物騒なごどはやめろや」

「爺さんがその気なら家探しをするぞ。聞き分けのねえ野郎だ」

首に巻きつけたロープに力を込め、仁助の首を二、三度きつく締め上げた。ついでに後頭部を床に打ちつける。仁助が荒い息を返してきた。

腹たちまぎれに勇二は老人の頬にびんたをくれた。

「ねえもんはねえつでば……」

「こつちも命がけできているんだ。爺さん、おれはほんとうに殺る気だぞ」

勇二は再度脅しを掛けしたが、仁助はだんまりをきめ込んだ。勇二は老人の腹に拳固を噛ませた。ぐったりしたところを後ろ手にロープで縛り上げた。

敷き布団をめくり金の在り処を探したが、何も見つからなかった。今度は枕に鎌先を噛ませた。そば殻があたりに撒かれただけで何も出てこなかった。

すつかり頭にきた勇二は仁助の首筋にびたりと鎌の刃先を当てた。

「わがったよ。そのたんすの上に木箱があるべ。そんなにくらか銭が入っているだ。ここにはそれしかねえ」

やつと仁助は口を開いた。勇二はたんすのそばに寄った。部屋の隅なので蚊帳の外になる。たんすの上はごちやごちやといくつかの木箱のようなものが積まれていて、何が何とは見分けがつかない。勇二は懐中電灯を灯し、中身を改めるべく、背丈ほどの高さのその場所に明かりを走らせた。小金の入っている木箱を見つけた。四、五十円の札を手にした。端た金だった。当時の金としては小学校教員の給与一ヵ月分程度の額となる。

少なくとも、二、三百円の現金はあると勇二は踏んでこの場に乗り込んだ。金を求めて勇二はさらに隣室に入った。明かりを向けると仏壇が浮いて出た。金の隠し場所のように勇二には思えた。大胆になり、懐中電灯を当て探りに掛かった。金目の物と思われる懐中時計を見つけ、ひとまずズボンのポケットに入れた。金を探る間、懐中電灯の明かりは仏間の闇を行き交った。天井にも不用意な光りが投射し光りはひと巡りした。高窓のあたりにも光りが届いた。徒らに時間が過ぎて行く。

金は発見できず、勇二は焦った。

寝所に取って返し、勇二は再度、仁助の口を割らせに掛かった。

「金があるのはわかっているんだ。言わねえとほんとうに殺すぞ。どうだ、爺さん」

「おめえ、どこのもんだか、知らねえどもこの土地のもんだべ。おらにはわかるのよな。悪いこと言わねつがら、こげな非道なごどは止めるや。おら、おめえのこど、誰とは警察には言わねえし、なんもながったごどにしてやつがらあ」

仁助は勇二のことを小僧っ子的ように扱った。言葉の詛りのことを口にされ、途端に勇二の頭に血が昇った。勇二に殺意が兆した。

見張り役の菊世は、このとき、不審の人物を見つけ出した。別棟に寝泊りしている息子の栄太郎

が外便所に行くために、ふらりと闇の中庭に姿を現したのだ。男は寝呆けたふうの足取りで便所に消えたが、便所から出てきたときの動きは敏捷だった。菊世のいる場所からは母屋内部を写し出した明かりは見えていなかったが、栄太郎は便所の中からその明かりを目に止めたのだった。

男が小走りに母屋に向け走った。

菊世は危急を知らせるべく行動を起こそうとしたのだが、すでに、寸秒の差で遅きに失していた。

「ぎやおうーっ」

猫の叫び声に似ていた。のどを押し潰されたような悲鳴が屋敷内から漏れ出た。勇二の振り降ろした草刈り鎌は仁助の勁動脈をざっくりと剔（えぐ）った。

逃げ場を失った老婆をも、勇二は標的にし、無我夢中で鎌を横に払った。

足音高く、廊下を蹴立てて、台所の土間に降り立ったとき、勇二は前方に人影が動くのをみとめた。もう一つの逃げ口である馬屋の方角に走ろうとしたが、距離が離れ過ぎており、相手に待ち伏せを喰うおそれがあった。それで勇二は正面突破を敢行した。

血を吸った鎌を振りかざし、勇二はその黒い影に切り掛かった。

「こ、このお！」

男が脛の六尺棒を横に払った。がきつと音がし、勇二の向こう脛に棒先が当たった。鈍い音がし、そのまま、勇二はひっくり返った。男が六尺棒をさらに構え、勇二の脳天に打ち降ろそうとした。

勇二はすんでのところで、身を躲（かわ）した。横に転がるようにし逃げた。勇二は態勢を立て直す。男がひるんだとき、勇二は背後から肩先に鎌を打ちつけた。男は傷を負ったようだったが、体を正面に向けて、気丈に六尺棒で勇二の足を払おうとした。勇二は殺気を感じた。その分、鎌を握る手に力が入った。相手の一撃が外れたとき、そのまま、正面から体を合わせていった。もつれた隙に、鎌先が男の首筋をひと搔きした。

「ふえっ」

鋭い笛の音がのど仏から発せられた。男が前のめりに倒れた。暗い影が不意に目の前から消えた。

勇二は血が噴き出すところは見なかったが、ざっくりと鎌の刃先は血の脈を切り裂いていた。

勇二は後ろも見ずに、その場から逃れた。

二人の間では行き違った場合は、尾花沢に抜ける母袋街道から少し入った菓林神社の裏山で待ち合わせる約束ができていた。佐田仁助の屋敷からは十五キロほど離れた場所だった。

不首尾を看取って菊世が一步先に逃げ出した。裏門から抜け出した後、菊世は後ろを振り返った。

「おいっ、菊世、おれだ」

勇二が呼んだ。菊世は足を止めた。間もなく勇二が追いついた。

「足をやられた。肩を貸してくれ」

どうやら勇二は足を引きずっているようだった。菊世は肩を差し出した。

「ちくしょう。端た金さ。みんな殺ってしまったかもな。まったく、ついていないや」

「ともかくいまは逃げるのが先よ」

二人は菓林神社に向かうのは止めた。母袋街道に出てから、少しでも尾花沢の駅に近づく方法を取るようになった。初めのうちは勇二も無理をしながらも歩ける状態だった。脛の部分の骨を折られている様子だったが、菊世の肩を借りれば何とか歩けた。

が、母袋街道に出る手前で、勇二は一步ごとに呻き声を上げるようになった。骨折した部分がこすれ、次第に歩行困難となった。

「この先に川がある。そこから一旦、山に入って様子を見よう。とてもじゃないがこのままでうろろしているよと夜が明けてしまう」

勇二の求めで二人は予定を変更した。土堤道を下り、川の瀬に立った。二人はのどを潤したが、一息ついたわけではなかった。月明かりが川の流れと、裏の低い山を写し出していた。

青臭い闇がそのあたりには棲みついていようだった。

山への道筋を見つけ、二人は避難場所を探した。緩やかな坂道だったが、結局、勇二はついて行けず、川から二、三百メートルほど入った地点で、座り込んでしまった。

「夜が明けても仕様がなない。これ以上は無理だよ。菊世は今度のことには巻き込まない約束だ。おれを見限って、逃げてもいいよ。おれはさ。この山の中で何とかする。いまは季節もいいから、木の根だつて何だつて、口にして生き伸びてみせるさ。足のほうが何とかなるまではな」

笹の茂った斜面に身を置き、勇二は絞り出すような声を出し告げた。

菊世はただ暗いだけの林の向こうを見ていた。

まったく風はなく、物音一つしなかった。勇二がまた痛さに呻いた。

「逃げるつたつてあなたを一人置いて、そうもいかないじゃない。朝になったら、わたしが身を隠すことのできる山小屋でも見つけるわ。どうするかはそれから考えましよう」

「もう、菊世、おれをこのままにして逃げ出したくなっているんだろ。とんだ足手まとき。おれは。菊世、おれをこのままにして逃げてもいいんだぜ」

菊世は内心びくりとした。自分が共犯者であることを思い知らされた。同時に勇二が菊世の心の内を窺っているのを感じた。

(勇二がもし捕まるようなことがあれば…)

当然のことながら菊世は、保身の方法を頭の中に巡らせていた。

勇二を一人置いて、いま、逃げ出せば、薄情な女だと思われるのは必至だった。

「こんなことになったんだもの。二人で逃げる方法だつてあるわ。安心してちょうだい、わたしはどこにも行かないから」

菊世はそれなりの計算をした。

二人は愛し合っている仲でもない。心の中ではとんだ騒動に巻き込まれたものと菊世は思っていた。共犯者にされたくはなかった。

「よし、少しでも人里は離れたほうがいい。どこかに炭焼き小屋でもあるだろう。おれは這つてでも身を隠す場所まではたどり着いてみせる。一人じゃ無理だが、菊世がいてくれるなら、逃げようもあるうと言うもんだ」

ギブス代わりに木の枝を用い、日本手拭いで骨折した部分を固定させた。

足を庇(かば)いながら、樹木の幹から幹へと勇二は闇を探った。菊世がその歩行を支えた。二人は緩やかな山道を笹藪の地点からさらに数百メートルも進んだ。

平らな草地にたどり着いた。勇二が少し休ませてくれと願い出た。二人は仰向けに草の上に寝た。しばらく勇二は荒い息をついていたがそれも治まった。

涼しい風が谷の方角から沸き起こってきた。

月明かりの視界が山の稜線を映し出していたが、やがて、月は闇の涯(は)てに隠れてしまった。真っ暗闇になった。

二人は風の音と川の瀬音だけを聞いていた。

「追っ手が来ることだろうな。山狩りでもされたらこの足じゃ逃げようがない。そんなときは菊世一人で逃げてもいいよ」

ぼつんと勇二が呟いた。誰に語り掛けているのか、間遠い感じのしゃべり口だった。

菊世は直ぐに返事はしなかった。菊世は二人で逃げる途中、敗残者のあがきを道々見せつけられた。

同行三人？巡礼姿の笈摺の背に書かれた文字を、菊世は思い出した。

冗談じゃないと、二人の道行きの途次、何度か菊世は呟いた。無性に腹が立った。

いまもその気持ちに変わりはない。何とか心を鎮めようとしていたのだが。

「おれ、お前に逃げられると思ってるわけじゃないが、逃げないという保証は何もないもんな。それから、例の約束だけど、あれはきちんと守る気はあるが、もし、おれが捕まるようなことがあれば、どうしても佐田の家に入る気になったか訊かれるに決まっている。どう答えたらいいか、いま、考えているところさ」

勇二は菊世のことをお前呼びわりした。その態度の変化を菊世は敏感に読み取っていた。

「：それはあなたがこの出身で、前にどこかで佐田仁助の噂を聞いたってことにすればいいんですよ」

「どこかって、おれが作男をしていたのは十九までのことだもんな。そりゃ、尾花沢の百姓家にしたから、噂ぐらい聞く機会はあるかも知れないけどよ」

「ね、あなたは何が言いたいのか？わたしは勇二を見捨てないと言ってるんだから、それでいいじゃない。こうなればどこまでも逃げてやるわ。勇二と一緒に」

「そういうのおれ、信じていないのよな。片足いかれた男だぜ、おれ。おれがお前の立場なら、さつさと逃げ出すよ。逃げ出さないのは共犯者にされたくないからだけなんだろう」

「いまさらそんなこと言わないで。だから、今度の計画を実行に移す前に、わたし、自分の過去の一部もあなたに話したのよ。叔父を殺す気になったってあの話。自分で計画を練ったこともあるの」

「ああ、岐阜のどつかに殺したいぐらい憎いと思ってる叔父がいるって話か」

「そうよ。子供の頃からひどい目に遇って、わたし、何度も子供心にあいつのこと、殺してやりたいたと思つたわ。いまだってそう。今度のことがうまくいけばね。あいつを殺るとき、あなたに手伝つて欲しいと思つていたの」

「そう言うのが、信用できないって言うんだよ」

「なぜ？勇二、何を言っているの。意味がわからないわ」

「お前、ほんとうはその男、殺したんじゃないやねえの。隠してもおれにはわかるよ。お前がおれに嘘をついているってことはさ」

「：何を言ってるの」

「お前がおれに入れ知恵した犯行計画、前に一度、同じ方法でやってなきや、ああは詳しく話しはできないと思うよ。観音堂を利用する方法なんか、特に微に入り細にわたりで、おれが感心したぐらいだもんな。前にも同じ術を使つたんだとおれは思つていたのさ」

「まさか。女一人でそんなことやれると思う？考え違いをしないで」

菊世はうるたえた声を出した。実際の話をすれば、勇二には凶星を指されていた。

去年の秋口に菊世は叔父の村山公次郎を殺害していたのであった。今度の犯行計画では観音堂が近くにないかと、初めに勇二に尋ねた。その利用法と証拠の品となる着衣を観音堂の下に埋める方法も菊世の提案だった。菊世は同じ方法を前にも用いていたのだ。

「おれはさ。奴らの内、何人かは殺したに違いない。菊世も加担したのは事実さ。お前が叔父を殺つたのなら、立場は同じだ。お前が一部、おれに話したこと、おれに正直に告白すれば、その件は黙っていてやってもいい。ここまでできたんだ。いまはお互いの心の内が見えていなきや、お前と約束したことも、どうなるかわからない。一人だけ、自分の足で逃げられる奴を、このまま、逃がすわけにはいかないよ」

「わたしも巻き込むつもり？」

「いいから、いいから。お前も殺人者なんだろう？それでいいじゃないか。叔父とかいう奴の話を前にしたとき、お前、目がぎらぎらしててさ。あれはやっぱり、人を殺した奴の目だったよな。殺人者同士なら、おれは約束は守るよ。お互い、秘密を持ち合った者同士だもんな」

まつわりつくような勇二の言い回しに、菊世は追い込まれ、つい、本音の部分をさらけ出す羽目になった。

「ほんとうに死んだのかどうか後のことは知らないけど、叔父を刃物で刺したのは事実よ」  
菊世は間接的にその事実を認めた。後は口を噤んだ。用心深くなっていた。

「ああ、それだけ聞けば充分さ。お前を今度のことで共犯者にしない約束だが、いま、思いついたことだが、一つ、条件がある」

「何？条件って」

「おれが捕まるようなことがあればの話だけど。どうも、この足じやな。山狩りされれば、どうなるか分からないよ。そのときは、ぜひ、警察まで面会に来て欲しい。お前がおれの女だってこと認めればって話さ」

勇二が探るような口調になり言った。

「警察に？あなたの女つてことを、わたしが認めるの？勇二、捕まるはずはないわよ」

「だから、もしものときの話さ。完全に縁が切れるったって、心の中ではおれ、お前のこと許してないかも知れないし。これ、正直な話だよ。一度でいい。おれの顔を見に来てくれれば、それで、すべておれの心の中に、今夜のことはしまつて置く。例え、捕まって、死刑の判決を受けてもだ。これは男の約束だ。どうだ？」

勇二の示した筋書だと、この後々も、勇二とは縁を持たされることになる。

菊世は勇二に踏み絵の行を強いられていたが、いまは拒否できる状況にはなかった。

勇二の気を損ねたくないという計算も働いた。後々、このことが、菊世の命運を左右することになるのだが、この時点では、ともかくも、この山中から、いつときでも早く逃れたいという思いが先に立った。

「わかったわ。あなたの言う通りにする。あなたが捕まるはずはないけど」

「ともかく、お前の誠意つてのがさ。分かればいいんだよ、おれは。その代わり、お前の罪もみんな負つてやるよ。余計なこともしやべらないさ。その岐阜の話、おれに何も関係ないことだし。今度のことでは、お前は計画に加わり、見張り役をしただけのことだものな。ヘマをやったのはこのおれの責任だ。そのへんはよくわかっているつもりさ。同行三人なんて嘘っぱち、同行一人つてことにして、おれの腹にしまつておけばいいことだろ。お前、いつまでもおれのお守りしていないで、ここから消えてもいいよ。ただし、おれだって逃げ了せるつもりだから、おれのこと、余計なこともしやべらないこと、わかったか」

「本当にわたしがいなくともいいの？」

「いいって。ずっと一緒に逃避行する気もなし。一生、仲良くやっていける同士でもないだろ。これはお互いのためさ」

菊世はしばらく黙ったまま、暗い闇を見詰めていた。まだ、半信半疑のままだった。

「このあたりの様子がわかる時間になるまで待って。やはり、あなたが隠れる場所ぐらいいは見つけないと。その足じや無理よ」

「無理するなつて。おれはおれだ。ここはお互い、割り切らないと」

「大丈夫よ。どうせこの暗さじや、この山の中、歩けっこないんだし。朝まで付き合ってもどうつてことはないわ」

菊世は健気な女になり、勇二のそばに寄り添った。

勇二が菊世の髪に手をやり、感謝の情を示した。

暗い空の一角がわずかだが藍色に染め始められていた。

白々と夜が明ける頃、菊世が近くに捨てられたままの炭焼き小屋を見つけた。勇二はその場所に身を隠すことになった。直ぐ下に川の支流があり、飲み水ぐらいいは確保できる恰好の場所だった。

二、三日、この場所において発見されなければ逃げ伸びる自信はあると勇二は言った。作男をしていただけあつて勇二はがっちりとした体格の持主だった。それに逃亡するにしても、この地の地理にも詳しい。

「おい、もう行けよ。おれのことはいいいからさ。これつきり会えないかも知れないが、お互い、殺人者なんかじゃない。みんな忘れよう。これが二人の約束さ」

勇二が告げた。菊世は頷いた。太陽が東の空を染め始めたのか、急にあたりに朝の気色が満ちてきた。小鳥たちの囀り声が俄かに騒がしくなった。

（わたしがやり遂げた岐阜の殺人のことも勇二は忘れようと言ってくれているのか？お互い、殺人者？勇二が口にしたこの文句はその意味を含んだものなんだわ）

菊世はそのように解釈した。敢えて、この件については問い質さなかった。余計なことを口にするとさらに事実関係を探られることになる。

勇二がもう一度「行けよ」と声を掛けた。菊世は「また、二人は会えるわ」とだけ言い、小屋を後にした。夢中で小枝を払いながら山を下った。

この数刻後、勇二は追っ手に捕まる運命に置かれていた。笹藪の場所に血が付着しているのを近くの農家の男が見つけ、警察に通報した。

山狩りが行われ、勇二は動けぬ状態のまま捕縛されることになるのであった。

菊世は元来た道を進んだが、途中で道に迷った。このことが菊世には幸いした。追っ手の網から菊世は逃れることができたのだった。

一旦、川筋に出た後、二人が犯行を計画したときに待ち合わせ場所にした巢林神社のあたりに菊世は偶然出ていた。花袋街道を目前にしていたが、菊世は用心をし、山道を迂回した。丹生川の流が見え隠れする道で、そのうち、鉄道の線路道に出た。山を下って二時間ほどが経過していた。

今日も一日、暑い夏の太陽が山形盆地を白く灼きそうだった。

菊世は駅に近づくために線路道に降りた。あたりに人家はなく、線路の両側は小高い丘状になっていて、緑の樹林が覆いかぶさるようにカーブを描きながら行く手に伸びていた。

菊世は岐阜の事件のことを思い出した。同じような設定がここには用意されていた。

菊世は叔父の村山公次郎を殺害したとき、やはり、線路道伝いの道を行き来した。曲がりくねったレールがどこまでも続いていた。

いやでも、頭の中に自分自身が関わった殺人劇の場面が浮いて出た。一つ、一つの場面を菊世は頭の中で打ち消したが、まだ、記憶に新しい出来事だった。

菊世は息苦しさを感じた。

菊世の場合は自分の犯した殺人劇が、明るみに出されるようなことがあればという恐れ of 気持ちに先に立っていた。勇二が約束したことにも、不安な想いが兆していた。

疑心暗鬼の思いも消えてはいなかった。

去年の暑い一日のこと、菊世は故郷の岐阜の地にいた。それはもはや、拭うことのできない現実の物語りであった。菊世はまた悪夢である過去の一駒の中に身を置いた。殺人者の貌をした女が一人、やはり、さらばうようにし、線路道を歩いてい――

〈昭和八年九月二日〉

横瀬菊世は久方ぶりに郷里の岐阜の地に舞い戻った。この日も暑い一日だった。

六年前、十五歳になったばかりの日、菊世はあちこちを転々とした揚げ句に東京に出た。故郷を捨てた菊世だったが、菊世には果すべきことがあった。

叔父の横瀬公次郎を殺害する計画を立ててから、もう、十年余は経っていた。

最後の地になった名古屋を離れる前の少女期にすでに菊世は叔父を殺害しようと堅く心に誓っていたのだ。

岐阜県恵那郡遠山村上手向（かみとうげ）（現恵那郡山岡町）の地に立ち返ったとき、改めて菊世は叔父に対して憤りの気持ちを新たにされた。

父親を九歳で亡くした一年後、喪が明けてから、母親は旧家の習いで次男の公次郎と再婚させられた。

だが三年後、その母親も病気で亡くなり、菊世は公次郎の後添えとなった義母にも邪魔者扱いにされた末、他家に養女として入った。不幸な少女期を過ごした菊世は、長じても、ずっと、自分と母親を冷遇した叔父に怨念の火を燃やし続けてきたのだった。

この日、菊世は目立たぬふうには、白の木綿のブラウスと、丈の長い黒のスカートを履いていた。水商売に身をやつした日々を悟られぬよう化粧も控えめにした。

九月に入ったばかりの一日、暑さはまだ本格的だった。じりじりと肌も焼けそうである。初めに菊世は山岡の駅頭にあるお休み処の看板の出た茶店に入った。

かき氷の文字を見つけ、涼を取りたくなったのだ。じつとりと汗が肌に浮き、胸の谷間に汗のたまっている感じに、菊世はそっとハンカチで首のあたりを押えた。あたりに気を配る。

この地を後にしたのは、義父の公次郎に嫌われ、浅野克巳の家に養女として出された十二歳のときだから、ここ山岡の地に来たのは、菊世にとっては九年ぶりのことになる。

茶店には他に人の姿はなかった。

土間にテーブルが三つ、座敷ふうには作られた畳敷きの席には座卓が二つ、座席の数は全部合わせても十数人分しかない。

菊世は土間のいちばん奥の席に後ろ向きに座った。

竹で編んだバスケットを、椅子の傍らに置いた。

注文をしたかき氷がテーブルに運ばれた。

店の女は裏が畑になっているので、客を置いて、その畑に出た。お陰で菊世はあれこれ口をきかなくて済み、助かった。

義父の公次郎は、菊世の父である精一を憎んでいた。

旧家の習いで長子にだけは学を授ける習があり、精一が祖父について四書五経を学び、まわりの者の期待もあって大事に育てられ、名古屋の医学舎（現名古屋大学医学部）に入り、内科医を志し



たのに比べると、次男の公次郎はいわゆる働き蜂で、小作人相手に、農事に従っていたことから、どうしても、権付く張って生きる術を身につけたようなところがあつた。その分、菊世の母さちや、菊世には辛く当たつたのだ。

しかし、そのような公次郎の生い立ちとは関係なく、菊世は叔父を殺害する目的だけは失わずにきた。

その罪状を上げればきりが無い。

公次郎は母のさちを虐待し、放蕩の限りをつくした。揚げ句に心労の末、母が病死をした。その後、邪魔者扱いにされた菊世は他家に養女に出されたのだった。

もらわれた先は貧農だったので、菊世は十三歳で紡績会社の工女に出され、十五歳になったとき、すんでのことに、身売りをされそうになった。

その話にも、公次郎が加わっていて、菊世は着のみ着のまま、もらわれた先の浅野克巳の家から逃げ出した。

このとき、生家を出るときに持ち出した一冊の本だけが、結局のところ、父親の遺品となつた。女流歌人の合著歌集『恋衣』で、与謝野晶子、山川登美子、増田雅子らの作品が、この本には収録されていた。家を出るとき、この本だけを後生大事に書斎の本棚から持ち出したのは、父親が口癖のように、「菊世は大きくなると、『乱れ髪』を発表した与謝野晶子のような歌人になるといい」と、口にしていたからである。

それ以来の女一人暮らし、菊世自身は世に知られた歌人でも何でもなかったが、父親が願つた通り、一応は歌人の道を選んだ。

もつとも、名を為す前に、横瀬菊世は、人としての道は誤ってしまったということになるのだが……。

かき氷の冷たさがつーんと目に染みた。いつか、公次郎に罵られ、拳固が目頭に当たつたことがある。そのときの痛みを菊世はついつい思い出した。そのまま、放っておかれた菊世は、一晩、目頭を押え、痛さに呻いた。痛むほうの目の玉を自分でえぐり出し、公次郎の眼前に突きつけてやりたいとさえ思つた。

菊世は母親を失くした後は、自分しか頼る者がなく、気性の強い女の子として育つた。

この一事を思い出したことで、山岡の地にやって来たという思いが、なお、強まつた。

このとき、二人の男が茶店に入つて来た。

カンカン帽をかぶつた男は、四十代前半、もう一人の短い髪の男はまだ若かつた。

「こう暑いと、日陰にいるしか仕様がねえ。あーあと。足が棒になつちまつた。一休みさせてくんさう」

「ご苦労さんなことで。冷たいもんでも」

茶店の女は畑仕事で汚れた手を、水道口で洗いながら言った。

「安月給だね。ラムネを一本くんさい」

男たちは靴を脱ぎ、座敷の間で足を伸ばした。菊世の席からは男たちの姿は見えない。が、男たちは、この地では見かけぬ女が、茶店にすることを気に掛けていた。

早々にかき氷を菊世は口に入れた。

菊世は金を払うと、茶店を出た。直ぐに顔を隠すように、表に出ると日傘を広げた。

一歩を踏み出す。

「えらい別嬪さんじゃな。ありや、どこの娘さんかいの？」

「さあ、初めて来んさつたお客なもんで」

茶店の女が中年の男に答えた。

男は岐阜県警恵那署の土岐広次刑事であつた。遠山村の村道で行倒れの浮浪者の死があり、その後始末をしての帰り道だつた。

お互い、顔を見知らぬ仲であつたが、土岐刑事と菊世が初めて顔を合わせたのは、この茶店ということになる。

この後、二人は追う者と追われる者の関係を深めて行くのだが、このときは、ただ、擦れ違つただけのことであつた。

菊世はもう茶店で会つた男たちのことなど気に掛けてはいなかつた。日傘で顔を隠し、足元を見詰めながら村道を菊世は急いだ。横瀬家の菩提所、隆慶寺のある釜屋地区に向け、小里川沿いに二十分ほど歩き、寺の外れの雑木林近くにある先祖代々の墓に、菊世は参つた。

もちろん、誰かの姿がないか、事前にあたりりの状況はたしかめた。

父と母の眠る墓前で手を合わせた。目につくので花も線香も携えてはいない。特に祈りの文句は口にしなかつた。

人を殺めるために故郷に舞い戻つた身、墓前にたたずむこと自体、許されぬことではあつた。菊世は早々に菩提所を後にした。

墓所のあたりには強い夏の日差しが照り返つていた。ここらあたりは内陸部なので、夏の暑さは格別のものがあつた。

菊世は去り際に、道の傍らで、咲き残りのリンドウの花を見つけた。

可憐な花だったが、もう花はしぼんでいた。

ちらりと横目で見やつた。あとは枯れていくだけの花だった。

2

九月二日の午後三時過ぎ、菊世は山岡から恵那を経て、鉄路で多治見の街に向かつた。名古屋に至る中央線の途中に多治見はある。

三等客車に揺られて、菊世は犯行目的地の遠山村から一度離れた。

多治見は母親の生まれ育つた地で、前々から一度、行ってみたいと考えていた。

客車の窓から見る濃尾平野は、黄金色の稲穂に揺れていた。

この鉄路は十五のとき蚕糸仲買人の花岡という男に連れられて、一緒に名古屋に向かうために、乗つたことがあつた。

苦しい思い出の一つである。

養父である浅野克巳が、菊世の身売り話のために、得体の知れない男を家に呼んだとき、菊世はその一部始終を聞きつけ、養家を飛び出した。自分の身売り話には公次郎も一枚噛んでいと思われた。

これまで、何回か、公次郎は養家にやって来、菊世の体に触れようとした。前回はいちばん露骨な行動に出た。養蚕小屋で蚕たちに桑の葉を摂餌させているとき、公次郎は小屋に入り込み、菊世を手籠めにしようとした。養蚕の棚をひっくり返した揚げ句、菊世の抵抗に遇い、公次郎はこのとき、菊世に捨て台詞を吐いた。

「まったく、この、くそだーけ（愚か者）が。お前なんぞ、そのうち、遊郭にでもたたき売つてやるでな」

その文句通り、公次郎は養家の者にその手配をさせたようだった。事実のほどはたしかめようはなかつたが…。

最初に公次郎を殺してやりたいと思つたのは、菊世が十二歳のときだった。

流産した母親が産婆のところを預けられていたとき、公次郎はのちに後妻になる女を納屋に引き込み、情事に耽つた。

そのとき、公次郎が母親のことを、

「早く、くたばりやええんだわ。あんなやつ」

と、口にしたのを耳にした。

結局、母親はこの後、体調を崩し、家に帰ることなく死んだ。かたちだけの葬式が終わり、何カ月かが経ったある日、公次郎は臆面もなく、少女を性の対象としようとした。

夏も終わりの日のことで、誰もいないのをいいことに、菊世は公次郎に母親の代わりをやれと言われ、夜中に忍び入った公次郎に力づくで裸にされた。

公次郎の息は酒臭かった。

女を納屋に引き込んだ場を菊世は目撃していたから、その求めが何であるかはおおよそ見当がついた。裸に剥かれた後、必死になり、菊世は抵抗をした。まだ、少女の細い体だったが、菊世は馬鹿力を発揮していた。難は逃れたが、公次郎は腹いせに、裸のままの菊世を大きなヒノキの木の幹に縄で縛りつけた。

一晚、そのまま、放置されたため、菊世は藪蚊の餌食になった。

母親に代わり、家事を任されたが、公次郎の思うようにはやれず、その度に菊世は折檻を受けた。髪の毛を引つ張られ、階段から引き落とされたこともある。

気性の強い分、言い返すと、

「父親の血が流れているから高慢ちきな性格までそっくりだわな」と、悪し様に罵られた。

その後、公次郎は後妻を迎え、菊世は邪魔者扱いにされて、浅田克巳の家に養女として出されたのだ。その浅田の家でも、働かされるだけ、紡績工場に勤めて得た賃金は、養育費として徴収されていたので、菊世の手元には何も残らなかった。

その揚げ句がこの身売り話であった。

身を寄せるところもなく、菊世は紡績工場に時々顔を出していた蚕糸仲買人の花岡を頼りに、中津川の町に山越えをしてたどり着いた。花岡は年齢は四十半ばだが、背広姿の似合う伊達男で、その男振りと合わせて、女工たちの間では、結構、人気のある男だった。

仲間の女工の一人が、花岡の定宿の名をなぜか知っていて、自慢げに口にしたのを、菊世は聞きつけていた。

それで、好感の持てる花岡に助けを求め、菊世は裸同然の姿で、花岡を訪ねたのである。が、定宿を見つけたが、菊世はさすがに気遅れがした。麻織りの単衣に、申しわけ程度の赤い帯、長時間山道を歩いてきたので、藁草履は擦り切れ、体は汗臭くなっていた。

結局、うろうろしているところを、宿の者に怪しまれ、やっと来意を告げ、菊世は花岡と会うことが出来た。

花岡は自分が住む名古屋に菊世を連れて行き、身の振り方について考えてやると言った。が、おきまりのことだったが、この夜、菊世は処女の身を花岡に捧げた。

湯槽式の洋風呂を使うよう菊世は言われ、どうして入ればいいのか戸惑った。当時は鉄釜の下部に敷き板を沈めるか、下駄を履いて入る様式の五右衛門風呂が多く、この洋式の風呂に菊世はそのまま入るものだと知らなかった。

次に布団の敷かれた奥の部屋に菊世は伴われ、花岡の好色な目に長時間、裸身をさらした。手足を硬直させて、ただ、菊世はじっとしていた。

女にされたことには何の感慨もなかった。

行灯（あんどん）に一匹の蛾がまつわりつき、ばだばたと羽をたたきつけているのだけを、菊世は目に止めていた。

菊世は翌日、名古屋に行き、花岡に縫製工場のお針子の仕事を世話されたが、実質は花岡の囲い者の立場を選ばされた。

数カ月後、菊世を見つけ出した花岡と叔父の公次郎との間で、いざこざが起きた。

公次郎はこのとき、菊世に悪口雑言を浴びせた。父親の精一と自分との幼少時の扱いの違いから、

兄のお古の女を貰ったことまで、洗いざらい、これまでの不満のほどを公次郎は菊世にぶつけた。菊世もこのときは、負けずに言い返した。

公次郎は悪し様に罵るときの口癖である「くそだーけが」と言う文句を連発した。花岡と公次郎が、菊世のことで、一騒動を起こし、金で解決する話しがまとまりかけたとき、菊世は花岡の元を離れ、少しばかり貯め込んだ金を懐に東京に出た。

それ以来の根なし草の暮らし、菊世は自分の運命を呪って生きているようなところがあった。

この日の午後遅く、菊世は多治見の街中に身を置いていた。

伊勢湾に注ぐ庄内川の川端は造り酒屋の白壁が続き、柳の枝がわずかな風に揺れていた。このあたりに足を運んだのは、母の生家が造り酒屋の一つだったからである。

よくは覚えていないが、菊世が五、六歳の頃、母に連れられて、夏の一日、この里に来たことがあり、菊世にとつては多治見は思い出の地であった。

祖母に買ってもらった赤い鼻緒の駒下駄は、裏に小さな鈴が仕込まれていて、浴衣姿の菊世が一步を歩むごとに鈴の音が鳴った。

石垣造りの岸壁のそばには、空樽を運ぶ小舟が何艘も浮いていて、菊世にはその小舟に乗った思い出もある。記憶を頼りに、昔の船着場のあった場所を菊世は探したが、十五、六年前のことで、あたりの様子も違っており、結局は母の生家にはたどり着けなかった。

わざわざ、母の生家を人に尋ねるのも、この場合、菊世には望ましいことではなく、昔ながらの柳並木を目の端に止めただけで、菊世は感傷に浸るのを止めた。

多治見駅から午後五時には汽車の便を利用し、中央本線から明智線に乗り換えた。明智線は前年に開通をした。

菊世は目的地の山岡駅とは一つ手前の岩村の駅に降りた。

この夜は野宿する気だったので、菊世は蚊取線香や、わずかな食糧、それに犯行に必要な偽装の品などを買い揃え持参していた。

午後七時過ぎに岩村駅に着いた。

駅に降り立った者は数人で、すでにあたりには薄い闇が立ちこめ始めていた。

菊世は誰かに気づかれたということにはなかった。菊世は列車をやり過ごした後、改札口は通らず、こっそりと、土が盛られた小駅のプラットホームから線路に飛び降り、直ぐ横手の雑木林に分け入った。

どこか身を忍ばせる場所を見つけ、何日でも、目的を果すまで、機会を窺う気になっていた。列車の窓から村の鎮守社を目にした。

山の斜面にあり、暮れて行く風景の中で、その一角だけは開けて見えた。

駅から一キロほど戻った。

菊世はその祠堂（ほこらどう）を仮りの棲み家とした。

一休みする間もなく、菊世は買い求めた男物のズボン履き、人目をごまかすために、予め用意した大きめの地下足袋と、凶器の黒出刃を小脇に抱えた。

山岡まで一駅、菊世は線路伝いに歩き、目的の駅までたどり着くつもりだった。距離にして、七、八キロ、女の足で二時間は要する道のりであった。

青白い月明かりに照らされた線路道はくねくねと曲がって、どこまでも続いていた。谷地の近くを歩くと、螢が草むらに群れていて、闇が仄かに息づいた。人の足音を聞きつけてか、何匹かの螢が舞った。幻想的な光景であったが、菊世には人魂のように見えた。

無念の思いのまま、この世を去った母への思いをさらに強くした。母へのそんな追慕は、父への思いにもつながる。父母の慈しみを受け育っていたら、菊世は心おきなく、好きな短歌の道に進んでいたはずだった。

だが、いまは、殺人者になるための一步、一步を菊世は記していた。レールが切れた。月が雲間にいつとき隠れた。

真つ暗闇の道になった。

蒸せた風がのったりと菊世の身を包もうとした。

やがて青い月光が、再び、差して染めてきた。

二本のレールが菊世の行く手をはつきりと写し出した。

狭まったその先の道に〈魔の気〉が指し示され、菊世の一步を誘っていた。

淡い月明かりに照らされた遠山村は、低い山々に囲まれており、多くは水田地帯だった。

戸数は百戸ならず、夜ともなると、どこにも人の姿を見ることはなかった。

まだ、暑さの残る季節でどこの家も不用心であった。住んでいるのは顔見知りの者ばかり、村人たちはこの夜も安穏な時を過ごしていた。

菊世が遠山村上手向の地に着いたのは午後九時過ぎの時刻のことであった。菊世は計画通り、十文半（二十五、四センチ）の地下足袋を着用し、用心のため裏の竹林を伝って、敷地内に足を踏み入れた。あたりは桑畑に囲まれていた。この季節、秋蚕の成育が盛んなときで、叔父のところも養蚕の仕事をしているようだった。

別棟の中二階造りの建屋に明かりが灯っていた。その棟は二棟あり、板壁には何カ所か、通風窓があり、その開き扉は内側からつかい棒がされていた。

少女の頃、菊世も養蚕の仕事は手伝わされたから、蚕小屋の造りはわかっていた。

公次郎に関して言えば、少女の頃、養蚕小屋で菊世は手籠めにされかけたことがある。あどときの屈辱感も忘れずに、菊世は生きてきた。性の対象としてしか、自分を扱わなかった男、そのように菊世は公次郎の顔を見てきた。いまも、その考えは変わらない。その後の自分の男遍歴の一つも、ずっと、男性不信の思いを持続させたまま続いてきたように菊世は思っていた。その点を言えば、養蚕小屋に関しては、菊世には特別の思い入れがあったことになる。

菊世は身を屈め進んだ。菊世は蚕小屋に公次郎がいることを願った。

一つ目の蚕小屋には人の姿はなかった。

中二階造りの蚕小屋の内部には三段の高架式の蚕棚が並んでおり、桑の葉を蚕食（さんしょく）する蚕たちのざわざわとした咀嚼の音が聞こえた。

菊世からすれば、醜い虫たちだった。

繭玉（まゆだま）になると、白い輝きを放つようになるが、熱湯で煮られた後の繭玉は油臭い臭気がして、いつだって、菊世は紡績工場では吐き気を覚えていた。

日本手拭いで顔を隠し、軍手をはめた女はやや小柄に見えたが、大の男のように肩を怒らせた。歯をきりりと噛み締めた。

もう一つの蚕小屋に体を移動させた。通風窓から中を窺うと、一階の床部分に立つ男の後ろ姿が見えた。菊世はその棟に忍び入る。

目の前に幅二メートルほどの板床の道が伸びていた。その両側に蚕棚が立ち並んでいた。男が棚を移動した。中二階に上がるべく、木ばしごの一つを利用し、上の棚に向かった。四十ワットの裸電球が何カ所か、天井からぶら下げられているので、人の顔は見分けられる。

菊世はその男が公次郎であることを確認した。

板床は埃っぽかったが、かえって、菊世には好都合であった。菊世は大きな足跡をこの場に残しながら、公次郎の後を追った。別のはしごを見つけ足を掛けた。中二階の板床の端に自分の首を据えた。公次郎の二本の足が見えた。中程の場所で蚕に餌を与えていた。

菊世は板床の上を腹這った。

(とうとう、あいつを殺る時がきたわ。わたしの半生をいまのように惨めなものにした張本人こそ、この男よ。わたしはいまからだって、自分の人生をやり直したい。でも、その前に、この男とわたしとの間にある貸し借りに決着をつけなくちゃ。わたしのため？父と母のためでもあるわ。死者に鞭打ち、この男は生きて来たのだから。父母への恨み？勝手な理屈よ。わたしがその恨みを受ける理由もないし。そんなことより、不幸を負わされ生きて来たわたし自身の恨みを晴らすべきなんだからわ)

菊世は頭の中を整理した。

その分、落ち着いていたことになる。そんな醒めた感情の持ち方に、菊世は怒りの思いを奮い立たせるべく、一層に公次郎への憎しみを掻き立てた。

公次郎の背後にまわるために、少しづつ、菊世は位置を移動させた。一段隣りの蚕棚まで近づき、息を整えた。

菊世は腰に差していた黒出刃を抜くと、柄の部分を強く握り締めた。顔の覆いを取った。次に風のように、菊世は公次郎の背後に立っていた。ちょうど、公次郎は刻んだ桑の葉を亀甲(かめのこ)ざるで、蚕棚にまいてるところで、前屈みの姿勢になっていた。

その機を逃さず、菊世は黒出刃を背後から振りかざすと、公次郎の背中目がけて、両手で支え持った黒出刃の刃先を、力いっぱい、突き入れた。心臓のあたりを狙った。

不意を襲われ、公次郎は「うっ」と呻きの声を上げた。ざるを放り投げると公次郎は上体を前倒しにしうつつ伏せになった。

上体を二つに折りもがいた。その動きの中で、一度、あお向けになり、いったいに開いた両目を自分に危害を加えた者の方に向けた。

「誰だかわかるよね。菊世があんたを殺しに来たのよ。殺されても当然よね、あんたは」

「き、菊世か……。この淫売女が」

公次郎は深傷を負っていたが、一度は立ち上がり手向かうとした。が、力及ばず、手は空を掻いただけだった。

「どうせ、死ぬのよ。どう？助けの聲が上げられる？もう無理でしょ。わたしはあんたを絶対に殺す気だからね。さあ、叫びなよ」

「うーっ、お、おめえ」

もはや、公次郎には人を呼ぶ余力はなかった。血が口からごぼつと噴き出た。あたりの床に血がのつたりと流れていた。公次郎はその後、口だけをばくばくさせた。

「くそだーけどでも言ったらどう？そう言われると、わたしはね。昔のことをみんな思い出せるのよ。もっと、もっと、あんたが憎くなるわ。さあ、言いなよ」

勝ち誇った菊世のその声に、公次郎はすでに組み敷かれていた。虫の息になっている。

「ほんとうに殺してやるよ。顔をちゃんと見せてやったんだからね。じわじわ、殺してやりたいけど、時間がないわ。あの世に行ったらわたしのお父さん、お母さんに謝ることね」

すつかり弱った公次郎の体の上に馬乗りになると、菊世は二太刀目を見舞った。黒出刃は真つすぐに突き下ろした。肋骨を掠めたのか、がきつという骨をこする音がした。

黒出刃を抜くとき、新たに傷口から血のしぶきが上がった。公次郎の全身が痙攣した。血糊のついた足跡を残しながら、菊世は蚕小屋から外に出た。

元来た道を小走りに戻り、裏の竹林に入った。

まわりを見まわす。

あたりはしんとしていた。

藁葺きの母屋の屋根が押し潰されたかたちに見えた。もっと大きな建屋に見えたのに、いやに低く見える。十二歳で他家に預けられた身、小柄の少女の背丈の分、母屋の屋根は高く見えたのだろ

うか。

菊世は暗い夜道を山伝いに歩き、村を出外れてから、途中、中津川の支流で血の匂いを消すために水浴びをした。

元来た道の線路道をたどった。鈍い月の光りを照り返したレールは、なぜだか、ゆらゆらと揺らぐように動いて見えた。真つすぐなはずの二本のレールが先に行くほど、ぐねぐねと曲がっている。いや、足元のレールも、歪つな形になっていた。

人を殺したのだという思いが、急に実感となって沸いて出た。菊世は知らぬ間に、足早になっていた。

岩村駅近くの鎮守社に戻ったのは、もう、夜半を過ぎた時刻だった。菊世は祠の下に穴を掘り、証拠になる物はすべて埋めた。この後、着替え、菊世は岩村から恵那に向けて、行程二十キロ、朝まで歩いて、恵那の街中に出た。ただ、闇雲に線路道を歩きに歩いた。何かの影を追い払うかのよう。

朝の気配が忍び入った頃、やつと、人のいない農具小屋があるのに気づき、一休みをした。名古屋行きの列車が来る時間まで待った。

この日のうちに菊世は東京に戻った。目的を達したら、もう、用のない土地であった。

4

岐阜県警恵那警察署の土岐広次刑事が、横瀬公次郎殺人事件の一報を受けたのは、九月三日の午前九時過ぎのことであった。

山岡駅前の駐在所の巡査から、電話で連絡があり、本署からの捜査員派遣の要請がなされた。

恵那駅から山岡駅に、部下の刑事二人と土岐刑事が到着したのは、それから一時間余の後だった。家人が異変に気付いたのは午前二時頃のこと、駐在所の巡査が自転車を漕ぎ、駆けつけたときは、すでに、公次郎は絶命していた。

捜査が始まり、土岐刑事は次のようなことを確認した。横瀬公次郎が襲われたのは、養蚕小屋の中二階、背後から一突きされた最初の一撃が致命傷と思われた。現場には血の付いた地下足袋の跡が残されており、その足跡は十文半、加害者は男という一応の判断が下せた。血の付いた足跡には一つの特徴があった。少し足を引き擦る癖があるのか、血の跡はどれもはっきりとは地下足袋の足紋を印していなかった。特に爪先の部分が欠落している足紋を多く見受けた。

しかし、土岐刑事に犯人像はつかめていなかったから、特にこの点を追及する気はなかった。犯人の歩き方に癖があると、記憶に止めた程度のこれは印象であった。

金品は奪われていず、また、母屋にいた者は対象とされていないことから、横瀬公次郎個人に対する怨恨説が成り立った。殺害法も止めを刺していることから、横瀬家の事情に詳しい顔見知りの者ではという説も捜査員の中では確認された。

恵那署には特別捜査本部が設置された。

横瀬公次郎は村では余り評判のいい男ではなかったもので、聞き込み捜査では、いくつもの複雑な人間関係が明るみに出た。

一つは後妻が他に男を作り、離婚話を持ち上がったこと。妻の間男騒ぎは、元々は公次郎の女性関係が因で、どちらにも非があること。

また、長年、小作人をつとめてきて一家が、干拓地に入植することになり、いくらかの資金の提供を求めたが、断られ、一悶着あったこと。それに金貸し業もやっていたことから、債務の取り立ての件で、いざこざがいくつもあったことなどである。

しかし、一週間経った段階でも、有力容疑者は現れなかった。状況証拠、犯行の残忍性から、犯人は壮年の男と捜査本部が見当を付けていたので、犯人像にせまることはできなかったのだ。

一つだけ、土岐刑事が気になっっていることがあった。怨恨説に立つと、血縁者の線も考えられた。その一人に、長男精一の娘で、故郷を離れている横瀬菊世の存在があった。

横瀬家の事情に関しては、地元の高慶寺の住職が詳しいと聞き及び、土岐刑事は一日、高慶寺を訪れるべく山岡の駅に降り立った。やはり、暑い一日のことで、土岐刑事と部下の若手刑事の二人は駅前通りにある茶店で一服した。捜査のため、殺人事件発生のおかげから、もう、何回か、この地に来たが、茶店に寄るのは、久しぶりのことだった。

「な、そう、さわぐ（急ぐ）こともないやろ。一服していいか」

地言葉をまじえて言い、土岐刑事はラムネのびんを指さし、二本指を突き出した。汗の染みたカンカン帽をとり、空いた椅子の上に置いた。腰にぶら下げた手拭いで額や首筋の汗を拭いた。

「この前は行き倒れ、今度はほんものの殺人事件、えらいことやで」

「本当にね。怖い話だわね」

茶店の女主人が応じた。

「ん？それはそうと、あのおとき、見慣れぬ別嬪さんが、ほれ、隅っこの席に座とったよ。えーと、待てよ」

と言い、土岐刑事は手帳を取り出すと、この山岡の地にやって来た日付けを確かめた。

「九月二日か、間違いない」

「何かあの女性と関係が？」

若手の刑事が訊いた。

「いや、何の関係もないことじゃろ」

そう言うってから土岐刑事は一人、「ふむふむ」と他人にはわからぬ独り言を口にした。

「ね、おばさん、あのおときの若い女性のこと覚えてみえる？ともかく、ちらと横顔を見ただけだが、色白でえらい別嬪さん、このあたりでは見かけん女（ひと）やったな」

「ここいらの女（ひと）やないわ。わたしはようは見とらんからどんな女か覚えておらんがね」

「なんか、例の事件の噂しちよらんかね？前の当主は偉い人だったそうだけど、被害者は死人に鞭打つようだが、あんまり、評判はよくはなかったようだね」

「あの人は権つく張ってばかり。それにえらい女好きで、派手だったから、家作も傾いて、小作人を大事にせんでねえ、逃げられる始末だーね」

女主人は土岐刑事がこれまでに耳にしてきた風評と同じことを口にした。

ラムネを飲み干すと、二人の刑事は茶店を後にし、高慶寺を目指した。

この道は横瀬菊世が九月二日、茶店を出てからたどった同じ道筋だった。

もちろん、二人の刑事の頭の中には、まだ、横瀬菊世の歩いた道筋は見えてはいなかった。住職の井崎隆見が二人を迎えてくれた。七十近い住職は遠山村の壇家のことなら何でも知っている人物である。

土岐刑事の求めに応じ、隆見和尚は近頃の横瀬家の不幸続きに触れながら、横瀬家の家系について語った。余談だったが、横瀬家の家譜なるものも土岐刑事は聞かされた。戸籍上は『平民』だが元は同地の城主の直系の武臣で、武田勝頼に滅ぼされて以来、一族の生き残りは刀を捨て、上手向で百姓に転じたという。

この和尚の話は事件とは何んの関係もなかったが殺された公次郎の兄の精一と、その家族に話しが及んだとき、和尚は一人娘菊世の不幸な生い立ちのことを土岐刑事の耳に入れた。長男が生きていれば、精一が地方には珍しい教養人で、医学も学んだことから、横瀬家は素封家として、村人の信頼を集めたらうし、また、次男の公次郎と折り合いが悪く、他家に少女の頃、預けられた遺児の菊世は、父親さえ健在なら、高等女学校ぐらいは行かせてもらったであろうことを、和尚は口にした。岐阜から名古屋に出た後、菊世の行方はいまのところわからないとも和尚は語った。

「その菊世さんじゃがね。両親のお墓参りもせずに、ずっと、どこかで暮らして来たんじゃないか」



「本人は村を捨てた気やろうけど、上手向にもどって来りゃ、死んだ両親に親不幸を詫びに、いっぺんでもこの寺に顔を出すはずじゃが、故郷には帰れん暮らし向きなのかも知れん」

「お墓ほどのへんにあるんかね」

「寺とは地続きになつとるが裏山の麓にある」

「どうかね。九月二日のことやけど、横瀬家の墓前に花が供されておったとか、誰か墓参りをした者はなかったやろうか」

「うーむ。小高い丘になつとるから、誰が来たのか、ようはわからんが、そのようなことはなかったようだな。供花も見かけなんだ」

和尚が土岐刑事に答えた。

九月二日の暑い日、山岡駅前茶店で見かけた若い女の美形の横顔が土岐刑事の頭の中には思い浮かんでいた。

（あの女はもしかしたら横瀬菊世なのではないか？）

気のせいかな、横瀬の家で入手した菊世の六歳時のお河童頭の写真と、類似しているところがあるように、土岐刑事には思えた。

土岐刑事は隆見寺を辞した。横瀬家の過去に関する情報をいくつか得た。同僚の刑事と二人、一応、墓地のある場所に足を踏み入れた。山に通ずる一本道の途中に、墓地へと上がる細い坂道があった。上がり切るとそのあたりは砂地で、草葉がひとかたまりに茂ったあたりにすっかり花のしぼんだ鬼ユリがあるのを見つけた。

別に土岐刑事は何の感慨も持たなかった。

ただ、そのそばを通り過ぎただけである。

今日は九月九日、事件発生から、一週間が経過していた。

二人の刑事は横瀬家の墓に参った。新仏が出たことで、菩提所には新しい供花が飾られていた。二人の刑事は犯人逮捕を墓前に誓い手を合わせた。二人は墓地を後にした。

帰り道、土岐刑事は無口になった。

（現場に残された十文半の地下足袋の足跡痕？男なら菊世ということにはならない。もし、犯人が女だしたら？そしてその女が横瀬菊世なら？多少無理があるが、怨恨説が成り立たないわけではない。横瀬菊世のその後の人生を、一応は追ってみる必要があるが、そうだな）

土岐刑事はこの時点で、横瀬菊世という女に強い関心を持ったのだった。

（昭和十年四月八日）

ゆつたりと荒川の流れが下流を目指していた。花曇りの空だったが、春の暖気は生ぬるく、土堤道で遊ぶ子供たちの姿も活気に溢れているように見えた。

横瀬菊世は荒川沿いの一郭に居を構えていた。それで散歩がてら、よく荒川の土堤道を歩いた。秩父山中を源流とする荒川は水の流れも清く、水面に浮いて見える小魚を求めてか、くちばしの鋭い小鳥たちが、時折り、水面を這うようにし走った。

いまは春の季節だから、柳の枝が青めいて、風に吹かれている様も、いかにも、のどかそのものであった。

だが、菊世の心には鬱々としたものが滞ったままだった。

宮城拘留所から戻って五日の日が過ぎていた。面会が適わなかった分、菊世はまた手紙を書こうかと一度筆を取ったが、気が進まず止めた。

何か空しいことに思われた。これまで通り、綿々と嘘偽りの恋情を書き綴るのか？いくら文字を連ねたところで、勇二には自分の心のうちを見透かされそうな気がした。

山形での殺人行の後、菊世は山中で勇二と約束した通り、逮捕され、拘留所に収監された勇二に面会に行った。共犯であることを隠してもらおうためのぎりぎりの選択をし、菊世はその約束を果たした。情人のような顔をして訪れるのには問題があるので、知恵を絞り、女流歌人に身を変えて菊世は訪れた。面会にやって来た菊世のことを、勇二は何と思っているかわからなかったが、ともかく、世間の目はひとまずは欺くことはできなかった。

しかし、菊世は自分の身辺に危険な匂いも嗅いでいた。半年前の話になるが、山形から单身もどつた後、菊世は同じ水商売の仕事を見つけ、神田のカフェーの一軒に潜り込んだ。その店で、前に顔見知りの陶山利道という男と会った。商品相場の情報屋をやっている男で、カバンの中にガリ版刷りの資料を持ち歩いていたので、カバン屋と陶山は自ら称していた。勇二はその客の一人にされ、相場に失敗して身を持ち崩した。陶山のところには犯行の動機づけを確認するために、山形から刑事も訪ねていた。勇二と連れ立って陶山は、前の店では遊びに来たこともあり、菊世は陶山と知り合っていたのであった。

その陶山が妙なことを口にした。前の店を辞める直前、岐阜から刑事らしい男がやって来たというのであった。その刑事らしい男は、菊世がよく口にする地言葉の『くそだーけ』という罵りの声を耳にし、岐阜出身の女の子がいるのかと、店の支配人に尋ねたという話が、陶山から菊世に伝えられた。

そのことがあった翌日に菊世は店の客に借金があったことで、店を辞めていた。刑事らしい男が来たという夜のこととは菊世はよくは覚えていなかったが、店がはねる時間に店先で客と戯れ、そのような文句を口にしたようだった。

「くそだーけ」という文句には菊世なりの怨念の思いがある。

公次郎に折檻され、居汚く罵られるときは決まってこの文句を浴びせられた。その嫌な地言葉を岐阜の刑事らしい男が耳にした？菊世にすれば公次郎の恨みが自分を追い駆けているようにいい気

がしなかった。岐阜から来た刑事らしい男は菊世は自分の身边を洗っている男がいるのか？そのことを聞き知って以来、菊世は用心深くなった。

いまから一年半ほど前に起こした岐阜の殺人事件のことは、国会図書館に行き、地方新聞の閲覧を申し出て、自分の首尾のほどは確かめた。叔父の公次郎がほぼ即死の状態で命を失ったところまでは、新聞記事を読んで知ったが、それ以降の事件の推移については、菊世は知らない。

このところ日課のようになっている散歩をするために、菊世は荒川土堤に上り、川風に吹かれながら、外気に頬をさらした。

作歌の気持ちもあつてノートを開いたが、まとまらず、散策の道に出たのだった。外は歌を詠じるには絶好の季節になっていた。

（女流歌人？それも昔のことだわ。いまはわたしは歌を弄んでいる。短歌に託したわたしの情熱もいまは失われ、わたしは罪深いことばの遊びに耽っているだけ。それも、自分の保身のために。誰もわたしが殺人の片棒を担いだなんて知らないことだけど、勇二だけはその事実を知っている。勇二の殺人行為を促がしたのはこのわたしなんだから）

菊世は何度か口にした台詞をまた頭の中に用意した。

偽りの世を生きている自分にうそ寒いものを感じた。

と、このとき、目の前を駆けて行く子供たちの足音に、菊世は目を覚まされた。

同時に騒々しい鉦音（かねおと）を聞いた。

裸足の子供たちは土堤を駆け降り、軒を列ねた木造家屋の立ち並ぶ一郭に走り込んで行った。

「何かしら？」

菊世は一度立ちすくんでから、子供たちの後ろ姿を見送った。人の我鳴り立てるような、強い響きの声も離れた方角から伝わってきた。

菊世も子供たちの後を追った。

土堤を下り、細い路地路地をめぐって声のする方角に菊世は向かった。菊世は向かった。菊世は喚声のした方向に進むうちに、鉦（かね）、太鼓の混じり合った音を正確に聞き分けた。時折り、鬨（とき）の声も上がった。広い道路のある場所に出た。そのあたりに人が群れていた。

人垣の向こうに二十人余りの、白木綿の羽織り姿の男女が一团となっており、日の丸の旗や、墨書で文字を記した旗のぼりが何本も揺れているのを菊世は目にした。

旗幟りには、南無妙法蓮華経<sup>なむみょうほうれんげきょう</sup>とか、不惜身命（ふしやくしんみょう）<sup>ふしやくしんみょう</sup>などの文字が見え、真日蓮主義、正日蓮会<sup>せい にっ ぜん かい</sup>と団体の名が記されていた。

いま、世を騒がせている正日蓮会の先鋭の士が辻説法の行動に出ているのであった。

場所は日蓮宗の寺の門前で、いやがらせの示威運動の最中と思われた。

「日蓮聖人は時の権力者に妥協することを許さなかった。然るにエセ日蓮主義者は寺門の内に身を隠し、風雲急を告げる末法のいまの世に、ただ、教議のみを誦んじて日々の行いを為す。われわれ正日蓮会は日蓮上人を知り、いま、ここに邪宗の輩（やから）に鉄槌（てつづい）を加えんと立ち上がった」

青白い顔の青年が高い声を張り上げ、檄を飛ばしていた。説法に間合が入ると、すかさず、法華太鼓が打ち鳴らされた。

菊世はこの狂信集団の名は知っていた。世直しを叫ぶこの新興宗教集団は、官憲との間でトラブルを起こし、この教団の名は新聞記事にもなったので、菊世は承知していたのだった。

が、直接、正日蓮会の布教活動を眼のあたりにするのは菊世は今日が初めてのことであった。菊世の目は説法をしている青白い顔の青年に向けられた。油っ気のないざんばら髪に、白皙（はくせき）の面、目鼻立ちの整った男で、年齢は二十七、八歳、瘦身で背が高かった。

（この男はもしかして死に神？何だか、生き急いでこの世を生きているように見えるわ）

この独特の感じ方が、菊世のこの男に対する第一印象であった。どこか、菊世には惹かれるもの

があつた。自分もどこか生き急いでいる？文字を連ねる者としては、妖折した女流歌人や、小説家に憧れる気持ちがあつた。このとき、男は説法の途中で激しく咳込んだ。どうやら、菊世の見どころ、男は肺の病いに冒されているようだった。

透き通った肌色の頬に、そのとき赤い血の色が浮いた。

菊世はこの男に女の情欲が沸き立ってくるのを覚えた。あるいは母性本能を菊世はくすぐられていたのかも知れない。

女信者の一人がそばに寄ろうとした。だが、男は制し、再び説法を始めた。

菊世は今度は女信者を観察した。菊世と同じぐらいの齢で美形の女であつた。

上品な顔立ちをしていた。

（あの女は何？あの体の作りだとまだ男を知らないみたいね。腰のまるみもいま一つ、あの男を見詰める目も、あれはただの憧れ、とつても幼い感じよね。でも、さっきの介抱の仕方なんか、まるで、あの男の情人気取り、あの女、男に仕えている女？）

菊世の興味は別の方に向いていた。

このような考えを持ち始めると、菊世は同姓として、相手を許せなくなる質だった。

男を取り合うという状況にはないのに、男共の中で揉まれてきた菊世は、このとき、妙な敵愾心（てきがいしん）を燃やした。

（あの男をわたしが奪ってやろうか。何のために？ともかく、あの男に近づくことね。これって、とても刺激的なことだわ。歌を作るための情念の持ち方？そんな理由をつけてやるのも悪くない趣向よ）

菊世が識別した女の見分け方には、菊世のこれまでの男遍歴が色濃く影を落としていた。

菊世自身は本来なら生まれも育ちもいいはずなのに、両親を失くしたことで、生計（たつき）のために、男の匂いにもみれて生きてきたようなところがあつた。

本能的に、育ちのよさそうな女や、教養を振りかざした女を見ると、菊世はその存在そのものが許せなくなるのであつた。いまでも、そのような心の揺れの中に菊世は身を置いていた。菊世はもう一度、演説している男の顔を見た。

それから、傍らの女の顔を見比べた。

（お似合いに見えるわね。あの二人、どうなるのかしら？）

そんな興味の寄せ方で、この日のことは締めくくった。菊世は観衆の前の方に出ると、目立つように、男に熱っぽい視線を投げた。

白哲の面の青年は正日蓮会の教祖、城ノ内魁（かい）だった。疝高い美声と、聴衆を惹きつける説法の内容、そして何より攻撃的なアジェーションの技が巧みだった。

その後、また、正日蓮会は寺門と一戦を構え、小競り合いなどもあつて、そのとき、城ノ内魁の顔写真が新聞に載り、菊世は男が教祖であることを知った。

（城ノ内魁は何かわたしを惹きつけるものを持っている。あの男の文学青年っぽい脾弱さの感じがそうさせるのかしら。肺を病んでいる者特有の顔色の白さと少し熱を帯びたような頬の赤さ：死に神の匂い？いえ、男と女の情感がこれはなせる業かも知れないわ、きつと。わたしは城ノ内魁を自分一人のものにしたいと思ひ初めている。いえ、してみせるわ）

死刑の宣告をされ獄中にいる赤石勇二の身の上に嗅いでいると同じ死の匂いを、この時、菊世は、自分のその敏感な思いゆえか感じ取ったところもあつた。

やはりどこか気持ち不安定なのだった。

二つの殺人事件に関わつたことで、菊世は追われる者の立場にあつた。何か、自分の周囲で、それらのことが忘れられる刺激的なことが起きないと、菊世の気は紛れなかった。

城ノ内魁への妙な恋慕の仕方、そのような思いから発したことのようにあつた。

これは運命的な出会いのだと、激情家の菊世は自分に言い聞かせてもみた。自分のとるべく方

法について菊世は真剣に考え始めていた。

正日蓮会の布教本部は神奈川県・川崎市大宮町にあった。省線川崎駅の西口から歩いて二、三分の至近距離にあり、近くには国鉄川崎変電所のコンクリート造りの建物も見えた。

まわりの一部は畑地で、布教会館前は小さな広場になっていた。熱心な信者の一人、大津啓作が土地を提供し、浄財を集めて会館は昭和五年に完成をした。

正日蓮会の設立は昭和二年のことである。教祖城ノ内魁は当時二十一歳、布教歴は八余年、二十代そこそこの若さで、城ノ内魁は布教活動に手を染めたことになる。

新興宗教といっても、それなりの人材と地盤を確保していたので、正日蓮会は組織としてはいまは強固なものを誇っていた。

信者数も最盛時は関東中心に老若合わせて四百人はいた。

城ノ内魁と共に、会館には常時、数人の男女が寝泊りをしていた。

「先生は今日はお熱が三十七度八分もおありになります。少し静養なさって、本日の講演はお休みになったほうが」

加来貞子が教祖の男を諫めた。

頬のこけた顔だったが、いつも青白い城ノ内の顔が微熱のためか、貞子には火照って見えた。

「そうもならんだろう。日蓮上人様のお言葉がわたしの身を借りていまの世に甦ろうとしているのだからな。寸秒を惜しんでご奉仕する、この気構えを忘れたら、生きながらにしてわたしは死んでいることになる」

声を押さえて城ノ内はしゃべったので、慥したふうはなかった。

「先生、失礼します」

貞子は布団の中に手を入れ、城ノ内の脈を取った。暖かな手のぬくみに触れ、貞子は城ノ内のそばに付いている自分の幸せのことを思った。貞子は医者ではないが、薬科医専出で多少の医学知識はある。二十二歳の彼女は教祖の介抱役を任じられていた。

城ノ内は肺門リンパ腺結核の診断を二年前に受けて以来、初期症状だとたかをくくり、まわりの心配をよそに一度も医者には行っていなかった。結果を恐れていることである。

「貞さんの手はいつも暖かいね。それにとっても柔らかだ」

やはり、城ノ内の声は沈んでいたが、貞子を見詰める目には潤いのようなものがあつた。

感情を押さえているふうなのに、城ノ内の発した言葉は、やんわりと、貞子の身と心を包んでいた。

貞子のはつとし、思わず、脈を取っていた手を引っ込めた。

「脈は正確に計らなくちゃいけないよ。わたしは貞さんに命を預けているのだからね」

「はい」

と、だけ答えた貞子だったが、胸の動悸は治まらなかった。

貞子にとって城ノ内は憧れの人であった。入信して以来三年、貞子はこの崇敬すべき人物に恋心を抱いてきた。おずおずと、貞子はまた布団の中に手を入れ、城ノ内の脈を取るべく手首に触れた。脈音は正常だったが、貞子は自分の心臓の鼓動がそのまま、城ノ内に伝わるのではないかと、早々に手を引っ込めた。

「わたしは貞さんが好きだよ。だが、一人の女性を愛するわけにはいかない。わかるね」

城ノ内は重ねて、貞子が心を惑わすようなことを口にした。

「そのお言葉だけで、わたしなど……」

貞子は頬を染め、うつむいたままだった。

このとき、貞子の妹の道子が、この二人の戸惑いの間に、不意に舞い込んだ。

明るく、無邪気な声が返ってきた。

「先生、庭の黄水仙がね。一度に花を開いたの。花瓶に活けたほうが、わたし、きれいだと思って」  
開かれたままの障子の向こうに道子は立っていた。

黄水仙は花瓶に挿され、しっかりと、道子の胸に抱かれていた。

貞子とは三つ違いの妹である。

「先生はお熱があるの」

「いや、大丈夫だよ。いま、起きるところだった」

妹をたしなめた姉の言葉を制し、城ノ内は布団の上に半身を起こした。

顔立ちのよく似た姉妹で、二人共、双眸が美しい。切れ長で二重瞼、目鼻立ちの整った面は瓜実顔で、色白なところも似ていたが、性格は姉のほうが万事、控え目なのに比べ、妹は少し勝ち気なところがあるようだった。

「花をありがとう。わたしだけのためというのは気が引けるけど、この部屋にはみんな顔を揃えることもあるからね。でも、花のほうが恥ずかしがるかな」

「先生って面白いんだもの」

道子は浮き浮きし、書机の上に花瓶を飾った。後ろで一つにした髪を片方の側に束ねていたので、襟足の白さが城ノ内の目に止まった。

「あきさんと呼んでくれるか。着替えをしたら病人には見えないよ、きつと」

もう、若い女には無関心といった体で城ノ内は告げた。

「やっぱ講演会には」

「今日は蒲田の支部が出来て六年目だ。わたしが出ないわけにはいかないよ」

「信者さんが先生について、生卵を今朝届けて下さったわ。先生、お嫌いなようだけど、お体にはいいんですから、必ず吞んでいって下さいね」

「はいはい、貞さんの言うことなら何でもわたしはきくことにするよ」

城ノ内と貞子の仲の良さそうなやり取りに、道子が割って入った。

「お姉様は先生の主治医を引き受けているんだものオ」

羨ましげなしゃべり口は、やつかみを含んだものだった。ふくれっ面にもなっている。

姉妹が去った後に、佐川あきが片足を引きずりながら部屋に入ってきた。六十九歳の老婆はリュウマチ持ちで痛さを訴えることもあり、城ノ内はあきの世話になるのを躊躇っているふうもあったが、身の回りの世話をするのがいまはあきの生き甲斐である以上、甘えることに決めていた。

元は遊郭を転々とした身で、年老いて寄る辺もなく、浮浪者暮らしをしていたのを、城ノ内が声を掛け、会館内に住ませた。お陰であきは先祖のことを生き神様のように敬い、会館内で自分出来る奉仕活動に精を出し、その恩に応えていた。

「いつもすまないね。あきさん、足のほうはどうなんだ？これからは暖かい季節になるからあきさんもやれやれだね」

「はい、そう教祖様におっしゃって頂くだけで、あきはもったいなくて涙が出ます。ほんとうにうれしゅうございます」

あきは両手を合わせ、腰を低くしながら、首（こうべ）を垂れ、教祖に手を合わせた。

白の銘仙の着物に、黒の羽織り、白足袋、あきが城ノ内の身の整えを手伝った。

背の高い部分、痩せていたが、白皙の面に肩口までかかる長髪、秀麗な面立ち、暗い目の色を除けば、城ノ内魁の貴公子然とした容姿には、それなりの存在感が備わっていた。

正日蓮会は川崎・蒲田・小岩・江戸川橋・横浜・保土ヶ谷などに布教会館や支部などを有していた。

が、組織が大きくなったことで、正日蓮会は内部にいくつかの問題点も抱えていた。

軍国主義の台頭で、時代は多くの尖鋭分子を生んでおり、その風潮に呼応するかのように、正日

蓮会にも半年前に青年部が結成されていた。

城ノ内は蒲田の布教会館で講演した後、血氣盛んな青年部の連中と話し合いを持つことになっていった。

多少の体調の悪さを押しでも、教祖としてはその会合に出席せねばならぬ理由もあったのである。この会には貞子も介添え役の顔になり同行した。

「手ぬるい連中ばかり増えて近頃では正日蓮会のことを、おもらい教などという輩もいる。めしも食えない、職もない女、子供や老人が信者じゃ、われわれが旗印にしてきた日蓮聖人直参の考えも色褪せたものとなる。街頭布教隊は、これからは青年部にだけ任せて欲しいのです」

青年部のリーダー、沢藤修平が初めに口を開いた。いがぐり頭の目の鋭い若者であった。蒲田の布教会館に、この夜、正日蓮会をこれまで支えてきた主だった者が顔を揃えていた。教祖の城ノ内は床の間を背に上座に座っていた。腕組みをし、ただ、みんなの意見に耳を傾けていた。微熱のために体がだるく、少々、気力も失せていたせいもある。

日蓮聖人は文応一年（一二六〇）に立正安国論を時の執失権北条時頼に献じ、世の乱れ、宗教の正道を求めべく、意見書を自らの宗教観を基に提起したことで知られる。

内容は世人が法華の正法に背き、邪法、邪神を信じているから、善神は国を捨てて去り、悪鬼が入れ変わって世に災厄をもたらしているというもので、正法に就かなければ、内乱外寇（がいこう）の二難が起こるだろうと警告したものだ。

この献策は受け入れられず、日蓮は草庵を焼かれるほどの迫害を受けた。が、日蓮の予言通り、文永、弘安の時代に蒙古、元の外敵が来襲、日蓮の信仰的直感的中したことで、世人に認められることとなった。

だが、その後も日蓮への迫害、受難は続くことになるのだが、幾多の苦難を乗り越え、日蓮はその教えを伝えた人として知られる。

「先生の人徳もあって、これだけの同士が集まり、縁を得ることが出来たんだ。沢藤君の意見だと、この世で切り捨てられている弱者を邪魔もの扱いにしているようだが、彼らにこそ、本当の人の心があるんじゃないか。世直し、世直しと言っても、真に困窮している者たちに手を差しのべることも出来ずには、宗教とは何かを問い直さざるを得なくなる」

「それでは宗教とは何ですか？」

ここでは長老格の天津啓作に沢藤は食って掛かった。天津は教祖が一人で街頭演説をしていたときに共鳴をし、行動を共にしたいちばん最初の信者であった。年齢も四十六歳、言動にも重みがあった。対する沢藤は二十一歳、天津は日本橋の繊維問屋の主人、沢藤は工学校出で軍需工場の技師、お互い生まれ育った環境も違っていた。

「議題は青年部の活動についてでしょう。教学の勉強会ではないのですから、話は元にもどしましょう」

加来貞子がきっぱりとした口調で言った。

他に出席していたのは、古参幹部で教宣活動担当の松村安明。青年部の副リーダー、八木征治。

機関誌発行の責任者で小学校教師の前野里枝。加来貞子の妹、道子もオプザーバーの資格で顔を列ねていた。

「そうね。沢藤君の女子供という言い方には引っ掛かるものがあるけど、機関誌の文面もこの頃は、わかりやすく噛みくだいて表現するようにしているわ。わたしは、やたら難解で自分の生硬な考えを押しつける青年部のみなさんの文はあまり好きではないわ。自己陶醉していて、わたしにも理解出来ない部分があるのよ」

女子師範を出た二十七歳の教師の発言は、たつぷり皮肉も含んでいた。

「この前の沢藤さんの、国難を憂う。いまや人間革命の時」という一文、わたしにはよくはわからなかったわ」

加来貞子が臆せず同調してみせた。

「それはあなたが真の教学を知り得ていないからでしょう。英語のアルファベットを学ばずして、英語が読めますか」

「いまのはわかり易い話しね。加来貞子さんも教学をまだ極めたわけではないのですから」

前野里枝は沢藤とも貞子にもなく毒のある言葉をついた。インテリ風をどこかで吹かせていた。

この後、古参幹部、青年部、そして女たちの間でこれからの布教活動について議論が戦わされた。青年部は独自の活動方針を打ち出し、日蓮宗の総本山を称する池上の本門寺に本格的に攻撃を仕掛ける案を持ち出した。すでに、青年部の連中は何度か、本門寺の門前で、嫌がらせの街頭演説をしていた。

「志しのある男子は女になど心を奪われぬものです。妻帯者の坊主や、妾を囲っている坊主どもの墮落ぶりを見れば、そのことは明白ではありませんか。先生が潔白の身をこれまで通してこられたのをわれわれは範としています」

沢藤が熱っぽい口調で語り掛けた。

「わたしの若いときと一脈通じる心意気を感じるが、女、子供がどうのこうのというのはどうかな。世直しを言うなら、男性も女性も同等の人間と認識したところから、人間革命は起こる。現に熱心な女性の教学者もこの正日蓮会にはいるんだ」

城ノ内は居合わせた女たちに配慮をした発言をした。

沢藤ら青年部の者の発言は、多分にこの時代の狂信的な国家主義者、井上日召率いる右翼団体、血盟団の行動指針に影響されたものだった。

一人一殺を掲げたこのテロ集団は、昭和七年に起きた五、一五事件の発生する前、二月九日以前大蔵大臣井上準之助を東京・駒込の演説会場で射殺、続いて、日本財界の最高指導者であった団琢磨を三井本館前で射殺していた。

血盟団の首魁、井上日召は日蓮宗の僧侶で、陸海軍の青年将校とも一脈通じており、また、腐敗した日蓮宗の寺門に対して、不満を持っていた一人でもあったので、正日蓮会の若者に影響をもたらしていたのである。

城ノ内は青年部の者たちの独走を恐れたが、戦う集団としての正日蓮会の生い立ちを考えれば、阻止にまわるのは矛盾したことだと考え、この場はリーダーの沢藤を支持する発言で締めくくった。

古参幹部・女性信者と、青年部の者との間で、反目の芽がこのとき生じたのは事実だった。

(わたし自身が既成の宗門一派と真っ向から戦う気概をすでに失いつつあるのか)

城ノ内はまだ激論を戦わせている若者たちを横目にしながらふとそんなことを考えた。やはり、体にだるさが残っており、城ノ内は気力を欠いていたようだった。

正日蓮会の川崎本部の会館を、松ヶ谷葉が訪れたのは四月も終わりの頃のことであった。葉は髪をアップにし、首筋の白さを強調していた。

パーマが掛かっていたが、今日は控えめだった。万事、おとなしい感じを自分では心がけた。それで着物も濃紫に白上がりの細かい矢飛白(やがすり)の入ったものにし、からし色の塩瀬の帯、そして、胸元には紫色の袱紗(ふくさ)を葉は抱えていた。

お白粉はつけず、唇に薄い紅だけをさした。一見、生娘のようにも見えた。葉は二十三歳になるが、矢飛白はもともと娘の着るものだから、齡よりも二つか、三つは若く見えた。



初めに応対に出たのは加来貞子だった。二人はすでに荒川近くの街頭演説会で顔を合わせた間柄だった。菊世はあらためて、貞子の顔を見、じろりと爪先まで一瞥（いちべつ）した。

「松ヶ谷葉と申しますが、あのー、教祖様はいらっしゃいますか？」

「何のご用件でしょうか」

貞子と目が合ったとき、お互い、相手の心の内を読み取ろうとするのか、しばしの沈黙の間があった。

葉は凜（りん）とした女の美しさを見せ、たじろぐことのない強い視線を返した。

白い袍衣（ほうい）に薄紫色の袴（はかま）、巫女（みこ）姿を思わせる貞子は、引き締まった表情で葉に対した。

静かな女二人の対峙（たいじ）だった。心に映じ立った女の情火はお互い違っていた。受けて立った貞子は青い炎を心の内に燃やした。葉の妖しさの気（け）に同性として警戒心を抱いた。葉はちろちろ燃える勃（おこ）りの火を頭の中に描いたが、わざと、貞子からは視線をそらせた。逃げたのではなく、小馬鹿にしたふうに、葉はうつすらとした笑みを口元に浮かべてみせた。

「教祖様に取り継いで下さい」

次には高飛車に出た。白い首筋をきゅっと立てる。見様によっては獲物を探し当てようとする私たちの得意のポーズにも見えた。

「教祖様はお忙しい身ですし、信仰のことなら、他の者が話しをさせていただきます」

「それであなただは誰なの？」

「誰って：教祖様にご奉仕する者です」

「わたしは教祖様に直接お会いし、話しをしたいのです」

貞子と葉はお互い、譲らぬ構えをみせた。

会館の玄関に入った直ぐの場所は土間になっていた。上がり框（がまち）の板の間は三メートル四方はあり、貞子の体を小さく見せた。よく磨かれた板の間が鈍く光っている。

貞子の肩のあたりにはひんやりとした暗さがまとわりついていた。

切れ長の目の端が少し攣（つ）り上がっていた。貞子は息を詰めているようでもあった。

このとき、教祖の城ノ内が奥の道場間の板戸を開け顔を出した。

「何だね」

穏やかな声で言い、二人の女の顔を見比べた。白い袍衣に黒の羽織り姿、長身なので城ノ内には存在感があり、立ち居振る舞いには品格が備わっていた。

「教祖様のお弟子にわたくしも加えていただきたいと参りました。よろしくお導きくださいませ」

葉の態度は豹変し、その声もしおらしく、直ぐに面も伏せて見せた。

何人かの女たちが、城ノ内を魅力に惹かれて、直接、この会館を訪ねてきたが、特別の理由でもない限り、会館内に女性を住まわせることには城ノ内は応諾を与えないできた。

信心のほどもわからぬ者を教祖の自分が一々、取り合う要もないと考え、これまでは断わるのが常だった。

「わたしに弟子は必要ありません。正日蓮会は一人一人が内実、自らを日蓮様の教えに従い高め、布教のために行動することを本旨としています。まず、自己改革の実を結んでから本部をお訪ね下さい」

城ノ内の目の内に、葉は男が女を見るときの特有の恫（あか）りを認めたが、その目を葉は見返さずにおいた。

「それでは教祖様にお目を通していただきたくないので、わたくし、置いてまいりませぬ。歌の道にわたくし身を置いている者なものですから」

葉は袂紗（ふくさ）に包んだ歌集の小冊子を、上がり框の板の間にそっと置いた。わざとらしい所作だったが、城ノ内も貞子も咎（とが）め立てはしなかった。身を屈めた葉の仕草は控えめで、

ことを荒立てるほどのことでもなかった。

城ノ内から見れば、葉は別世界の女に思えた。花曇りの日で、土間に暗さが忍んでいたせいもあるが、葉は妖しげであった。

自分を誘惑するためにやって来た女の本性を、本能的にそばにいる貞子が嗅ぎつけているのを、このとき、城ノ内は痛いほど感じていた。

葉は去り際に念を押した。

「わたくし、また、まいります」

ていねいにお辞儀をし、暗い土間を擦り足で葉は出て行った。

城ノ内は葉の後ろ姿を見送ってから、葉の置いていった袱紗の包みを見遣った。

「歌集だと言ったな」

「わざとらしいですわ。先生の関心を買うためにこんなことまでするなんて」

「この荒んだ世の中だ。歌に心を託するのも心の平静さを保つ法ではあるよ。時間があれば目を通してみよう。宗教心というのは素直な自分を謳い上げるところにある。歌にその素直さがあるかどうかだ。激情もその心の表現ではあるが」

この城ノ内の言に貞子は逆らわなかった。乱れている自分の心の内を覗かれたくないという思いが貞子を制した。

「あとでお部屋のほうに」

「ああ、そうしてくれ」

城ノ内も平静を装った。

二、三日後、城ノ内は同人誌「花埋み」を手にした。発行年月日は三冊とも三年から、四年前の日付になっている。

ぱらぱらとページを繰り、城ノ内は松ヶ谷葉が綴った三十一文字を追った。歌そのものに、城ノ内は特に感応するものはなかった。

同人誌の主宰者、田丸素峰（そほう）なる人物の松ヶ谷葉についての解説文に興を引かれた。次のような一文である。

『忍ぶ愛というのがあるが、今の時代の歌詠みは、おのれを殺して生きなければならぬところがある。奔放なれ、自由であれと心の中で叫び続けても、寂滅（ほろ）びの時代、本来、歌詠みの心は奔放なものでなければならぬのに、今は暗い時代であって、歌の生命力が日々損なわれつつあるようにわたしは思う。だが、松ヶ谷葉という女流歌人だけは別である。女の性を高らかに謳い上げさせれば、これほどの才を見せてくれる女（ひと）はいない云々』

松ヶ谷葉の色香に惑わされたような一文だと、城ノ内は思った。

これを書き記した男のなよなよした姿まで瞼の裡に浮いて、城ノ内は正直なところ吐き気までした。

（心の遊びにしか過ぎない。人間が生きているという現実から目をそらした者たちが、詩歌の世界で文字を弄ぶのだ）

城ノ内は歌集を傍らに押しやった。歌誌を手にした自分の軟弱さを愧（は）じたのだが、『女の性を謳わせたら才を発揮する』という褒め文句の件りだけは、何度か読み返した。

とかくの風評を気にし、信者の女を近づけぬようにしてきた城ノ内だが、松ヶ谷葉にだけは、会った瞬間に、心を衝き動かされるものがあった。

男の本能の中にある好ましい女を見分ける嗅覚が、城ノ内の場合も働いていたのだった。

「城ノ内魁などと人を誑(たぶら)かす名をつけているが、本名は野瀬耕次か。出身は静岡県庵原(いはら)群小島(おじま)村小河内(現静岡市)で、貧しい漁師の四男坊、今様、日蓮気取りで、この男、何様のつもりでいやがる」

神奈川県警川崎署特別高等課の原島啓次郎課長は、正日蓮会のこのところの動向調査書に、改めて目を通しながら言った。

「わたしの知り合いの植木職人も正日蓮会の熱心な信者でしてね。どういうわけか、あそこの連中は喧嘩つばやいのが多い。その男も説法好きで、論に詰まって近所の者の胸倉を取ったところを一度、わたしが仲介に入りました」

特高課の主任、尾関孝雄が原島課長の相手をしていた。

「論難を恐れぬのが日蓮聖人だから、連中もその気になっているのだろう。日蓮宗の内紛なら、われわれもとやかく言うことはない。問題は世情の不安をいいことに、一般大衆を煽ることだ。それに右翼テロとの結びつきにも気をつけねば。池上の本門寺に押しかけている連中は討ち死に覚悟で直参しているようないでたちだ。白鉢巻きに白羽織り、黒袴姿、旗幟、あれで腰に二本差していれば、腹切り覚悟の武士(もののふ)と見間違える。あの勢いだと、それこそ、本門寺や、芝の増上寺を焼打ちにだってしかねない」

原島課長は背を真つすぐに伸ばし、眉に縦皺を寄せながら言った。大学出のキャリア組だから、刑事職から叩き上げてきた尾関主任より、原島課長は五つ年下の三十四歳だった。

「警視庁の意向はどうなんですか？」  
と、尾関が尋ねた。

お互い縄張り意識が強く、特に当時、神奈川県警特高課は、カナトクの名で呼ばれていたほど悪名高い存在だった。

「まだどこかの寺に火を点けたわけじゃなし、いまのところは共産主義者でもない。ただ、過激集団だから、何をしでかすかわからない。正日蓮会の本部は川崎にあるのだから、神奈川県警としては充分に動向調査をしておく必要があるということだろう。不祥事が発生したときに、警視庁に先行されても困る」

原島課長は尾関主任に神奈川県警特高課としての面子を強調した。

昭和の初め頃は、大正デモクラシーの自由な風潮を受け継ぎ、昭和デモクラシーなるものがまだ残っていた。その昭和デモクラシーは『左翼全盛時代』とも呼ばれ、労働運動、農民運動、また、学生、婦人運動も開花の兆しにあった。

だが、結社の禁止や、非合法とされた共産主義者の大量検挙などで、運動は弱体化し、昭和十年前後には、サーベルと軍靴の音とともに、民衆が蹂躪(じゆうりん)される時代がすでに訪れていた。

原島課長が口にした世情不安は当時の政治の混乱と、満州事変勃発による日本の国際社会での孤立、それに冷害による不況などの諸問題を含んだものだった。

厭世(えんせい)気分も蔓延し、一年間で一万四千人以上が自殺、その理由は『生活苦』『生きていてもつまらない』というものが大半を占めていた。奇異とも思われる正日蓮会の人気ぶりも、やはり、このような時代を反映してのことだったのである。

尾関孝雄は手元にまわってきた正日蓮会に関する資料に、一応、目を通した。

設立者の野瀬耕治こと、城ノ内魁は肺浸潤の病歴があり、徴兵検査は不合格となっていた。静岡県の実家での漁師という仕事には初めから興味はなく、耕治は尋常小学校を出た後、日蓮宗の寺に預けられていた。その寺から地元の中学に通わせてもらい、勉学に勤しんだ。日蓮聖人の御遺文、法華経に通じ、教条教理に通暁するのは、このときの彼自身の精励のゆえだった。

結局は破戒僧にも等しい行動をとり、耕治は得度する前に、世話になった寺に一通の書き置きを残して出奔した。十七歳のときのことである。

書き置きには墮落した日蓮宗を立て直す旨の論が展開してあった。

この日、尾関は川崎市内の自宅にもどると、特命を受けたわけではなかったが、正日蓮会の最近の活動状況を知るために自分なりの手を打った。隣り近所では尾関は県警の一刑事としてしか見られていなかった。特高課に籍をおいていることを誇りたい気持ちもあったが、いまは、黒子に彼は徹していた。

特高は通称で、昭和二年に全国の府県にこの組織は生まれた。特別高等警察を略して特高と呼んだ。戦前、思想犯の取り締まりに名を借りた悪名高いこの特高の暗躍があったことは、つとに知られていることである。

当時としては特高課に所属するのは選ばれた一員、尾関は着任七ヵ月、大いに張り切っていたのだ。三十九歳の男盛りだったが、尾関は自分の家庭では妻が病弱で、また、子供にも恵まれなかったことで、少し、世の中に対して、拗(す)ねて生きているようなところもあった。

植木職人の辻本伊佐次宅を、この夜、尾関は一升びんを手にもふらりと訪れた。

回りは寺町で、辻本の住む平屋の家の前は墓地になっている。他の宗派の寺ばかりで、日蓮聖人を信じる辻本には居心地の悪い環境かと思えた。辻本も近頃は不況をかこっている身である。世の中、不景気風で庭木の手入れも怠り勝ち、おまけに、得意先の寺とは宗派の違いで縁を切ったりで、子だくさんの辻本は生活にも困窮していた。

そのせいか、怒りっぽくなり、偏屈ぶりも増して近所の評判も余りよくなかった。

玄関口で尾関の顔に出喰わして、辻本は悪いことでもしたように初めから腰を低くした。

「今夜は一本下げてきたぞ。たまには近所付き合いも悪くないと思つてな」

「旦那がですかい？」

一升びんの効果は抜群で、酒に目のない辻本は警戒心を直ぐに解き、口元を緩めた。

辻本が酒にだらしないということは、尾関は先刻承知であった。

二人は縁に出、コップ酒を酌み交わした。

建て付けの悪い遣戸の向こうは墓地だった。月明かりを望みながらの酒談義である。

尾関の話術に引き入れられて、いつか、辻本は正日蓮会の内情を口にしていた。

「あつしはご利益もないから、この頃は足が遠退いて。特に川崎の本部のほうには住みついている者が多いからこちら仲間はずれ外れてさ。いい齢をして若いやつらの幟り持ちでもありませんや」

「女もいるようだが、泊まり込みじゃ風紀も乱れようというものだな。男と女、どこでどう間違いを起こすか。こればかりはわからない。なんだ、正式に結婚している夫婦者もいるのか？」

「旦那、教祖様は女嫌いでさ」

「ほう、女嫌い？ やさ男で女信者に傳(か)しずかれていますものだとばかり思っていたよ」

「信者同士が結ばれるのも気に入らないみたいでさ。一度、会館で結婚式を挙げたのがあるんですがね。教祖様は何が気に入らないのか、ふいと席を立たれて、そのまんま、お戻りにならなかった。それ以来、結婚はご法度、教祖様はその後も、男女間のことでかくの噂のあった男性信者を破門にされたぐらいで」

酒の入った辻本の口は軽くなっていった。

時折り、破れたふすまの陰から、物珍しげに十二歳を頭にした五人の子供が代わる代わる顔を出した。

尾関は教祖が女嫌いと聞いてがっかりした。どうせ、邪教ぐらいにしか考えていなかったから、問題が起きれば、男女間の乱れを醜聞種に、教団を揺さぶる法もあると戦法を練っていたので、期待を裏切られたのである。

「もう少し、熱心な信者になったらどうだ。前にはもっと威勢がよかったじゃないか」

「学のない奴は本部に行けば馬鹿にされるんでさ。難しい教本を読んで、人に説法をする柄でもなし。まったく、ここが」

辻本は頭を指さし、卑屈な笑いを浮かべた。

尾関は情報源になり得る男の価値を図っていた。内部の事情には多少だが通じているようである。尾関は辻本の言葉の端々から、正日蓮会が抱えている問題点を嗅ぎ出していた。

教祖の城の内魁は自らを日蓮聖人と称し、取り巻きの幹部たちも、教祖を神格化し、ために、盲学的な信者を一部に生み出していること。

教学に詳しい熱心な信者の中にはインテリ層も含まれ、一般大衆の信者との間に離反が生まれつつあること。

現に支部の中には、教学信奉主義者との間で確執があり、独自の布教活動に走っている支部もあること。

いちばん、尾関が関心を持ったのは、教祖の身の回りを世話をする女が常時、三人はいるという情報だった。

このとき、三人の名までは辻本の口からは聞き出せなかったが、何やらうさん臭い匂いだけは嗅いだ。

女嫌いの教祖様？ほんとうだろうかという思いもあった。下司の勘ぐりというやつである。この尾関の勘だが、職業柄というべきか、この初動の捜査段階としては、それなりの成果を得ていた。

物語りはやがて、弾圧という血腥（なまぐ）さい方向に向かって行くのだが、このとき、尾関はその血の匂いを早々に嗅ぎ分けていたことになる。

城ノ内魁は主だつた幹部二十人ばかりを集め、川崎の本部で月例会を開催していた。昭和十年九月二十二日のことである。

「正日蓮会の十軌百行について、もう一度、一から考え直す必要がある。各々が自分勝手な考えで、百行運動に走っているのは、日蓮聖人様の教えにも悖（もと）ることになる」  
 そう、初めに城ノ内が発言をした。

十軌とは聖日蓮会の目指す宗教活動のことで、修法式会（しきえ）、講座学問、文書整備、朗読教書、外護財施（がいごさいせ）の五つの運営法と、野外演説、宣伝活動、屋内講演、芸術布教、告知広告の五つの運動のことを指す。

十軌百行というのは、その布教活動は時と場所、状況に応じて百にも及ぶの謂であつた。今日の会合には青年部を結成した沢藤修平や、八木征治らは参加していなかつた。青年部は池上の本門寺に押しかけ、本門寺側の信徒と小競り合いを起こしたため、警察に逮捕され、城ノ内が身柄を引き取りに行った。微罪なので即日釈放となつたが、過激な行動には走らぬ旨の始末書を教団としては提出した。

この日の議題として、当然のことながら、その問題が採り上げられた。  
 各支部を預かる者は年配者が多かつた。財政をとまなうので、多額の寄進をした者が責任者になるケースが多かつたからである。

「われわれは先生の教え通り、やれば成る。やらねば成らぬの法で一に継続、二に精励、三に拡張の考えを守り、続ける、励む、広めるの運動方針で日々の布教活動を行っています。しかし、青年部の連中は一体何を考えているのか。近頃では右翼かぶれし、一人一殺などと物騒なことを口走っているそうじゃありませんか」

横浜支部を預かる星田守人がみんなを代表し、不満を述べ立てた。

星田自身は少し神がかつたところがあつた。船荷の荷受けを扱う検数会社を経営していた父親が死後旬日、枕元に立ち、正日蓮会に入信せよと告げた機縁を得て信者になつた一人であつた。

齢は四十八歳で社会経験も豊富、星田は旧帝大の一つを卒業したインテリで、いまは検数会社の社長の身である。発言内容もしっかりしていて、教義の理解度では教祖に継いだ。星田は運営面ではこれまで自分の考えをたいはいは通してきた。

「血気盛んな青年部のやること、人、怒るとも逆化、民衆騒ぐとも団体教化、国驚くとも、国諫だ。世直しの策は座して待つべきものでもないだろう」

城ノ内が青年部の立場を庇（かば）い立てする発言をした。

「先生はいまの時局をどう捉えておられます？警察沙汰になることが、正日蓮会の布教活動になるとお考えなら、これはたいへん危険なことですよ。特に時局は国粹主義者が先に、五、一五事件を起こし、他にも左翼への弾圧も厳しいものがあります」

「正日蓮会は社会主義運動の連中とは一線を劃している。西洋かぶれの耶蘇教と、左翼の連中は変わることはない。日本が他国にない天皇制を皇紀二千年に互って護持してきた歴史の上に立って、

われわれはあるのだから、国粋の考えが青年部の頭の中にあっても理命のことだろう。正日蓮会は日蓮聖人様の開かれた独自の仏教観を継承し、広めようという宗教団体だ。その国粋観を右翼寄りだと見ること自体、誤りじゃないか」

城ノ内の青白い顔に赤味がさした。このところ、体調もよく、微熱も治まっていたので、まわりの者は安心していった。

加来貞子、道子の姉妹、それに前野里枝の女性信者、幹事の天津啓作、松村安明などもこの席には顔を列ねていた。

「前には共産主義者（マルキシスト）たちとは正日蓮会は無縁であることはわたしも申し上げました。左翼思想とは無縁であることを強調するために、毎度、街頭演説ではこのことを口にしていきます。お陰で特高の連中も正日蓮会には近づきませんでした。右翼テロの横行する昨今、この先、正日蓮会とどうなるものかはわかりません。まして、一人一殺など、青年部の者たちは本当にその意味するところを知って口にしていくのですか？」

「エセ坊主や、耶蘇教の怪しげな連中に対して一人一殺と叫んでいるんだよ」

「叫んでいる？殺すという信念もなしにですか？」

「信念はあるだろう。だがまだ時機ではないということだ」

「時機とは何ですか？」

「本門寺や増上寺、既成仏教とはいずれ対決するときにがあるだろう」

「：たしかに正日蓮会は祈伏（しゃくふく）の力によって今日まで信者を増やしてきました。しかし、多くは小さな現世の幸せを求めて入信した一般大衆ですよ。すでに尖鋭化している青年部に動きに警戒心を抱いている者が大多数です。先生は一体、組織の下部にいる者たちのことをどうお考えなのですか？」

「量より質という考えもある。その点で青年部の者は勉学も怠りない。将来の正日蓮会を引っ張って行く者たちだよ」

「ですが、一般信者たちは」

星田はなお教祖を諷める口調になった。

「星田同士がご心配になっていることはよくわかります。この頃、正日蓮会は物騒になってきたと他の者にも言われます。この前の青年部員の逮捕の新聞記事を読んで、現に足が遠のいている信者も目立って多くなっていますから」

正日蓮会のナンバー2の地位にある天津が教祖と星田のやりとりの後、口を挟んだ。城ノ内は知らないことだったが、天津と星田はこの議題については事前に意見調整をして、この場に臨んでいた。

青年部の暴走と、城ノ内が青年部の後押しをしていることに、二人は不満を持っていたのであった。

「さつきも言ったが、正日蓮会は信者の質を重んじなければならぬ。会員が四百人を越えたことで質の低下は否めない。いつか、講演会場に紛れ込んだ共産党員が、わたしに向かって叫んだ言葉をきみたちも覚えているだろう。宗教は逃避だ。宗教を信じて民の困窮度は変わることはない。それとも、正日蓮会を信じたら、明日の米代が手に入るのか。政府の愚民政策とエセ宗教の墮落、正日蓮会もどうせその類いだろう。人を救う、世直しをすると大きな顔をして口にするなど、あの青年はわたしを難詰した。一人一殺、言葉は激しいが、それぐらいの気概がなければ、とても、世直しなどは出来んのだよ」

久し振りに聞く教祖の激した文句だった。居合わせた者たちは、その気迫に押され、しばらく黙ったままだった。

「青年部は女子供は足手まといだと、この前は言い、わたしたち女性の加入は認めないと、一方的に彼らは宣言しました。日蓮聖人様は男女は平等だと七百年も前に喝破しておられます。青年部の

言い分をわたしたち女性は認められませんか」

この沈黙を破ったのは、前野里枝だった。機関紙の編集責任者である彼女は弁も立つほうであった。

「ともかく内輪の者で非難し合っている、仕様がな。青年部の者とわたしも話し合いを持つことにしよう。真の信者が本当に何人いるのか、不惜身命、正義を貫くために身命を惜しまぬ者が何人いるのか、正日蓮会の真価が問われるのはこれからのことだ。現世の自己の肉体と精神だけが自己存在なのだ。現在の〔我〕は過去の世の現れでもあり、未来の自分は現在の〔我〕である。信者の肉体は法華経を広めるために未来の〔我〕に対し捧げられなければならない」

城ノ内魁はなお強い口調で言い切った。

結局、月例会は教祖が青年部を支持し、むしろ、その言動を憂える古参幹部たちをなだめ、かつ、叱責したことで終わった。

考えてみれば正日蓮会は過激なデモンストレーションと、その攻撃精神によって世間の認めるところとなった。

組織が大きくなったことで、沈滞しつつあった当初のエネルギーを、城ノ内は青年部を先頭に立てることによって、もう一度、初心に返り、立て直そうとしていたのだった。そのように他の者には見えた。

大津や星田が危惧を抱いた事柄は追い追い、時代の潮流にもその余波を受けて、教団の存続を危うくして行くのだが、教祖自身はいまは功を焦る気持ちのほうが強かった。

肺を病んでいることの青年特有の生き急ぎの思いも、城ノ内の胸のうちにはあった。

残された時間の少なさを、一人になったとき、城ノ内は考える機会が近頃は増えていたのだった。

## 2

加来貞子、道子の姉妹は川崎本部にほとんど詰めていた。

元は母のうらが熱心な信者で、母の薦めがあつて二人は正日蓮会の会員となった。

うらは川崎市内で料亭をやっており、自から女将をつとめていた。横浜の船会社社長の囲い者で、先年、その男は病気で死んだために、いまは料亭はうら自身が所有している。

貞子、道子は私生児で、貞子が薬科専門学校を卒業出来たのも、その財力のお陰であった。正日蓮会にも多額の寄付をしてきたので、幹部の一人に名を連ねることが出来たが、家業の忙しさにかまけて、布教活動はおろそかにしてきたので、その分、娘二人に奉仕活動をさせてきたのだった。

子供の頃から利発だった貞子に学をさせたのは、うらが料亭稼業は自分の代限りと考えていたからである。派手な性格で男勝りのところがある妹の道子はそんな親の考えに反して、二代目の料亭の女将になる気でいた。

そんなある日、うらは貞子から、教祖への愛を訴えられた。

娘たちに奉仕活動をさせたのは、うらにはそれなりの計算があつたことだった。

貞子なら城ノ内の妻になる資格があるとうらは考えてきた。その貞子が心に秘めていたことを口にしたのだから、うらとしては打ち捨てておくわけには行かなかつた。

だが、取り巻き連は、教祖に妻帯をさせることには異議を唱える者が多かつた。

何回か自薦、他薦で同じような話しが持ち上がったが、いつも、縁談は立ち消えになっていた。

布教活動に専念したいと城ノ内は言い、遠回しではあったが、女信者の目も意識しているようなことも口にした。

男女の乱れについても教祖はこれまで口うるさく言ってきた。信仰よりも、異性のことが気になる人種もいて、教祖の機嫌を損ね、退会させられた者もいた。

貞子は城ノ内が病身だから、わたしが献身し、そばに付いていなければならないと、結婚の必要



性を母に説いた。

うらは幹部連に相談する前に、直接、この話を城ノ内に持ち掛けた。

「その話は一応考えさせてくれ」と、城ノ内はうらに答えた。

結婚をする気はないとこれまででつばねて来た城ノ内が変わり身を見せた。煮え切らない態度のまま、城ノ内は苦渋の色さえ、このとき、顔に浮かべて見せた。

そんな裏のやりとりがあつた後、うらは貞子に城ノ内の一夜妻になるよう言い含め、自邸の離れ座敷に貞子を待機させた。

うらが城ノ内に結婚話を持ち掛けて十日後のことである。

城ノ内は時折り、一人で川崎の会館本部をこれまで抜け出すことがあつた。

一晚帰って来ない日もあり、一部の資金援助者の家を訪ねているとされていた。それでこの夜の城ノ内の行動を特に怪しむ者もなかった。

うらが段取りした通り、午後九時に城ノ内は人目を忍ぶようにし、一人で料亭にやって来た。この日は料亭は休みであつた。

会館内で毎日顔を合わせていたが、結婚話については当人同士は一切触れずにきた。二人とも無口になつた。お互いを意識してのことである。

「教祖様、どうか娘のことをよろしくお願いいたします」

うらは城ノ内を離れ座敷に導きながら、その背に語り掛けた。長い渡り廊下の途中でうらは足を止め、城ノ内を見送つた。

四十五歳になるうらは、黒い羽織り姿の城ノ内の後ろ姿を仰ぎ、涙ぐんだ。浮草稼業の年月、恋心を抱くこともなく、何人もの男たちに身を任せてきた自分のこれまでのことがふと頭を掠めたのだった。

（貞子は真から好きになつた男性に初めての体を与えることが出来る。これほど幸せなことがあるうか）

うらは瘦身の男の背に後光が射しているように見え、思わず手を合わせ、教祖様を拝んだ。

城ノ内は子細らしく、座敷に入る前に、小さく咳払いをした。

障子を開けると、用意された酒肴の卓の前に、貞子が身を固くし控えていた。

「妙なことになつた。貞子さんとううして会うなんて」

まだ、自分の迂闊（かつ）さを責めているような口ぶりだった。床の間を背に城ノ内は座つた。固い表情はそのままだった。

ぎごちない手付きで貞子は城ノ内に酌をした。花嫁衣装を真似たわけではないのだろうが、駒輪子（こまりんず）の白生地に錦糸の鶴の模様をあしらつたつけさげを貞子は着ていた。

「わたし、先生に付いて参ります」

予め用意していた台詞なのか、貞子は言い、じつと城ノ内の目の奥を覗き込んだ。

母親のうらからは正式の結婚ではないことは申しつけられていた。学をつけさせ、人並みの結婚をさせたいと願つたうらだが、結果はまるで、足入れ婚あしいれこんのようなことになつた。

「貞さんに感謝したい気持ちでわたしはいっぱいだよ。周囲の目があるのでこういうことになつたが、ちゃんと結婚式も挙げ、時機を見て入籍したいとも考えている。かたちは整はないが二人は夫婦だ。心が一つになることが何より肝要なのだよ」

「わたしは先生を心から敬愛しています。これほど人が好きになつたのは初めてのことです。その先生に……」

貞子は後の言葉は呑んだ。

襖の閉められた奥の部屋には一組の夜具が敷き伸べられていた。

城ノ内はうらの揃えた心づくしの料理にはあまり口をつけなかつた。お頭付きの鯛や、紅白の蒲鉾をあしらつた祝いの料理、そして床の間には鶴と松を形どつた金銀、金糸の水引きで作つた祝い

物も仰々しく飾り立てられていた。二人きりになって二十数分が過ぎた。

恥かしきの余り、貞子は面を伏せたまま控えていた。二十二歳の花嫁はこの場に臨んだときから、膝頭に微かな震えを感じ取っていた。

体の内から火照りが生じており、心臓の鼓音の高鳴りを貞子は聞き取っていた。

「貞さん、わたしは酒のほうはもう慎むことにするよ」

城ノ内は早々に盃を伏せた。貞子は帳場に通じる呼鈴を鳴らした。二人の間に、息の詰まるような押し黙ったままの時間が過ぎた。

長廊下を伝ううらの足音に二人はほっとした。障子が開かれ、うらが一礼した後、

「先生、お湯をお使い下さい」

と、案内役を買って出た。

「ああ、そうさせてもらおう」

もの憂そうに城ノ内は答え、ゆっくりと立ち上がった。多分に照れを含んだ返事の仕方だった。

母親が去り際に、貞子に目で合図をした。

微かに貞子は頷いたが、幸せな思いを笑顔で返す余裕はなかった。

貞子は母親に言いつけられた通り、次の間に用意されていた白の絹地の対丈（ついたけ）の単衣を裸身にまとい、その下には赤い腰巻きを用いた。

処女の身の装いだが、貞子は母親の計らいで艶めかしさを身につけた。

この日のために母親が新調してくれた錦沙（きんしゃ）仕立ての夜具の枕元に、薄化粧をした貞子は座り、じっと初夜の相手をする男を待った。

行灯（あんどん）を形取ったランプが枕元には一つだけ置かれていた。その明かりさえ、いまは、貞子は身をさらすものに思え、余計に恥ずかしさが募った。

やがて、長廊下を静かに踏みしめる城ノ内の足音を貞子は聞き取った。貞子は一人、「先生、わたし：」と声を出し、両手の指をぎゅゅと握り締めた。

城ノ内は物静かに振るまった。

障子を引く音も、畳の上を歩く足音も落ち着いた所作のように貞子には思えた。

開け放たれた寝室に目をやり、枕元に座わり、身を固くしている貞子をちらと見遣った。

「いい湯だった」

と、少し場違いの台詞を城ノ内は吐いた。

城ノ内は寝室の襖をやはりゆっくりと閉めた。暖かな風のようなものが寝室に吹き入ったように貞子は感じ取った。

「貞さん、もう、お布団の中に入っているのだよ。さあ」

そう言い、城ノ内は掛け布団をめくり、白いシーツの上に寝るように、貞子を導いた。おずおずと貞子は身を進めた。膝頭をぎゅゅと締め、ぎごちない感じで、敷き布団の上に横たわる。

貞子のそばに身を寄せてきた城ノ内は、貞子の髪をやさしく撫でてから、そっと唇を合わせた。貞子は呼吸、吸気の間合いがわからず、ただ、息を詰め、体全体を硬直させていた。重ね合わせていた唇が離れたとき、やっど、ふーと息を継いだ。

次に城ノ内は貞子の下帯を解き、両肩から絹地の寝衣をすべり落とした。貞子の双乳がそのままに現れる。

「貞さん：」

その城ノ内の感極わまったような声を聞くだけで、貞子は充分だった。

自分が城ノ内に愛されているという実感を持った。

城ノ内は胸の谷間に顔を埋めた。微かにヘチマコロンの淡い薫りがした。

顔をいつとき離す。城ノ内は貞子の乳房のかたちをしっかりと目に止めておきたかった。愛しいものを見る思いで、城ノ内はおのが視線でそのかたちを愛（め）でた。暖色の明かりが、柔らかな

弾みを持った小さき目の乳房のかたちをそこに写し出していた。

（触れてはいけないものを、わたしはいま手にしようとしている）

城ノ内とて心が震えた。

禁断の木の実を口にするように、城ノ内は処女の乳房をそっと口に含んだ。舌をやさしく這わせた。もう、一方の乳首は指先で弄んだ。しばらくすると、やはり、貞子は息を継ぐ間合いがわからず、息苦しくなつて、急に「ぐびっ」と妙な声音（せいおん）を發した。首を左右に激しく振り、いやいやをすることで、貞子はこの恥かしい始末に耐えようとした。

城ノ内は女の体の扱いに慣れていようだった。

上目遣いに貞子の表情を盗み取る。貞子は齒を喰いしばっており、首筋の静脈が強く浮き出ている。直ぐには城ノ内は体をつなぐことはしなかった。お陰で、貞子は生まれて初めての経験なのに、すべての思考力を失うほどに全身の血を滾（たぎ）らせていた。

白い裸身にうつすらと血の気が浮き立った頃、城ノ内はかたくなに閉じていた貞子の股間を開かせた。鬚りの部分は薄い飾り毛で全体が隠されていた。脚を開かせようとすると、逆に膝を内側に寄せて行くので、城ノ内はやや強引に手指を貞子のぬるみの狭間に忍ばせた。

「先生、わたしは先生のものです…」

早く女にしてくれとせがんでいるように、貞子は声を絞り出した。

だが、城ノ内はもぐり込ませた指先を巧みに動かせ、女体の秘められた淫らさの血を引き出そうとした。貞子は指が動く度に、腰をくねらせるので、赤い腰巻きはすっかり開き立ち、敷布の上に伸べられたかたちの腰巻きは、いまは皺だらけになっていた。

「わたしたちの身も心も一つになる。いいね」

少し強圧的な言辞を城ノ内は弄した。

「はい…ああ、せんせい…」

城ノ内はこの後、貞子に腰の力をなるべく抜くように申しつけた。両足を開かせた。そうしておいて、城ノ内は貞子の股間に割って入った。それでも、貞子は腰を引くようにしたが、城ノ内の結合の間合いのほうがうまくいった。熱いものが触れ合ったとき、二人の体は一つにつながっていた。母親から教えられていたのだらう。貞子は痛さは訴えなかった。

（先生の赤ちゃんが欲しい）

貞子はその願いの文句だけを繰り返し、齒を喰いしばって痛さに耐えていた。

行為が終わったとき、貞子は知らないことだったが、城ノ内の顔面は引き攣り、その目はサディステックな光りを帯びた。貞子はかなり出血したらしく、内腿のあたりまで、初血が掃かれたようになっていた。城ノ内は桜紙を女になった印の部分に押し当てた。処女の血が桜紙に染み込んだ。

城ノ内は貞子に添い寝をした。貞子が城ノ内に顔を寄せてきた。貞子は感激の余り、泣きじゃくった。その涙を城ノ内が指先で拭い取った。

正日蓮会が内部分裂の危機をはらんでいる情報は、すでに、神奈川県警川崎署特高課は、すでに、掌握していた。

川崎署特高課のスタッフは、教祖の城ノ内より余程、正確にかつ、細にわたり、組織を活用して、正日蓮会に出入りする者の前歴、現在の生活状況、会への奉仕活動を調べ上げていた。主任の尾関孝雄を専任班の責任者とし、他に三人の人員を配置した。すでに、この時点で上部機関の神奈川県警特別高等課にも捜査状況は報告がなされていた。

十月一日、県警本部で第一回目の総合会議が開かれた。県警の山上勝行課長（警視）が最高責任者で、津田係長も顔を列ねた。川崎署からは原島課長、尾関主任の他に、三神玄義、西田克三、亀

井重晴の各刑事が出席した。

三神は右翼関係の情報に詳しいので、この場に顔を出した。西田は原島課長の引きで、東京の警察学校の教官をし、左翼の思想教育を主に担当していたところを神奈川県警に招請された。年齢はまだ二十六歳の若さだった。

亀井は尾関と同じような経歴で、刑事の経験があり二十四歳、その行動力を買われて特別班に編入された。

小さな会議室に顔を揃えた特高課のスタッフに初めに尾関主任が現況報告をした。

「横浜支部を預かる星田守人のところは信者、七十名、川崎本部、小岩、蒲田、江戸川橋、保土ヶ谷などよりも信者数は多く、横浜支部が数の上ではいちばん勢力があります。その支部長の星田は穏健派で通っていますが、この男、なかなかの癖者で、自分では一派の教主のようなことを言っている。日蓮聖人が流された佐渡ヶ島に渡って修行中に、日蓮聖人が修行の場に頭（あら）われて、啓示を受けたとか何とか、金にもしつかりしていて、信者数を増やしたのも金が目的ではないかと、信者仲間では言われてもいます。年寄りや女の信者が多いのも特徴、それで本部や、青年部の連中の過激思想にはついていけず、他の支部とも通じて分派活動を画策している様子です」

「しかし、各支部にも青年部の行動指針に同調する者もいるだろう。城ノ内が教主であるからこそ、正日蓮会の看板を掲げていられるんだ。それほど、教主は絶対神的存在じゃないのか」

「その青年部は一応、教主の統率下には入っているようですが、他の支部の青年層を引き込み独自の活動形態をとりつつあるように思われます。青年部の首魁は沢藤修平、八木征治、沢藤が二十二歳、八木が二十一歳、二人とも飛行機工場に勤め、兵役は免除されていますが、勤務状況は必ずしも良好に非ず。正日蓮会の活動のほうが優先しているようです」

「川崎署に配属されている者は重々、正日蓮会の監視は怠たらぬように。教主を検挙するのは簡単だが、まだ、妥当性に欠ける。他にも正日蓮会に揺さぶりを掛ける方法がないわけじゃない。尾関主任の報告にもあるが、教主のそばに、熱心な女信者が何人も仕えているというのも相手の弱点を探る法にはなるだろう。表向きは勇ましいが、どうせ、邪教だ。女がらみの醜聞で化けの皮を剥がす術もあるということだろう」

本部の山上課長が、川崎署の原島に言い、他のみんなが頷いた。

「城ノ内は頭のいい男です。左翼思想の取り締まりが厳しいことを承知しているので、街頭演説では専ら耶穌教と共産党の悪口を言いふらしています。取り締まりの警官も、彼らが乱暴を働かない限り、介入出来ないのが現状です」

西田が意見をさし挟んだ。

「右翼とのつながりについては三神君はどういう見解を持っているのか」

原島課長が三神に質問を向けた。それらの情報については原島は承知していたが、本日は勉強会も兼ねていたもので、三神に一通りのことをしゃべらせた。

城ノ内魁の日蓮の教学研究は、大正中期中に設立された統心閣塾の塾生になったことで、本格的なものになった。統心閣塾は日蓮宗の僧籍にあつた者がロシヤ革命によって日本に入り込んだ共産主義を排除するために設立された団体なので、国粋主義色が強かった。

同時にキリスト教が自由思想とあいまって、信者数を増やしていたので、異教に対する危機感も存在した。西田が述べた話は、多分に、城ノ内が統心塾の根幹の考え方と無縁ではないことを物語る。

三神の正日蓮会の分析もおおよそ、この線に沿っていた。右翼寄りの姿勢を保っている宗教団体との判断を示した。

三神のこれらの話しを聞き終えてから、原島課長は、今後の川崎署の特高課の出方について、自分の見解を述べた。

「世間を騒がせているというだけでも正日蓮会は目障りな存在だ。南無阿弥陀仏と手を合わせてい

るだけなら、信者はみんな仏様だ。だが、仏面をして、人間並みの文句を並べる奴は断固、取り締まらねばならん。大体が正日蓮会の信者の構成員、日常生活に不平不満を持っている連中が多い。このまま、増長させて、妙な宗教一揆でも起こされたらことだ。悪い芽は早く摘んでおく必要がある。特高警察とは何であるか。各自、自分に与えられた使命の大きさをいま一度、自覚すべきである。治安維持法や、その他の取締法規に合わせ、日本の国体を守るといふ見地から君たちは選良の取締官として忠実に任務を遂行してくれたまえ。多少の行き過ぎは止むをえん。特高課はそれだけの権限を与えられている。いいな」

原島課長は鋭い目で、特高課員一人一人の顔を見遣った。全員が神妙な顔になり、決意のほどを示した。

「それから正日蓮会については警視庁も動いている。しかし、この件に関しては神奈川県警が先行しているのは間違いない。きみらも後塵を拝することのないように。先を越されたら、わたしの立場もない。もちろん、君たちだって、専任捜査官の能力を問われることになるんだから、全員、心して掛かってくれ」

最後に本部の山上課長が会議を締めくくった。

#### 4

横瀬菊世は相も変わらず、水商売の勤めに明け暮れる毎日だった。

陶山とはあれからも何度か、店が引けてから付き合った。男と女の仲になることで、菊世は赤石勇二と自分の関係を知られることのないよう努めたのだった。

しかし、年を越した後、不況風に吞まれたのか、その陶山も東京には姿を見せなくなっており、菊世も勤め先を変えたりで没交渉となっていた。

山形での殺人事件は、その後の物語りでは、赤石は終始、単独犯を主張し、菊世との約束を守り、自分一人で罪をかぶることになった。裁判も結審し、現段階では菊世の共犯者の線は消えていた。

問題となるのは、勇二が共犯者の名をしゃべれば、菊世の行方が探られることだったが、いまは、山形の事件より、菊世自身に関わる叔父殺しの事件のほうが、菊世は気になっていた。

陶山がいつか口にした岐阜からわざわざやって来た刑事は自分を逮捕するために、菊世の身辺の匂いを嗅いでいるように思えた。

元の店の源氏名のしげ乃に、この刑事は関心を抱いている。「くそだーけー」この地言葉は、菊世が客に対して、時折り、使う文句であった。耳聴く、この刑事は店が引け菊世が外に出たときに、たまたま、この文句を耳にしたようである。

結局、この店は、これは偶然も重なったことだが、菊世は翌日に無断のまま辞めた。ある客に借金があり、返す目当てもないので、店から姿を消すことにした。その後、菊世は身を隠すつもりで、山形の天童温泉で芸者のようなことをした。そのとき知ったのが、赤石に殺人話しを持ち込んだ佐田仁助ということになる。

「ざーざー」の刑事なら、まだしも、わざわざ、岐阜から来た刑事は、しげ乃のことを「あの女（こ）は岐阜の出身か」と店の支配人に尋ねたという。二年前の横瀬公次郎殺しの捜査経過は、菊世は詳しくは知らない。自分の周辺には、これまで一切、刑事らしき者の姿はなかった。

それで、菊世は安心していたところがあつたのだが、どうも、岐阜から来た刑事の存在は、気懸かりだった。

菊世と叔父とのこれまでの関係から考えて、自分が疑われる可能性はなくはない。事実、菊世はずっと、叔父への怨念を持続してきたのだし、その結果として、殺人は実行に移されたのだ。

男物の地下足袋を履いての犯行、偽装工作には、菊世は自信があつたが、一抹の不安は拭いきれなかった。

横瀬公次郎殺人事件は、二年余が経つのに、まだ、真犯人は逮捕されていなかった。

この段階で、土岐刑事は横瀬菊世に強い関心を持ち、何度か、東京まで足を運んでいた。名古屋から東京に向かった八年前の足取りまでは確認していたが、何しろ、時日が経ち過ぎていた。水商売に身を染めているに違いないという勘だけで、土岐刑事は東京のカフェーなどを探っていたのだが、まるで、雲をつかむような話ではあった。

ともかくも、犯人とは極め付けなくとも、横瀬菊世の行方を突き止めたいという思いだけは、土岐刑事は強くしていた。

十月も半ばになると、急に風が冷たくなった。夜の勤めだから、菊世には嫌な季節がやって来たことになる。岐阜から来た刑事のことが頭にあっただけで、いまは、菊世は新橋にある小さなバーに勤めていた。時折りは生活費の足しに、客の男と寝、なにがしかの金も得ていた。

店から、アパートに戻ったら、一通の手紙が郵便箱に入っていた。差し出し人を確かめると、弁護士笹川からのものであった。

電話など各戸にはない時代だから、通信は大体が手紙によるしかない。

菊世は嫌な気分になった。

部屋に入ったとき、菊世は一つ身ぶるをした。部屋が冷えていたせいもあるが、余り、いい便りには思えなかったからでもある。

赤石勇二が自分と会いたがっていたら？自分としては会いに行かざるを得ない。旅費などの金の工面がちらと頭を掠めた。

すでに短歌を赤石勇二に贈った後、二回、菊世は仙台まで赴いていた。

初めに、赤石勇二に歌を贈ったのは前年の晩秋の季節、十一月も末、往復書簡のかたちで、赤石勇二からお礼の手紙が、笹川弁護士を通じて送られてきた。年の暮れに、どうしても会いたい旨の連絡があり、菊世は笹川弁護士がポケットマネーで用意した旅費で、仙台まで行き、一回目の面会をした。世間的には二人はあくまでも他人同士、他人行儀な会話のやり取りをしただけだった。

二回目は今年の春、四月三日に菊世は赤石勇二に会いに行った。第二審が結審し、赤石勇二に死刑の判決が下って、数日後のことである。このときは、赤石勇二は面会を拒絶した。また、その後、赤石勇二には手紙を出したが、どういうわけか、受け取りを拒否されていた。

歌を贈るきっかけとなったのは、本屋の片隅に置かれていた短歌誌をたまたま菊世が手にしたことによる。その短歌誌は法曹関係のもので、全国の受刑者の投稿した短歌が掲載されているページがあり、菊世は興味を引かれ、買い求めた。獄中にいる赤石勇二のことが、やはり、頭の中にあっただけのことであった。

赤石勇二の名を知ったのは、笹川弁護士には、苦しい言い訳だったが、店に来る客の一人、陶山利道と知り合ったのがきっかけということにしてあった。

菊世は手紙の文面を追った。  
さっと目を通す。

『あなたと赤石勇二との間の獄中書簡とも言える短歌のいくつかが、さわらび、という短歌誌に、この度、赤石勇二の希望により提示され、掲載されることになりました。この件については作者であるあなたの許可を得る必要があるのですが、当人にその旨、事前に申ししたところ、手紙を出し、許可はもらったとのことなので、あなたもすでにご承知のことと思います』

そこまで読み進めて、菊世は視線を宙に泳がせた。

赤石勇二から許可を求める手紙は菊世はもらってはいない。

(何のために、短歌誌にわたしの歌を、わざわざ発表する必要があるのか？勇二は何を考えて、こんな馬鹿なことに手を貸したのだろうか……。わたしはこんなことは望んではいないのに)

菊世にとっては、歌を贈ることは、これは二人の間だけの約束事を暗黙裡に勇二に強いる手段の一つでしかなかった。一人、勇二を獄中に残して、知らぬ顔をしていると、勇二に報復される結果

を招くかも知れない。そう、考えて菊世は姑息な法を選んだに過ぎない。

それが世間に知られることになれば？菊世にとっては好ましいことではなかった。

文面では、追って、さわらび」という短歌誌は菊世の手元に送られてくるとあった。

ただ、一つ、菊世を安心させたのは、赤石勇二が第二審の結審後、上告したが却下され、死刑が確定したことであった。

これで、赤石勇二は菊世との約束を一応は守ったことにはなる。

その赤石勇二の励ましになるので、また、折りをみて歌を贈ってやって下さいと、笹川弁護士は最後に書き添えていた。

自分に会いに来いという求めではなかったもので、少しは安心したが、菊世は自分の短歌が世間に知られることに危惧の念を持った。

赤石勇二に歌を贈る行為を不自然と見る者がいれば、二人の仲に疑いを差し挟む者がいても不思議ではない。この嫌な気分は、これからもずっと続くことになるのだが…。

菊世は一種の動物的な勘で、これからの展開を読んでいるようなところがあつた。

少しずつだが、菊世は危険な方向にと、わが身を引き寄せられていたのであつた。

松ヶ谷葉の名のまま、菊世は正日蓮会の勉強会に出席をした。

歌集を城ノ内に預けてから、これまで、二度、川崎の本部を訪ね、奉仕のために会館内に住まわせてくれるよう菊世は願ひ出た。

が、教祖の男は顔を出さず、加来貞子が代わりに現れ、信心のほどもわからぬ女信者を会館内に入れるのは、とかくの世間の噂になるので、お断りしていると穏やかな口調で告げられた。

松ヶ谷葉こと、横瀬菊世が貞子の身分を質したのに対し、貞子は自分は医学の心得のある者で、何らやましい関係にあるものではないと説明をした。

会館に常住している幹部の松村が顔を出したときは、葉の着飾ったいでたちを一瞥した後、松村は余程、生活に困った者以外は、先生はいまは会館にはお住まわせにならないとも告げた。

この日は、会館内の修行道場には、三十人ほどの信者が詰め掛けていたので、葉もそのうちの一人として招き入れられたようだった。

一段高くなった演壇を前に、城ノ内が得意の弁舌をふるっていた。

「日蓮聖人の運動の大義は、六百年の長夜の夢より、覚めねばならぬときにすでに来ている。しかるに、各宗団の指導者も信徒もただ、睡眠を貪っているだけだ。くそ溜りにいる僧侶ども、坊さんでいるのは、メシを喰う手段、意味もわからず、お経を唱え、いまや、葬式坊主に成り下がっている。この現実を日蓮聖人様は何と思っておられるか」

相変わらず、城ノ内の説法は過激な口調のものだった。

信徒の多くは、中年の男女で、若い者は数えるほどしかいない。

講演のあと、質疑応答の時間もあつたが、教義を勉強してきた者が、禅問答のような難題を持ち出し、教祖や教学部の幹部とやりとりをするだけで、葉はすっかり退屈させられた。

早めに会合が終わったとき、葉はさり気なく、城ノ内のそばに擦り寄った。

「松ヶ谷葉です。教祖様、わたくしの歌集のほうは目を通して頂けましたか」

二人の目が合った。慌ただしいひとときであったが、城ノ内は葉の美貌に惹かれたのか、足を止めた。

「全部とはいきません。しかし、歌心に接するというのは悪くないことだとわたしは思っています」  
城ノ内は歌集のほうは最初の一、二句の文字面を追っただけだったので、曖昧な答えを返した。  
直ぐに取り巻き連が、教祖と女信者の接近を引き離しにかかったので、葉は城ノ内への思いを伝

えることは出来なかった。

（そのうち、城ノ内をわたしたしものにして見せるわ。何よ、この女、取り澄ました顔をして、わたしのこと嫉妬しているんだから）

このときも、貞子の強い視線に葉はさらされた。

不遜な文句を葉は頭の中に用意した。

この日、菊世が教会本部を辞した後、ちよつとした騒ぎが起きた。

神奈川県警の特高課が下手な芝居を打った。

坊主頭の面相のよくない大男が、数人の手下を連れて、川崎本部に乗り込んだ。男は土建業を営んでいる黒木大悟だと名乗った。初めに幹部の松村が応対に出た。

黒木は自分が囲っていた女に、城ノ内教祖が手を出したので、話しをつけに来たと凄んだ。手下の連中は六尺棒を手にしており、その威勢に松村は圧倒された。

玄関先の騒ぎを聞きつけ、加来貞子が顔を出した。

「何です！教祖様は講演の後でお疲れが出、ただいま、臥せっておられます。そんな物騒な恰好で何事ですか。みなさん、お引き取り下さい！」

気丈に貞子は言い放った。

「バキヤロウ！おれの囲いのよつ、元芸者の女とチンチンカモカモしやがって、臥せっているでもねえだろう。どうせ、汚れた体の女だ。女はただでくれてやるからよつ。教祖とか称している野郎に引き取ってもらいたいと思つて連れて来たのよな。それとも何かい、売り値を決めようつてのか。おめえじゃ、埒（らち）があかねえ。やり過ぎて腰を抜かした偽神様をここへ連れてきな！」

男たちの陰に隠れていた元芸者だという女の襟首を、黒木はつかむと土間に着物姿の女を放り投げた。二十六、七歳の齡と頃と思われる柳腰の美形の女だった。

この事態にいちばん衝撃を感じたのは、貞子自身だった。貞子は母うらの計らいで、城ノ内に身も心も捧げたばかり、一昨日の夜もいつもの手順で城ノ内に抱かれ、感泣の声を上げたばかりの身であつた。

土間に投げ出された女が裾を乱したので、ちらと、貞子はその白い内腿や脛を、いやでも目にしってしまった。

（まさか、教祖様が…）

と、考え直したとき、貞子はなお強い女になった。相手を見下すように首を立てた。

「つまりぬ言いかがりは止して下さい。何の証拠があつて、こんな馬鹿なことを！」

白い袍衣に紫色の袴姿、巫女の威厳を備えた知的な面貌の貞子の陰幕に、黒木も一瞬はだじろいだよつた。

が、次に黒木はにたりと笑つた。

「証拠か、いいだろう。おい！」

黒木は背後の男たちに向かい、顎をしゃくつて見せた。

と、玄関の外にいた一人の男が、青白い顔を引き攣らせ、玄関土間に姿を現した。保土ヶ谷支部の責任者、大貫太平が貞子の目の前に立っていた。

「おい、何とか言えよ。こいつが女係の手引きをしていたのさ！」

黒木がかさに掛かつてけしかけた。

「あの…みんな本当です。わたしは申しわけないことをしましたので、この機会に正日蓮会は脱会させていただきます！」

「何を言っているの。それは教祖様にちゃんとお許しを得てから決めることでしよう！」

貞子は弱い目をしている大貫を睨みつけ一喝した。

「うるせえんだ、この阿女（あま）、教祖とやらいう女蕩しをさっさと出しなつ！」



黒木は肩を怒らせ、教祖が出て来なければ、土足でも上がり込む構えを見せた。

「これ以上、中に入ると住居不法侵入で警察に訴えますからね」

そう、言い置いて、貞子は身を翻した。その背に「けっ、警察が何だっただけだ」という黒木のさつきまで貞子は看病に努めていたのだった。騒ぎのほどは城ノ内の耳にも入っていた。貞子が奥の間に入ったとき、城ノ内はわざとらしく咳をした。

「つまらぬ言いかかりを。先生、どうなさいますか？」

と、貞子は枕元に座り、城ノ内の顔を覗き込みながらお伺いを立てた。

「また、暴漢か。わたしが出るまでもない。松村に言い、応分の金を握らせて引き取らせなさい」  
努めて平静を装い城ノ内は言った。

「はい」

貞子は内心、ほっとした。城ノ内が元商売女のところに通っていたなど信じたくない話しであった。真実、教団への嫌がらせにやって来た連中と考えた。

玄関先に戻り、松村に教祖の意向を伝えた。恐る恐る松村は黒木らにお引き取り料り願う金額について問うた。

「おい、なめんじゃねえよ。金ならよっ、いま、多摩川の橋梁工事を一手に引き受けてやってるから、腐るほどあんだ。教祖の野郎、怖じけづきやがったな。よし、今日はおもちゃにしやがった女を届けに来ただけよ。また、近いうちに来らあ」

黒木らは捨て台詞を残し、女だけをその場に捨て置き、引き上げて行った。その後、ばつが悪そうに女は一人で、こそこそと逃げ出して行った。

川崎本部の信者、植木職人の辻本伊三次を、情報提供者に仕立て上げ、神奈川県警特高課の尾関刑事は、この情報を入手した。

女の世話をしていた保土ヶ谷支部の責任者大貫の懐柔策に出た。大貫は軍に収める衣料品を製造する会社の経営者で、警察はその点の弱みをついた。軍の特需で潤っている大貫としては、官憲に逆らうのは、生活の手段を断たれることであつた。

下手な芝居的一幕であつたが、特高課としては用意周到な策がとられていたのであつた。

この事件は手回しよく、翌日の大新聞の社会面に出たので、正日蓮会の女絡みの醜聞は、菊世も目にした。

記事は悪意に充ちていて、邪教教団の女蕩し教祖と言つた意味を込めたものになっていた。女に体の説法をつくす、などという露骨な表現も中にはあつた。

菊世には動揺はなかつた。城ノ内も男の一人と知って、むしろ、安心した。

本名、横瀬菊世、その名を本人自身は余り好きではない。女流歌人、松ヶ谷葉（まつがやよう）、新しい時代を生きている意気込みもあって、彼女はこの名を大切に思ってきた。

だが、この名に陶醉することができたのは、葉にとってはほんの短い期間、昭和七年春の頃から秋の季節にかけてのことだった。菊世は二十歳になって、やっと、好きな歌の道に励む機会を得たのであった。

菊世が二つの殺人事件に関わる前の一時期のことである。

この月日、葉はたしかに歌人として充実した日々を過ごしていた。

初めて作歌の歓びに葉は浸った。そのきっかけとなったのは短歌誌『花埋み』の主宰者、田丸素峰を知ったからである。すでに、小冊子ではあったが、『花埋み』は季刊誌として二年余、発刊を続けており、折りに触れ、葉はこの短歌誌を手にしていった。

岐阜・恵那の家を出るとき、父親の形見として持ち出した女流歌人たちの合著歌集『恋衣』一冊が彼女にとっての短歌の教本であった。父親が文人で、多少の短歌の才もあったことから、その血を引いていたということもあるが、やはり、明治から大正にかけて活躍した先達（せんだつ）、与謝野晶子、山川登美子、増田雅子らの詠んだこの歌集に影響されて、葉の才能も一時期ではあったが花が開いたと言える。

春の一日、松ヶ谷葉は歌誌『花埋み』の主宰者田丸素峰を東京・下谷の地に初めて訪ねた。

下谷のあたりは寺院が多かったが、ちょうど、桜の花がほころんでいて、葉の気持ちはそちらの妖しげな花の気色のほうに奪われた。真昼のことで、余りに美し過ぎるのが、葉の心を惑わせたのだ。気持ちは浮き立っていたせいもあるが、一歩、一歩がどうも頼りない。どうやら、白い桜の花が覆いつくす空の道が、葉をだじろがせているようだった。景色の美しさに吞まれまいとする妙な意気込みもどこかにある。

『花埋み』にはすでに投稿した歌が三度掲載され、素峰から一度訪ねて来るよう直筆の手紙をもらっていた。

葉はその手紙を大事そうに小物入れの手提げ袋におさめて持ち歩いていた。

この頃は刈り上げた断髪が流行で、葉もボブヘヤーにし、首筋を強調した髪型にしていた。花模様のワンピースのウエスト部分は、草色のバンドできつく締め上げていたので、葉の腰の円みがあるまま表されている。

いわゆるモダンガール、モボと称されたいでたちで葉は装っていた。

素峰の住んでいる借家は、みすばらしい感じの平屋で、部屋数も二間に小さな台所だけの構えだった。

少しは名を知られた歌人とは言え、生計（たつき）の糧になる稼ぎが得られるほどの時代でもなかった。

外は明るいののに、玄関の扉を開けて入った沓（くつ）脱ぎ場の土間は暗く、葉はかび臭い匂いも嗅いだ。

案内を乞うと、直接、素峰が迎えに出た。蓬髪（ほうはつ）に着流しふうの着物姿で顔を出した素峰は少し緊張しているようだった。

「松ヶ谷葉さんか、まあ、上がりなさい」

伸ばした無精ひげはその尖った顎の印象などもあって、初対面の素峰は不健康そうに見えた。顔色が悪かったせいもある。

書齋と思われる奥の六疊間に葉は通された。他に客はなく、二人は座机や本箱などで、ほとんどのスペースを占められた部屋で向かい合うこととなった。

改めて、葉が疊に手をつき、

「松ヶ谷葉です。わたくし、先生にお声を掛けて頂いて嬉しく思っております。歌の道に励みますので、先生、よろしくわたくしをお導き下さい」

と、硬い挨拶の文句を並べた。

「あ、それは：見ての通りの貧乏暮らしですよ。でも、めしは食わなくとも、花埋み<sup>ハナウメ</sup>だけは定期的に出すつもりですから、松ヶ谷葉さんも歌を愛して生きて下さい。そのため心の支えにわたしがなるのでしたら、それなりに力をお貸ししますよ」

素峰は少し照れ、蓬髪を掻き上げるようにし、ぎごちない挨拶を返した。

「先生はいつもこのお机の前で、仕事をなさるのですか？」

葉の憧れの気持ちと言わせた文句だった。歌人としての名は、松ヶ谷葉だが、村山菊世に立ち返ったときは、彼女は金を稼ぐために、カフエー勤めをしていた。もちろん、そんな素性のほどは素峰は知らない。男たちの欲望にまみれて生きてきた葉には素峰は、遥かに遠い存在であったのだ。

素峰は葉の質問には答えず、二、三度、軽い咳をした。

「冬に風邪を引いたのをこじらせてね。元々、気管支が弱いんだ、わたしは」

書齋は障子で仕切られており、その外は廊下になっていた。素峰が息苦しさを感じてか、障子を半分ほど開けた。ガラスの引き戸があり、小さな庭の向こうの情景が望めた。

隣家の低い塀が見えた。かなり立派な構えの家であった。その家の庭に紫木蓮が大ぶりの花を咲かせているのを、葉は目にしていた。

花は美しいが、この世のものとは思えず、散った後の醜さも他の花の比ではない——そんな意味を含んだ作歌が素峰にあったのを、葉は思い出した。

「わたくしに先生のお手伝いをさせて下さい。どうぞ、何でも言いつけて下さいますように。わたくし、親に無理を言い、自由にさせてもらっていますので、失礼ですが、歌誌を出すときは、これからは岐阜で材木商をしている親に無心してみるつもりです。花埋み<sup>ハナウメ</sup>のためになることなら。いえ、わたくし、先生のお手伝いを本当にさせて頂きたいんです」

「良家のお嬢さまか、葉さんは。そのお金の話、救かるね。でも、他の同人のみんなにはその話は黙って下さい。お金でわたしは歌の良し悪しの判断を誤りたくないし、それに葉さんだって白い目で見られないとも限らないからね」

「先生、わたくし、乱れ髪<sup>ミザメ</sup>の与謝野晶子のように恋歌に命を賭けてみたいのです。わたくしもう先生の歌に心奪われてここまでやって来ました。本当の恋をしないと、心からの恋歌は作れないものでしょうか？」

今度は、葉は真つすぐに素峰の目を見、まばたき一つせず、素峰の目の内を窺った。

「心だけの恋もあるだろう。そうでないと、処女（おとめ）のままの女流歌人には、恋歌を詠む資格はないということになるからね」

「わたくし憧れだけの想いだけで作る歌というのは好きではありません」

と、葉は答えた。

熱っぽい目で素峰を見たが、畳の上で膝は崩さず、葉は頑なな姿勢を保っていた。

素峰には葉の態度は、無理をしているように見えた。過激な言葉を葉は口にしたが、素峰には、

葉は良家のお嬢様に見えていた。

二人の間で、しばし、会話が途切れた。

葉は気恥かしげに顔を伏せてみせた。息苦しげにふーと息を吐いたりもした。

（わたしは良家の娘でもなく、金を無心する親がいるわけでもない。まして、先生が頭に描いているに違いない処女の女でもなくてよ。紅灯の巷に身を任せ、女給として働いている身…でも、わたしは歌の世界の中に、汚れないわたし自身と心を託して生きることだって出来るわ）

そう、葉は自分に言い聞かせた。男との関係で葉はこれまで恋などというものを経験したことがない。作り話でもいいから、素峰を相手にいまは恋の遊びをしてみたいと思っている。

ややあつて、葉のほうから、口を開いた。

「わたくし、『花埋み』の同人の中で、いちばん好きな歌人は吉永踏菁さんです。女流歌人として、わたくしは吉永踏菁（とうせい）さんの才能に嫉妬を感じるほどです」

「ああ、彼女のことね」

と、素峰は曖昧な答え方をした。

葉が踏菁のことを口にしたのは、事実上、『花埋み』は素峰と踏菁の二人で運営されていたからである。葉としては別段、踏菁の才能を認めていたわけではない。

葉は女の目になり、素峰の表情の変化を読み取ろうと努めた。素峰は少しうろたえたふうの顔になり、視線を宙に泳がせた。

男女の恋情を謳い上げた歌も、踏菁のものにはいくつかあった。その歌から、葉は素峰と踏菁との間に師と弟子を越えた関係があることを嗅ぎつけていた。いかにも純情ふうに装っているところが、葉には鼻持ちならなかった。いまの自分も、その踏菁を真似てはいたのだが。

明治の終わりから大正にかけて、多くの歌人がきら星のごとく輩出した。後世にも名を残す歌誌もこの時期に創刊されている。『明星』『スバル』『アララギ』『馬酔木（あしび）』と続いた時代、短歌に新しい足取りが印された。

しかし、昭和に入ってから、歌壇の流れは退潮気味で、暗い時代にあつては、やっと、歌詠みの心だけが生きている程度のことであった。喘ぎ、喘ぎ、時代の片隅に追いやられながら、短歌誌は生き続けていたことになる。素峰の目もどこか暗かった。何の定職も持たぬ素峰とて、中途半端なその声名と共に、世間では冷たい視線にさらされている身であるはずだった。

目の前にいる四十にもう手の届こうという貧乏臭い男など、本当は葉は鼻にも掛けない。

だが、自分を見るとききの怯えたような目を見るのが、葉は好きだった。つまりは純情ということになるのだが、その癖、女の色香に迷った男の好色さ加減も窺えて、葉としては男をあしらう楽しみも見つけ出していたことになる。

素峰を見返すと、素峰はそはそはしだし、蓬髪（ほうはつ）に手をやり、何度も口のところに手を持っていき、空咳をした。

次に歌のモチーフなどについて、二、三、素峰は葉に問い質した。

葉は適当に答え、その話しには乗らなかつた。きつちりと座っていたのだが、素峰の薦めもあり、葉は膝を崩した。やや、しどけないふうに座り直し、葉は素峰に対した。

素峰の目ばかりを見詰め続けるものだから、素峰は照れ、とりとめもない話しを一人でしゃべり続けた。

帰り際に、葉は囁くような小さな声で、素峰の耳に息を吹き掛けた。

「わたくし、先生が好きになれそうです」

「ああ」

鷹揚（おうよう）に素峰は返事をしたが、その声は上ずっているように葉には思えた。

葉は花曇りの暖かさの中を帰路に就いた。

桜の木が風に揺られている。少し風が出ていた。花片が目立たぬほどだが散った。

(春はやはりもの狂おしい季節なのかしら)

葉は自分のために、そう呟いてみる。

生ぬるい風の気配の中に身を置いたら、欲情の兆しを子宮の奥に感じ取った。

寺町を歩いて行くと、青臭い樹葉の萌え立つ匂いを嗅いだ。葉は男の匂いを嗅ぎ分けている気になった。

新橋烏口の一角に、何軒かのカフェーが立ち並んでいた。

夜ともなるとこのあたりには、控えめとは言え、ネオンが灯った。

菊世の源氏名は、よし乃と言った。歌人を自称する横瀬菊世にとっては、松ヶ谷葉とともに、自からでつきたいくつ目かの名であった。源氏名は、女一人で生きて行くための仮りの名だったが、よし乃は男共を相手にしたたかに生きてきた。

十五歳で上京をして、初めはビリヤードの店員、次に着物姿が売り物の純喫茶室勤め、身につけたダンスを活かしてダンサーもやった。男たちに弄ばれもしたが、菊世は男の本性もしっかり見極めて生きてきたつもりであった。金のありそうな男には媚びる術も身につけて、店の客の一人と、いまで言う愛人契約をして、せつせと、金を貯め込んでもいた。

浜町でうなぎの仲買問屋をしている橋本伊太郎から、よし乃は月々三十円のお手当をもらっていた。店に出て、男たちを相手に午前一時頃まで働いて、チップの多いときで、月収五十円ほど、売れっ子のよし乃でこれだから、月々三十円を稼げない者もいた。固定給、四円のきびしさだから、勢い、女給たちはチップをねだり、自分の体を張るしかなかった。

橋本は真の意味で、菊世を女にしてくれた男だった。四十五歳、女遊びに長けた橋本は、女をいい気にさせて、自分も楽しむという術を心得ていた。

店のはねた午前一時過ぎ、よし乃はお茶の水にある待合い形式の旅館で橋本と落ち合った。

今日は昼間、『花埋み』の主宰者、田丸素峰と初めて会ったことから、彼女の心はどこか浮わっていた。同人誌発刊のための資金援助のことも頭の中にはあった。橋本だけが金蔓ということになる。橋本の前では一つさばを読み、齢は十九ということにしてある。

酒肴を用意した座敷で、よし乃は早速、橋本にしなだれ掛かり、甘い言葉を囁いた。

「橋本さんが本当にわたしを女にしてくれたのよ。ここに来る途中でね、わたし、いやらしいことを考えちやったあ」

酌をしながらよし乃は、鼻声を出した。

「へえー、いやらしいことか。言葉じゃ何だ、二人でそれやってみよう。よし乃の言うままにするからさ」

「それ、したらチップくれる？でも、本当はちよっと恥かしいの」

「期待を持たせてくれるね」

「高くついたりしてえ」

「いいさ。気にいればはずむよ。去年の冬は寒かったから、うなぎのシラス(稚魚)が不漁でさ。

夏のうなぎ相場はぐーんと上がる。早めに資金力にものを言わせて、浜松の養殖物を押えておいた。潰れかけていた養殖場に、先行投資のつもりで、資金を貸付けておいたので、何倍もの金になってもどつてくる勘定だ」

「うなぎ様々ね」

「ぬらぬらしたよし乃のあそこ、早く拝みたくなったよ」

「やーね、うなぎと一緒にしているんだから」

「十九とは思えんよ。よし乃の淫水は、男のものに粘りつくように思うことがある」

「それなの。さつきここに来る前に、感じちやったって言ったでしょう。ふふ」

よし乃は下唇を湿した。離れの座敷で十数分後には二人は裸身を絡ませ合っていた。初めに、よし乃が約束したことを実行に及んだ。

「わたしね、絶対に露出症だと思ふの。指だけでどれぐらい濡れるのか、橋本さんに確かめて欲しいと思つて」

「いいね、眼福つて奴だな。今夜は浜松泊まりつてことになつてるから、たつぷり時間はある。サ―ビスショーでも見せてもらうか」

「高くつくわよ。いいの」

「わかった。わかった。代は見てのお帰りつてことにしよう」

もう一度、橋本に約束を取りつけて置いてから、よし乃は指を下半身に忍ばせた。

よし乃は少しずつ脚を開いて行き、足元にうずくまってる橋本に女の部分を見せつけた。指を自在に遊ばせ、相手を興奮させようというよし乃の計算だった。

「早く指でつぼみ貝を開いてごらんよ。よし乃のは固く閉じているように見えるところがたまらない」

「こうするの？」

よし乃は両手を添えた。その癖、もつたいをつけ、なかなか、橋本の注文通りにはしなかった。

腰をくねらせるようにし、自分だけはそこに快感をつくり出す。橋本はよし乃の自慰の様をつぶさに観察していた。白いふくらはぎの内側が、びくびくし攣れるように動く。太腿は豊かな肉づきだったので、橋本は股間を開き立てているこのポーズを見ているだけで、充分に興奮させられた。

「ね。見たい？よし乃の、濡れてて、もう、光っているでしょう」

そう、言いながらも、まだ、よし乃は開き立てては見せない。

淫らさを思わせる多毛地帯の茂りだけが橋本の目に止まっていた。

「チツプをはずまないとお開帳とはならないな。ぬらぬらしたの早く見せてくれよ」

とうとう焦れて、橋本はよし乃の邪魔な手指をほだきに掛かった。

「あーんっ、だめえ。見せて上げるから、ね、見せ方だって、わたし考えてきのよ。そしたら気持ちがいやらしくなったの」

「いいね。その通りにしてごらんよ」

橋本はごくりと生唾を飲んだ。

よし乃は両手の人差し指と中指をそれぞれに揃え、閉じたままのかたちを、ゆっくりと開き立てた。透明の液体が流れ出て来、よし乃の太腿の内側を濡らした。尻の穴に力を入れ、よし乃はこれ以上の眼福はないという行為を試みさせた。尻のあたりの括約筋を絞ると、小さな口はすぼまり、一旦、絞った状態から、今度は開き立てるようになる、まくれるような感じで、複雑な膣の肉相が外にとはみ出してきた。

つまりは、肉道が息を吸ったり吐いたりしているものであった。

吸うときも吐くときも、よし乃はいきみを入れた。

「よし乃の締めつけの強さがわかったよ。ここまでして見せてくれる女つてめったにいやしない。もう、いきなりだが、挿入といこうか」

「いいわよ。ぎゅつと締めつけてあげる」

「喰い千切られそうだな」

橋本は猛ったふうに、よし乃の両の足首を持つと、ぐいと股間を開かせた。覆いかぶさつてきたとき、いきり立った一物が、濡れ穴を一気に分けていた。

「うぐうっ、ああ、それ大きいの……」

心得て、よし乃は男の喜ぶ台詞を用意した。

橋本は一突き、二突きをくると、上体をよし乃に預けるようにし、よし乃の円い乳房のふくら

みを力いっぱい握り締めた。そうすることで、橋本は女を犯している気になった。

(こうして男を遊ばせてやるだけで、自分の自由になるお金が入る。もっともっと、サービスして上げなくちゃね)

よし乃は腰を左右に揉み、喘ぎ声を一際高めた後、  
「あーっ、気がもうイキそう。ね。そのまま動かないで」

と、注文をつけた。橋本は言いなりに、抽送行為を止めた。よし乃はさらに腰を前後左右に巧みに動かせた。くわえ込んだ男の一物の味を余さず、しゃぶりつくそうとでもしているようだった。よし乃の喘ぎの声はくぐもったものになった。

「うわわーん、気がイクウ」

と、よし乃は短く叫んだ。せわしなく腰を揺すらせた。「ふあっ」その一声が合図だった。よし乃は次にはがくんと腰を落とした。

「最高の女だな。よし乃は」

肩で息を吐いているよし乃の様子を見、橋本は感激の文句を口にした。

「後は好きなようにして。わたし、今夜は何度でも気がイキそう。めちやくちや感じさせてえ」  
もう、よし乃のペースになっていた。

橋本は今度は自分の欲望を吐き出すために、よし乃の体を弄び始めた。中年男の性技はしっこかったが、よし乃はこのような抱かれ方は嫌いではなかった。

一度目は橋本のしたいようにさせたが、二度目の射精のときは、初めにしてみせた特技の締め技を加えてやった。吸い込むようにし、男の一物をくわえ込んだとき、よし乃は三段締め技に挑んだ。

「うっ。おおっ」

橋本が叫んだ。男の癖に呻いた。

二人が寝床に入り、眠りに就こうとしたとき、橋本が感心したように、よし乃に言った。

「よし乃はどこで覚えてきたんだ。あの締め技を」

「初めてよ。橋本さんが若くて、美人の奥さんとなにしているんじゃないかと思ったときなど、わたしせつなくて。自分でね。今夜のようにしてみることもあるのよ。自分の指を入れているでしょ。

そのときにね。橋本さんとのが入っているって考えながら、自分でしていたら、つい、いきんじやって。それで覚えたことなの」

「そうかな。どうも他の男に教えられたような気がしてさ」

「馬鹿ね。橋本さんたらやきもち妬いちゃって。わたしは橋本さんだけよ。好きな人は。だって、ほんとうに女にしてくれたのは橋本さんですもの」

よし乃はいつも口にする台詞を、橋本の枕元で囁いた。

この殺し文句に橋本はころりと参り、よし乃を一つ布団に入れ、乳房に触れながら、眠りに就いた。

短歌同人誌「花埋み」の会合に松ヶ谷葉は、初めて顔を出した。

同人の数は二十人ほどだったが、下谷の田丸素峰宅に、この日、集まった同人は十一人だった。新顔の葉が初めに、みんなに紹介された。

断髪の髪形に、この年、流行の兆しを見せ始めていたチュニツクのワンピース、シャネル・レングスと呼ばれた膝の隠れるスカート丈のもので、葉としては精一杯のおしゃれをしてきた。

が、水商売の女には見られたくないので、口紅は薄目にした。小さな声で「よろしくお願ひします」と殊更に小娘ぶった挨拶をし、隅の席に座った。

一人、一人、同人は自分の名を名乗った。

吉永踏菁だけは、紹介を受けずとも、葉にはわかった。踏菁は素峰の隣りに座っていた。七、三分けの断髪の髪形、それに、青藤色のワンピースは袖の衿が白のカラーで、どこか、知性さえ感じさせる隙のないいでたち、一際、その存在感は目を引いた。

葉の視線は踏菁の一挙手一投足に灼きついた。すでに、嫉妬心が燃え立っていた。切れ長の双眸と細面、鼻筋もすつと通っていて、美貌だけでなく、凛とした美しさも兼ね備えていた。

到底、葉には及ばない教養に裏打ちされた自信のようなものも、その横顔には表されている。

（わたしは自分の歌を磨いて、踏菁に負けない存在感を、世に訴えなければならぬ。それしか、この女に対抗する法はない）

葉のこの思いは、もちろん、素峰を一人占めにしたという嫉妬心のゆえであった。

荒んだ暮らし向きの中で、彼女は望んだ男を自分のものにするための術を学んだ。それも自分の女としての色香を武器にして。

いまでも、素峰を前にして、葉は同じことを考えている。その浅薄なものの考え方が、自分の生活観をそのまま写したもののなのに、まだ、その次元の低さには、葉は気づいていなかった。

「投稿されてくる歌の数も減っているし、先の号では、いつものより、三割ほど同人誌の売れ行きもよくなかった。これまで号を重ねてこれたのは、吉永踏菁さんの援助に負うところが大きい。しかし、わたしとしては、これ以上の無理はお願ひ出来ない。軍靴の足音ばかり耳につくご時勢だからね。次の号は何とか、みんなで頑張ってお出そうと思っているが、いつまで続くことか」

初めに、素峰が同人誌の現状について説明をした。

「発行部数、五百部の同人誌ですもの。売れ行き不振だって、知れてることよ。費用だって、そんなに負担になっているわけではありません。先生に弱気になられては困ります」

踏菁が同人を代表して発言した。

「あの、わたくし、今日初めて参加させて頂いたので、よくわからないのですが、発行の費用はいかほど掛かっているのでしょうか？」

おずおずと、控え目な態度で葉が問うた。

「そのときにもありますが、大体、一部当たり二円五十銭見当にはなると思います。売値が一円、いずれにしろ赤字です」

と、編集委員の一人らしい男が答えた。

「わたくし、それぐらいの費用でしたらいつでもご利用立えますから、先生、ぜひ、踏菁さんのおつしやるように、花埋みは、ずっと続けて下さい」

このときだけは、葉ははつきりとした口調で告げた。その目はまっ直ぐ、踏菁に向けられていた。踏菁は明らかに不快な顔つきになった。

葉が向けた敵愾心のほどを、踏菁ははねのけるように、両目をきつと睨り、口元を歪めてみせた。「費用の話はいい。実は三日前、無頼の徒が二人、この家にやって来て、短歌誌などという女の手なぐさみのようなものは認められんと、持参した。花埋みをわたしの目の前でびりびりと引き裂いてみせた。失礼千万な輩さ。どんな世になろうと、わたしは、花埋みは続けなければと思っているが、歌詠みにとってきびしいご時世になっているのはこれは事実だよ」

素峰はそこで言葉を切ると、ひとしきり、苦しそうに咳込んだ。

踏菁が素峰の背をさすり、もう一人、宮田桜子が素峰の介抱に努めた。

二人の女は相競っているように、葉には見えた。

葉は桜子の歌も目にしていた。奔放さは感じられたが、歌作りは稚拙だった。踏菁の取り澄ました作風とは対称的で、葉はこの二人の素峰へのつくしぶりに興味を持った。

素峰の咳が治まった後、会合の席は踏菁が仕切った。二十三歳で女子大の出身、踏菁は才媛の誉れ高い女であった。



余程、素峰よりも弁が立ち、その才気のほどを葉は知らされた。

宮田桜子は六、四の束髪で、きつちりと髪形を整えていた。目が一重瞼なので、全体におとなしい感じを与えた。二十一歳になるが、齡より若く見えた。濃紺の一松模様の着物に、茄子紺の名古屋帯姿だったので、女学生ふうの印象が強調されていたせいかも知れない。

(何よ、二人とも。これ見よがしに先生のそばに寄り添って。わたしは絶対に田丸素峰をわたしのものにしてみせるわ。負けるものですか)

隅の席に座ったまま、葉は心の中でそう誓った。素峰に初めて会ったときから葉が考えていたことである。

素峰の容態が治まり、素峰が口を開いた。

「近頃は歌の新興運動なども起こって、無産者歌人連盟なども結成されて、わけのわからぬことを言っている連中もいる。工場へ、農産への合言葉で俺達は進もう、あいつらの牙を抜くまでは。こんな句が短歌とは到底思えんよ。国語体が新しいと思っている連中もいる。新しい歌を謳う心は、つねに誰しもが、胸に抱いていなければならぬことだが、花埋みは一時的な歌壇の流れに、何らとらわれることはない。古代の日本では、草木も、ものを言ったという。草の言葉はやがて、言葉の花を咲かせた。それが万葉の歌麿を綴った。この原点をわれわれはずっと忘れずにいたいものだ」

素峰は居ずまいを正し、文学者の顔になって同人たちに一席ぶった。

葉はもったいぶった素峰の言説に反発も感じたが、その間、子細に素峰の表情や仕草を観察していた。

前回、葉が素峰を訪ねたときは、着流し姿だったのに、今日の素峰はみんなの目を意識してか、大島袖の袴の着物を着ていた。まだ、新しく、素峰の暮らしぶりでは、自分で買い整えるのは無理だと、葉には思われた。

(素峰は結局は女に買われているのだわ。弱々しいあの体では働きに出るわけにもいかないし、だいいち、いまだき、不景気であるの人に合った仕事などありはしないもの)

そう、一人呟きながら、葉は細い素峰の指の動きを追っていた。葉には男を選別するときの一つの基準があつた。素峰の手指は芸術家らしく、細くしなやかに葉には見えた。自分の肌直(じ)か触れる男の指―葉は女の手に似た繊細そうに見える指のかたちが好きだった。その基準に、素峰は適合していた。

物語りの中では、後に、同じような設定の元、好きになって行く正日蓮会の教祖、城ノ内魁ともこの点では似通うところがあつた。

会合が終わつた後、葉は少女趣味そのままの桜色の封筒に忍ばせた恋文を、人の目を盗み、そつと、素峰の書机の上に積まれた書籍の間に挟んだ。

うぶな女心が、切々と書き連ねてあり、結びの文は、わたくしを先生の愛で、女にして下さいませ。と書き綴つた。

五月の声を聞いた。若葉の緑が葉の目に染みだ。二週間ほどの間に、素峰とは手紙のやりとりが二度あり、素峰は美しい文章で飾った誘惑の文句を、葉の許によこした。

葉の乙女心を謳い上げた歌を誉め称え、その穢れのない心と体に、憧憬の想いをつのらせているふうのことを書き記してきた。

(わたしは田丸素峰によって、初めて女にされるんだわ。わたしも、その気にならなくちゃあ) 純情な心のまま、素峰に抱かれる日のことを想定し、葉はあれこれと頭を巡らせた。

自分がこれから、素峰を相手に果たそうとしていることは、一つの儀式だと葉は考えていた。思えば、十五歳の夏の夜、何の心の準備もなく、少女は生糸仲買問屋の男に身を捧げた。あれは

不意に振りかかってきた廓（くるわ）への身売り話から、生じた身の保全のための策だった。その結果が身の保全につながったかというところ、いまの暮らし振りを見れば、賢明な策だったと言いはない。

素峰への心の向け方は、好意を抱いてはいたが、心底、素峰に惚れ抜いているわけでもなかった。吉永踏菁の才媛ぶり、自分との育ちの違い、そんなことへの対抗心が、余計なこと、素峰を自分のものにしようという露骨な心情となって表れていたといったほうが、この場合は当を得ていた。会合のあった日に、介抱に努めたもう一人の女性、宮田桜子に対しては、何の嫉妬心も葉は持たなかった。初めから、ライバルではないと葉が自身で判別していたせいであった。後から知ったことだが、桜子の父親は大蔵省に勤める高級官吏、桜子は一人娘で、素峰のところに通うのを心よくは思っていないふしがあった。親に隠れての歌の修行というわけだが、この身分素性として、葉からすれば、許せない女の一人ということになる。

五月晴れが続いていたのに、ここ、数日、雨続きとなっていた。

葉は自分で日を選び、下谷の素峰宅を一人訪ねた。夜の七時過ぎのことで、この日は新橋のカフェーは休んだ。しつこく言い寄る男がいて、その男の顔を思い浮かべたら、今夜は店に行きたくなかった。

葉はこの日、急に素峰に会いたいという思いがつのった。だが、まだ、自制心は働いていて、今夜は処女のごとく振る舞い、身は任せずにおこうと、自分なりの楽しみの部分も、予め想定していた。

葉は素峰の関心を得るために、懐に五十円の大金を入れていた。花埋みの出版費用として差し出すつもりであった。うなぎ問屋の橋本に身を任せることで手に入れた蓄えの金であった。

素峰の家に着いたのは、午後七時過ぎの時刻のことであった。

葉は着いてから、家のまわりを一周した。中に誰かいる気配を感じたからである。

ちようど、暮れどきで、表通りから見える隣家と接した一角から、小さな庭のあたりが望めた。足を止め、中を窺ったとき、雨戸を閉めるために、女が濡れ縁に立った。

葉が目にした女は吉永踏菁だった。そそくさと、慌てたふうに、雨戸は閉められた。

「こんな時間に。やはり、そういうこなんだわ。あの二人は」

そう、呟いた葉だが、不思議に嫉妬心は感じなかった。かえって、二人の仲がはっきりしたこと、自分の演じる役柄に、葉は興味を沸かした。

大金が懐にあるので、立ち去り難かった。葉は雨戸の閉められた庭に入り込んだ。扉はないので、隣家との境になる細道をたどれば容易に入れる。濡れ縁があったので、その縁の下に人にはわからぬよう金を隠した。次に葉は走り書きの文をしたためた。表にまわると、郵便受けにその文をそつと投げ入れた。こうしておけば、素峰も踏菁も、葉からの届け物に気づくはずだった。

時間が半端だったが、嫌な男が店に来ると約束した午後九時頃には、新橋の店に入れそうだった。（いいわ。あの男の言いなりになってやろう。この際、わたしにとってはお金のほうが大事なんだから）

自分にそう言い聞かす。

この夜、葉はよし乃に戻り、なにがしかの金をその嫌な男に抱かれた代償として得た。

一週間後、葉は素峰から日時を指定されて、下谷の素峰の家に迎えられた。その誘いの手紙には大金を受け取った旨のことも記されていたが、素峰は臆面もないというか、踏菁とのことには触れていなかった。

芝居がかっていたが、つまりは、この日は松ヶ谷葉の処女喪失の日となるはずだった。

朝から遣らずの雨が降っていた。梅雨にはまだ遠いのだが、男と女をしつとりと濡れそぼれさせ  
そうな細い雨足だった。

断髪の女はお白粉つけないまま、素峰宅の玄関の土間に立った。服装も今日はおとなしい感じ  
のものにした。午後六時過ぎの時刻だったので、土間はもはや暗かった。

葉はもじもじしているふうの所作をして見せた。素峰が顔を出し、上がるように手招きした。

素峰のほうも緊張気味であった。

素峰の顔を見るなり、葉は、

「先生、わたくし、足が震えて：」

と可細い声を出してみせた。

「ああ、わたしも思いだけは」

あとの言葉をおぼれたのか、素峰は喰い入るような目で、葉の顔を見た。それからシルク地のワン  
ピースの流れのままに表されている葉の体の線を、上から下まで、舐めるような視線で追った。好  
色な表情になると同時に、無意識のうちに素峰は唇の端を湿した。

「上がりなさい。わたしと君だけだ。誰も邪魔する者はいないよ」

急いたふうの素峰は言い、自分のほうから、手を差し伸べた。葉は小さく頷き、身を屈めるよう  
にし、上がり框に足を掛けた。

「さあ、さ」

と、素峰が落ち着きのない声を出し、書斎のほうに葉を招じ入れた。思い出したように、

「お金の工面をさせて、ありがとう。救かるよ」

と、とってつけたような台詞も用意した。

書斎には手回しよく、座布団が二つ、書机の脇に並べられていた。用意万端整えて、素峰は葉の  
来るのを、いまか、いまかと、待ち受けていたかのようなのである。

「先生、本当にいいんですか？」

「ああ、そのことは」

二人は妙な会話を交わした。恋文には綿々と、十九歳の小娘を装った素峰を慕っているふうの心  
情が綴られていた。すべてを恋心のままに受け入れたい旨の一文も書き記されていたのであった。

座布団に二人は腰を下ろす。

どうも、ぎごちない。素峰のほうは演技ではなく、どこか、純情なところがあるようだった。

「わたくし、手紙では激情ばかり書き綴って。先生、わたくしをはしたない女ときっとお思いでし  
よう。いまはそんな自分を恥じ入っているところです。女のわたくしから、先生をお慕いするあま  
り、つい」

「君は『恋衣』の熱烈なファンだからね。歌詠みの心が昂まれば、このようなこと、現実のことで  
はないかも知れないが、わたしたちの間では許されるような気もする」

素峰はきれいな事を並べ立てた。

『恋衣』は葉の独学の教本となった与謝野晶子らの出した合著本のことである。

初めて素峰を尋ねたとき、二人はその本の内容について話し合ったことがあつのだ。

「男と女のことって：。先生、わたくしを心から愛して下さいますか。先生に身を捧げるのはわた  
くしの心の証です」

「ああ、わかっている。わたしだって、一目、葉さんを見たときから、妖しく心が立ち騒いだ。そ  
れが愛というものかも知れない」

素峰は真つすぐ葉を見返してきた。

書机の上に置かれたシェードランプが、素峰の背を切り取っていた。小さな花柄模様が傘の部分  
にはあしらってある。

(誰の贈り物かしら?)

この前は見かけなかった品である。  
「先生、こうしているだけで、わたくし、もう、息苦しいのです。あの：わたくし出掛けに体は清めてまいりました」

処女を装っている女の台詞ではなかった。

「待っていてくれたまえ」

上気した素峰の頬に赤味がさしている。葉から見ると、素峰は熱っぽい顔に見えた。

素峰はそそくさと、立ち上がると、隣りの部屋に立つて行き、襖を閉めた。

素峰が隣室で何をしているのかは葉には直ぐにわかった。夜具の整えをしているのだった。

葉はしおらしく控えていたが、口元には意地の悪い笑みが作られていた。

男共への復讐？それほどの大袈裟な考えはないのだが、その対象者に素峰を選んでいるようなところはあった。

男性不信の気持ちのせいで、自分が好ましいと思う男性にも、つい、刃を向けてしまう癖を、葉は身につけてしまっているようだった。

性への期待感よりも素峰の心を弄んでみたいという想いのほうが強いのはたしかだった。

二人を遮っていた襖が開かれた。

一組の夜具が四十ワットの暗い裸電球の下に敷き伸ばられていた。

「葉さん、後悔することはないね」

その持つて回った台詞に、葉は鼻白む思いをしたが、書斎の間に座ったまま、葉は頭をわずかに振り、それから素峰を見上げた。立ったままの素峰の目の内をじつとを見返す。

葉はよろよろと立ち上がり、敷居を危なっかしい足取りでまたいだ。夜具の敷かれているところまで足を運ぶと、

「ああ、わたくし、もう…」

と、葉は切なそうな声を出し、それこそ、足をもつれさせる恰好で、夜具の上に倒れ込んだ。

もう、素峰は一言も発しなかった。葉を押さえつける姿勢で葉の体の上にかぶさってきた。ちゃんと葉を仰向けにさせ、いきなり、狂おしげに唇を合わせた。

いやいやをし、葉は頭（かぶり）を振った。

が、いつか、素峰の為すがままに、葉は身を任せた。自身の動機は不純なところがあつたが、甘美な感覚が生じ立つのを、不思議な想いで葉は受け止めていた。心のどこかで、恋というもののかたちを、葉はなぞっていたのかも知れない。

素峰はシルク地のワンピースの背側のボタンを外しに掛かった。その震えている細い指をちらと見遣ったとき、葉の欲情に火が付いた。

「先生、先生…」

と、葉は夢中ぶりの声を発した。

「君の裸身をずっと夢見てきた」

その文句を口にした途端に、素峰の仕草は乱暴なものになった。両肩からワンピースの袖を抜く前に、素峰はその下のシュミーズの胸に顔を埋めて来、下着の上から肌の匂いを嗅いだ。執拗な行為だった。

葉は本当に処女の女が、身を捧げる想いに捉われ始めていた。それだけの感情移入は、多感な葉のこと、一つの世界に没入する感性とでも言うべきものは生来持ち合わせていた。

次に不器用な手つきで、素峰がワンピースを外しに掛かる。葉は着せ更え人形を真似ていたので、素峰はワンピースを脱がせるのに、一苦労した揚げ句、やっと、葉をシュミーズ一つの姿にした。両の肩紐に素峰の手が掛かった。薄目を開け、葉は素峰の表情を窺った。

のど仏がごくりと鳴り、半ば口は開かれたままだった。すつと、肩紐が外された。

「あ、きれいだ」

と、一言だけ、素峰は賛嘆の声を漏らした。抜けるほどの色の白さと、若さを保った円錐形の乳房、乳房の大きさも小指大で見た目には可憐に写るはずだった。葉は緊張したふうに、大きく息を吸い込み、切なげに息を吐いたので、胸のふくらみにつれ、双つの乳房が息づきを伝えた。

「恥かしい……」

「ああ、恥かしげに震え立っているよ。愛の口づけを上げよう。君の乳房に」  
素峰も葉に合わせ、囁きの文句を口にした。

とても熱い息が葉の左の乳房に吐き掛けられた。もう一方の乳房は、裾野から手指でつかみ取られていた。その手指も熱を帯びている。苦しうに、素峰は肩で息もついてみせた。

興奮の度合いが高く、次第に葉の胸に顔を埋めていた素峰の息は乱れてきた。

それでも、素峰の乳房への愛撫は長く続いた。

葉が判断したところ、素峰は女体の扱いには慣れているようだった。

事実、葉は乳房への愛撫だけで、体の芯が疼き立つのを感じ始めていた。

が、葉がもつと、愛撫を続けて欲しいと願ったのに、素峰は早々に、葉の下半身に手を伸ばしてきた。いつか、葉はブローズ一つの姿にされていた。葉は両手で、股間を隠すようにし、抗らう姿勢を一応は示してみせた。

「愛のためだよ。二人の」

素峰は愛の賛歌を謳い上げた短歌も多くものにしていった。その続きの文句を、この薄暗い部屋での濡れ場の場面でも口にした。

「はい、わたくし、先生に女にしていたたく覚悟は出来ております」

葉は健気に答えた。もう、抵抗する姿勢を解いた。両手をだらりと下げ、白いシーツの上に置いた。ブローズを取られるときだけ、わずかに、下半身に力を入れた。素っ裸にされたとき、葉は内腿を固く閉ざし、両足を突っ張るようにした。

素峰は葉の横に添寝をしてき、葉の耳にそつと囁き掛けた。

「花埋みという言葉がわたしは好きだ。そこはかとはない花の儂なさがわたしには感じられて。素知らぬげに咲いている花だが、たしかな存在感がわたしにはあるように思える」

葉はその快い言葉の響きだけを聞き取った。

すでに、暖かさのぬるみの感じが、葉の股間の奥には生じていた。

葉は少しづつ、脚を開き立てていった。素峰の右手の指だけがひそみに向けられた。

すーと、からめとるように、初めにその指は葉の陰毛の茂みを探った。

葉はあの細くて長い素峰の指のことを思った。

と、指は下に下りて来て、火照ったかたちに触れた。もう、たつぷりと濡れている。

葉はその淫蕩さを隠すために、素峰の手指を股間で挟みつけた。素峰はそのまま葉を自由にさせてから、中指で割るようにし、ひそみをまさぐり始めた。

ぬめぬめした快さに、葉は、「ふっふっ」と息声を漏らした。

やっと、葉はその気になってきた。

素峰の気持ちは急いでいるふうに葉には思えた。添寝をしていたのに、素峰は股間の濡れに一度触れただけで、体を起こした。

葉の足元にうずくまるようにし、五、六秒のことだったが、素峰は女の肉の相を賞でた。露出症の癖のまま、葉は股間を開き、男の目にその肉の相をさらした。

体中から一気に血の気が引いて行くような充実したひとときを葉は味わった。

股間を擦り合わせ、開き立て、そして、爪先に力を入れ内腿をひくつかせた。

が、このとき、素峰は急に咳込み、揚げ句に啖でも詰まったのか、のど声を発した。

「先生、体のお加減が」

葉は鼻白んだが慰わりの言葉を掛けた。

裸身を起こし葉は介抱に努めた。慌てて素峰の背をさすった。

「何でもない。もう、大丈夫だ」

素峰の咳はひとまず治まった。

葉はまた白いシーツの上に横たえられた。

素峰はしきりに結合の行為を急いだ。

細い指で、たつぷり愛撫されたかったのに、素峰は早々に、葉の体の上に乗れ、葉の股間を割ろうとした。ちらと、葉は意地の悪い視線を投げた。捧げられた一輪の花を、何としても、もぎ取りたという想いで、素峰は執心のほどを示したが、体の調子が悪いらしく、男の物は雄渾（ゆうこん）の力を漲らせては来なかった。

「先生、大丈夫ですか？」

ついつい、声を掛けずにはいられなかった。

「ああ、例え、死（タナトス）の世界にあらうとも、男と女は愛の結実の素晴らしさ、生のパトス（情念）の輝きをいつも手していなければならぬ。生かされている命の脈動、それが愛の世界というものだよ」

なお、素峰は独りよがりの台詞を口にした。苦しそうに、また、咳をし、今度は口を押さえると、「ごぼっ」と、妙など声を出し、その拍子に血が噴き出た。喀血（かっけつ）をしていた。

手指が血に染まった。

慌てて、葉は近くに用意してあった桜紙を取り、素峰の口元を押さえた。

葉は体を離れたくなかったが、色事に耽っている状況にはなかった。

弱々しい目で素峰は葉を見返すと、

「ああ、すまないね。こんなことになって」

と言い、背を丸めると、素峰は蓬髪を掻きむしるようになった。

「あの、先生、わたくし、初めて、処女（おとめ）の体を先生に触れられて、震えるような思いに、ただ、夢中でした。もう、わたくしたちは結ばれたも同然ですわ。これだけ、心の琴線に触れ合うことが出来たんですもの」

「いやいや、結ばれると言うのは」

と、言い掛けて、また、素峰は咳き込んだ。

「先生、横になられたほうが」

「そうしよう。前にもこんなことが。それにしても、葉さんが女になることを望んだ日に、こんな始末で、葉さんの心をないがしろにしてしまうとは」

未練がましいもの言いの中で、素峰は無念さを面に表して見せた。

素峰は高熱を発していた。素峰は精魂を使い果たしたように、この後、ぐっすり眠ってしまった。

気がついてみると、雨脚が強くなっていた。平屋の屋根にたたきつけられる雨音を葉は聞き取っていた。

素峰の病人顔を見ていると、急に、恋の遊びが馬鹿らしくなった。

何か、自分が不幸を背負っているようで、その片棒を、素峰も担いでいるのではないかと、余計なことまで考えてしまった。

まわりの者の薦めにも耳を籍（か）さず、素峰は入院を拒んだ。

微熱が続き、臥せていることが多くなったが、踏菁や、葉の看病を受けて、甘えているようなところもあった。「花埋み」を出す費用のことで、踏菁と、葉の間で、女同士のちょっとした鞆当（さやあて）事もあった。元々、育ちのせいでも、葉は金の力を見せびらかすようなところがあった。金を提供したいきさつは、踏菁も承知のことであった。それで、二人は張り合ったのだ。

結局は、素峰の取り持ちで、これまで通り、踏菁が負担していた発刊費に、葉の提供した金も加え、増ページの特別号を出すことに決まった。

「このご時世だ。いつまで、「花埋み」を続けられることか。歌だけじゃなく、これまで書き溜めてきた短歌界に対苦言や、提言などの論も載せたらどうか。踏菁さんだって、未発表の歌があるはずだ」

編集会の席で、素峰は言った。

寝たり、起きたりの素峰の病状は、よくも悪くもならない状態にあった。

しかし、次号の編集が始まった日、また、素峰は喀血した。

今度は、相当、病状は重く、入院を必要とした。九月の初めの日のことであった。

葉は、相変わらずのカフェー勤め、素峰の看病などしている暇はなかった。

踏菁と桜子が素峰にはつきつきりで、葉の出る幕でもなかった。それでも、発刊のための資金は潤沢にあったわけだから、九月の終わりには「花埋み」の増刊号は発刊された。

素峰は、病院で、この短歌誌を手にしたことになる。

松ヶ谷葉が詠んだいくつかの短歌も掲載された。

素峰に褒められた句もあり、葉は歌人としての歓びも味わった。

次のような句であった。

。もの言へば 火玉落ちむと 黙したり

線香花火の 夏の埋もれ火

暗い時代の息づきも感じ取られて、秀逸の作だと、素峰は葉の才気のほどを褒め立てた。

だが、この葉の歌の意味のままにか、「花埋み」は、この号をもって廃刊となった。

同人たちも散り散りになり、人里離れた多摩の山地にある終末医療施設の結核療養所に、素峰は送られた。それだけ、病状は悪化していたのである。

もちろん、葉には素峰は無縁の人となった。ただ一人、踏菁だけが、最後まで愛人顔をし、時折り、素峰を見舞った。

葉も歌の道に志が持てなくなった。

時代も時代だったし、自分を認めてくれる師が病いを得たことで、望みをなくした。私生活でも、こういうときはうまくいかぬもので、情人の橋本が他に女を作り、よし乃の名の菊世は、わずかの手切れ金をもらって別れる羽目となった。お陰で、自暴自棄の毎日が続き、菊世は、男たちを目の仇にし、荒んだ生活を送った。

十月の初めの日、葉は素峰が結核療養所で死んだ旨の手紙を踏菁から受け取った。踏菁は、素峰の弔いのこともあるから、直ぐに、会いたいと記していた。文面は、取り乱したふうのところはなかったが、最後に『あなただけに相談したいことがある』とあったので、葉は会う気になった。

心の中では、素峰の死を悼（いた）む気持ちまでは持ち合わせてはいなかった。自分が不幸を背負い込んだ女で、今度のことも、その流れの中にある一つの出来事なのだと、葉は褪めた見方を自分に強いていた。

△昭和七年十月三日△

踏菁と葉は多摩山地の結核療養所まで一緒に足を運んだ。道々、葉は素峰の生い立ちなどを、踏菁に聞かされた。群馬・桐生の生まれで、旧家の出だったが、歌の道に入ったことで、父親から勘当(かんどう)されており、その父親もその後、病死、その上、実家が火事騒ぎで財産を失くした。母親は、そのときの出火で焼死していた。そんなわけで、素峰には帰る地もないのであった。

いつも、凜としていた踏菁だが、すっかりやつれ、生きている望みを失っていた。

ローカル線の駅を降り立ったとき、秋の雨が静かに降り掛かった。

霧雨で、雨はあたりの風景をぼやかせていた。

二人が駅頭に立ったのは、午後二時前の時刻のことであった。駅からは、一日数便のバスしか出ていず不便であった。バスに乗り継ぎ、療養所のある地に着いたのちは徒歩となった。

秋川溪谷に沿っての山道なので、折りからの雨、谷地からは、細い狭霧(さぎり)が立ち昇ってきた。二人は二十分ほども掛けて、目的地にたどり着いた。

二階建ての木造の建物は薄汚れていた。いつ塗られたのか、白いペンキが剥げ落ちた板壁が目についた。

踏菁は茶毘(だび)に付された後の素峰の遺骨箱を受け取った。係員と口を交わすこともなく、二人は療養所をあとにした。踏菁が後生大事に、白い布に包まれた骨箱を胸のところに抱いていた。再び、小さな雨が降りしきる山道に二人は入った。

「わたし、葉さんを、これまで、ないがしろにしてきたような気がして。この際、きちんと謝っておこうと思うの。本当に、あなたが来てくれるとは思わなかった。宮田桜子さんに初めは声を掛けたのよ。同人としても彼女のほうが古いんだし。わたし、素峰先生と共に、あの世に行きたいと、先生が亡くなったときから、ずっと、考えていたんですけど、この考えを理解してくれそうなのは、葉さんだけのような気がして」

やっと、踏菁が胸の内を語った。

抑揚のない語り口で、すでに、踏菁は死に神に取り憑かれているようだった。

(一緒に死ぬ？踏菁は最後の選択をして、わたしをこの場に呼んだ。それで、わたしは踏菁の介添え人？それとも、素峰に心を捧げて情死の道を選ぶ？踏菁はその決心をわたしに迫っている？)

葉は自分の頭の中を整理した。

ふらついている踏菁の足取りに葉は危なっかしいものを感じた。

踏菁は自分の告げた文句に酔っているかのようであった。

「わたくしがここまで来た理由は踏菁さんはご存知ないのでしょうか？」

「先生の歌を愛していたからでしょう。それに、先生のお人柄にも」

「踏菁さんは身も心も先生に捧げられたのですか？そうでしょう」

「そんな。でも、先生は素晴らしい方でした」

踏菁は肝心の部分はぼやかし、逃げを打った。一步、一步の足取りが鈍くなった。

「踏菁さん、これって、とても大切なことですよ。歌だけに命を捧げるのって、これ、きれい過ぎる話だとは思いませんか。本当に、身も心も愛されていないと、女が男のために死ぬなんて、わたくしにはとても」

「わたしは死ねます」

踏菁は自分を勇気づけるためか、きっぱりした口調に戻り言った。

「わたくしも死ねますわ。先生のためなら」

葉が男相手に汚れた日々を過ごしていることは、踏菁は知らない。葉は良家のお嬢様を、今も装っていた。

「先生のために……」

自分から死への誘っておきながら、踏菁は戸惑いの文句を返した。その逡巡(しゅんじゅん)の



間を捉え、葉が切り返した。

「わたしは先生に初めて女にして頂いたのです。女の欲びも先生から授け頂きました」  
嘘も交え、葉は素峰との情事の始終らしきものを口にして見せた。

踏菁は口元を歪め、少しばかり、視線を泳がせた。

「…だから、そんなこと、わたし、分かっていました。葉さんを誘ったのは、二人とも、先生に愛されていたからでしょう。わたし、そのことで、先生に恨みの気持ちなど持つてはいません」  
「それなら別にいいんですけれど」

二人の間に沈黙が続いた。

踏菁は虚勢を張ったつもりなのだろうが、自分の気持ちの整理をはかねているようだった。

葉の言葉の遊びに弄ばれてもいた。

葉が聞きもしないのに、踏菁は話題を外し、素峰の最後を看取ったときの状況を説明し始めた。  
素峰が息を引き取ったのが、九月二十九日の夜半の時刻で、同室の患者と隔離するため、素峰の遺体は霊安室に運ばれた。踏菁の言葉を借りれば、人っ気のない真つ暗闇の部屋、一泊していくしかないで、誰かの死の床のようにも思える与えられた部屋のベッドで、踏菁は眠ることとなった。

踏菁は恐ろしに、寝付かれなかったと言う。

それに夜も更けると、療養所を取り囲む暗い森の奥から、死臭を嗅ぎつけたのか、鳥とも獣ともつかぬもの共が、相寄って来、この世のものとは思えぬ猛りの声を上げ、生きた心地もしなかったとも、踏菁は述懐した。

踏菁はこの世の地獄を見た思いで、一夜を過ごしたのだった。

翌日は、火葬場も近くにないことから、村人に頼み、大八車に素峰の遺体と金を払って仕入れた薪(まき)を積み、踏菁は火葬の役を引き受けてくれる村人と、秋川溪谷近くの焼き場に向かった。このあたりは土葬が普通で、火葬場はないことから、結核療養所で亡くなった者は、仮の焼き場で死体は処理された。

踏菁の話をもとめると、次のような顛末となる。

作業が始まったのは、午後二時前のことだったが、蒔は交互に積み重ねた上に、ブリキのトタン板が据えられ、遺体はその上に置かれた。薪に火が点けられ、歌人田丸素峰は踏菁の見守る中、茶毘に付された。

しかし、前夜に雨がひとしきり降ったので、空気も湿っており、作業は捗(はかど)らなかった。青い煙にむせながら死体を焼く初老の男と二人、踏菁は五時間ほども要して、やっと、遺体を灰にすることが出来た。

が、その間、踏菁が東京に帰るための最終のバス便に合わせるために、遺体が早く焼けるように、男は金串で遺体の内臓部分を突き刺したりしたので、踏菁は地獄の獄卒を目の当たりにしている思いを味わった。

結局は、バスの時間には間に合わず、今日、再び、この地を訪れることになったのだが、踏菁は自分の素峰への尽くしぶりを、どうやら、葉に語り聞かせたかったようだった。

二人共、そのあとは無言の行がまた続いた。

足元から立ち昇ってくる狭霧に、二人の着衣はしっとり濡れていた。  
いつの間にか、踏菁の一步、一步が遅々としたものになった。ふと、立ち止り、葉は踏菁が近付くのを待った。踏菁の髪は乱れ、雨を吸ってびっしょり濡れていた。

秋の季節のことで、寒さが増していた。葉は幽鬼の女が一人、山中をさまよっているかのような印象を持った。白い骨箱だけが、こちらに近付いて来るようにも見える。

(何よ、これ。わたしは、なぜ、こんな場所にいるの?)

葉は呟いた。寒さに身震いをした。やっと、踏菁が近くまで来た。

「わたしたち、先生のために殉じて死ぬのよ。そうでしょう。わたしはもう覚悟が出来ているわ。」

わたし、遺書も用意してきたのよ」

「あの場所がいいわ。ほら、少しは窪みになっていて、雨露がしのげそうよ」

葉が笹藪の茂った小道を指さした。そこは、脇道からも外れていた。葉は手を差し出し、踏菁を笹藪に誘った。冷たい死人のような踏菁の手を握る。

大きなケヤキの木の下に、二人はたどり着いた。葉がカーディガンを脱ぎ、笹藪の上に広げ、踏菁の座る場所を確保した。初めに、踏菁が白い布に包まれた骨箱を、大事そうに置いた。

「遺書って？踏菁さん、初めからその気なら、わたくしにも、おっしゃって下さればよかったのに。わたくしは、先生への思いを何も綴ってはいないのですよ」

「わたしは先生への思慕を込めて、短歌をしたためただけです」

「それなら、わたくしも、懐にした恋歌があります。先生の墓前にと思ってた歌ですが、わたくしの遺書になるとは思ってもみませんでした」

二人は死の間際にあるのに、素峰を巡って内なる火を燃やした。

踏菁が油紙に包んだ遺書らしきものと一緒に、ガラスの小瓶に入った昇永水（しょうこうすい）をバッグから取り出した。やっと葉は踏菁の覚悟のほどを知った。

二人は、大樹の下に座った。

葉は懐にあった白い漉き紙を手にした。骨箱に添える。作歌のために、いつも、懐に忍ばせているもので、白紙のままだったが、葉は遺書を真似た。踏菁も重ねるようにして、白い封筒に入れられた遺書を、折り畳んだその白紙の傍らに添えた。

「歌に心を捧げた人間として、歌と共に滅びの世界に身を預けられるのは、最高の幸せよ。わたしたちの身は朽ちても。言霊（ことだま）の心のままに、わたしたちは草木や花になり、きつと、自然の風音に寄せて、新しい歌を、この世に、届けることになるのだから」

おのれを美化した踏菁の文句に、ただ、葉は頷きを返した。

『古代の日本では草木も、ものを言った』この素峰の好きな一節を、踏菁はむなぞって見せ、おのれの人生の結びの言葉としたようだった。

濡れ草の上に置かれた昇永水の小瓶を、葉が手に取り、踏菁の前に差し出した。踏菁は昇永水の小瓶を包み込むようにし、手の平の中に収めた。

が、その手はぶるぶると震えており、踏菁は開かれた双眸（そうぼう）を、あらぬ空間に向けた。（この女、一人では死ねないものだから、わたしをこの場に誘ったのだわ。何が女子大出よ。いい気な人生を送って来て、わたしを何だと思っっていると言うの。わたしにとっては、あなたもこの世から抹殺してやりたい一人なのよ）

葉は踏菁に覆い掛かるように身を寄せると、踏菁が手にした小瓶に自分の手をかぶせた。コルクの栓を抜く。無臭なので、葉には何の抵抗感もなかった。

「わたしが！」

と、だけしか言わなかった。

踏菁の口を無理やり開かせると、昇永水の薬液を口の中に流し込んだ。踏菁が苦しそうにむせた。小瓶を踏菁が手で払おうとした。構うことなく、葉は踏菁の咽喉の奥へと、昇永水を、なお、注ぎ入れた。ほんの数秒のことだったかも知れない。

踏菁は後ろ向きに倒れ、胸を掻きむしるようになった。

体中をひくつかせた後、踏菁はぐたりとなった。薬液が胃を灼いていた。最期に、断末魔の叫びを上げたようだったが、もう、声にはなっていなかった。

踏菁は、十数秒後、息絶えた。

目障りな女を一人殺した。

踏菁の死を見届けた後、葉は雨に濡れそぼれている白い布に包まれた骨箱を手にした。

踏菁から奪い取ったという高ぶった気持ちはなかった。真から、素峰を愛していたわけでもない

と自分に言い聞かす。

葉は骨箱の包みを手にしたまま、笹藪を分け、元の道に出た。ここまで来る途中、予め、見当をつけておいた溪谷に至る道に分け入った。行く手は深い霧が谷底から湧いて出ているように、葉には思えた。

ひたすら、歩き、葉は谷を見下ろす高見の場所に立った。険しい崖の淵というのではなかったが、それでも、谷底は二十メートル余の深さがあった。

(さしづめ、地獄谷ってところね)

谷底を、葉は一度窺い見、一人、呟いた。

骨箱の包みを解く。瀬戸物で作られた粗末な骨壺を、直接、手にした。葉は何のためらいもなく、思いつきり遠くへと、その骨壺を谷底に向け投げた。

白木の箱は足蹴りにした。

何秒か後、骨壺の碎ける音が谷底から返って来た。

強い風が巻き起こり、足元に残されていた白い布が翻(ひるがえ)り、幽谷の底を目指して、ゆつくりと落ちて行った。

結局、葉は昇永水には口をつけなかった。

怖くなって、途中から逃げ出したと、葉は自ら警察に届け出た。その後の警察の調べで、吉永踏菁が昇永水を入手した経路なども解明され、また、遺書もあったことから、踏菁自身の一連の行為は警察では不問とされた。

しかし、この女流歌人の後追い心中事件は、新聞種になった。このとき、松ヶ谷葉の本名、それに、横瀬菊世の名も新聞の紙面には載った。

やがて、この事件の顛末が、菊世のこれからの人生に一つの影を落とすことになるのだが、このときは、一過性の事件として、世を騒がせたただけだった。

（昭和十年十月二十一日）

この日、また、菊世は自分の過去の一駒の中に身を置くことになった。

短歌誌「さわらび」を手に、笹川弁護士が仙台から上京してきた。

他の用件を抱えての上京だったので、慌ただしい日程だったが、菊世は笹川弁護士と都内の喫茶店で会った。

「やあ、元気そうで何よりだね。わたしは松ヶ谷葉さんのファンだから、会うのを楽しみにしていたんだよ」

笹川弁護士は、屈託のない態度で、葉に話し掛けた。笹川弁護士は余り本名では呼ばない。歌人、松ヶ谷葉の名を認めてくれているようだった。

「先生、お久しぶりです。今日は朝から、心が浮き浮きして。わたしも先生とお会いできるのを楽しみにしていました」

「これも一つの縁というものかな。美人に会えるなんて、わたしの職業ではめったにないものだからね」

「まあ、うまいことをおっしゃって」

白い首筋に手を当てるようにし、葉ははにかむ仕草を試みさせた。笹川弁護士は、葉が歌の道を貫くために、カフェー勤めをし、生計を立てていることは承知している。

笹川弁護士は葉の色香に惑わされたところがあるのか、眩しいものでも見るように、まばたきを試みさせた。

「ああ、そうそう、例の「さわらび」が発刊になってね。わたしのところに送られてきた。葉さんの宛て先がわからないので、転送してくれとあったが、ちょうど会う機会が出来たものだから、直接、持参しましたよ」

笹川弁護士は黒い革カバンから、小冊子を取り出した。テーブルの上に置く。

「これですか。きれいな表紙なこと」

葉は手に取りながら、無邪気な声で応じた。季節感が表されており、秋の季語になりそうなあけびの果実が、青い線描画で描き取られていた。

だが、直ぐにはページを繰る気にはなれなかった。これは勇二が葉に無断でしたことである。葉の本意ではない。

「あなたのところには彼からはどんな手紙が来ました？手紙の受け取りを拒否しているのに、自分のほうから手紙を出すのは、あなたに失礼だと思ったものですか」

「必要なこと以外は。私的な感情というか、そのようなものは記していませんでした」

「そうですか。死刑の判決が確定して、後は死刑執行起案書のサインを待っただけの身、法務大臣の決断次第で、直ちに執行となるわけですから、人間的な感情を持ってというほうが、無理というものでしょうか」

その、笹川弁護士の話を聞き、葉は手にした短歌誌をテーブルの上に裏返しにして置いた。

何か気おくれがした。発行元は長野県塩尻市のさわらび社とあった。

笹川弁護士から、さわらび誌に、赤石勇二との獄中書簡の一部である短歌が転載される旨の連絡は先に受けていたわけだが、いざ、現実のものになってみると、ある種の鬱陶しさが、心の中を占めた。

世間に美談話が知れることへの恐れの気持ちが強かった。その欺瞞ぶりに自分に嫌気がさしていた部分もあったが、何より、名が世間に知れ、自分の素性を洗われるのが、いちばん、葉には気掛かりであった。

すべてはあの山形の山中で、勇二と交わした約束事の文句から端を発したことである。菊世は昨年の十二月、初めて、勇二に面会するために宮城拘留所を訪ねた。勇二は女流歌人になりすました菊世を一応は礼儀正しく受け入れた。が、二人の会話は長く続かず、勇二は型通りの挨拶の後には、沈黙がちで、菊世に強い視線を投げ掛けてきた。

ちゃんと拘留所に面会に行き、勇二が求めた（誠意）というものを示したつもりなのに、このとき、菊世は心の中が冷えた。短歌を送る気持ちがなくなった。そして、今年の春先、勇二に死刑の判決が出た後、二度目の面会のために仙台まで赴いた。やはり、女流歌人に身をやつた自分の姑息さ加減に葉自身が負目を感じていたせいであった。結局、このときは、勇二は面会を拒否し、葉はその結果、余計、追い詰められた気分になった。

一回目の面会の後は、菊世は勇二に短歌は送っていない。獄中美談など、すでに、どこにも存在していなかった。いまはこちらからの手紙も勇二は拒否していた。勇二の心変わりに、菊世は不安な思いを抱いたまま、その日、その日を過ごしてきたことになる。

（何よ。勇二はこんなことでわたしに復讐をしている気なの）

葉は独りごちた。目の前に、笹川弁護士がいなければ、この文句は口に出して言ったことだろう。「葉さん、でも、あなたはいいいことをされたのですよ。赤石勇二は一時期であれ、あなたからの書簡が寄せられるのを、一日千秋の思いで待った時期もあったのですから。初めから死刑は覚悟していたようですが、それでも、現実の世で得られなかった愛の便りを、彼は閉ざされた世界の中とは言え手にしたのです。他の者からも、彼は羨ましがられていましたよ」

「それだけに、死を前にして、かえって、辛い思いをさせているのではと、わたしは自分の取った行動に、ずっと、疑問を持ち続けてきたのです」

ふっと、葉は息を継いだ。

「葉さん、紅茶が冷めるよ。近頃では珍しい英国産のダーズリンだ。東京にはまだこのようなものがあるんだね」

笹川弁護士は言い、自分もカップを手にした。葉には紅茶の味はしなかった。

「わたしたち、結局はこのままにしていたほうがいいのでしょうかね」

「ふーむ、そうだな。ああ、そうそう、わたしが上京をする前日に、赤石勇二のご両親が面会に見えてね。余り、口をきかなかった赤石だが、山形には死婚風習というのがあってね。そのことを、赤石がぼつりと口にした。早くして死んだ者に、死者の花嫁をもらってやるという風習なんだが、葉さんは知っているかな」

「いえ、わたしはそのような話は……」

葉は目を伏せた。どきりとし、笹川弁護士の次の言葉を待った。

「最上三十三ヶ所の観音堂などに、婚儀の整いを絵馬に描き、残された者が奉納の儀式をするんだ。仮りの世界のことだが、東北は昔から信心深い地だからね。結婚をする当人同士はいないのに、仲人まで用意して、三々九度の杯を交わす場合もある。あの世で、めでたく二人は結ばれるってわけだよ」

「そんな……。でも、どうして、赤石さんがそのことを口にされたのですか？」

葉としては問わずにはいられなかった。勇二と一緒に過ごしたひとときのこと、頭をよぎった。

(札所二十四番の上ノ畑観音堂内で、わたしは情交に耽った。あれが二人の最後のちぎりとなった。まるで、死の花嫁の役を、あのときから、わたしは運命づけられていたってこと？嫌な話だわ)

「親を前にしてのことだから、赤石に甘えもあつたのかも知れません。あの習は大体が長子に限られていて、三男坊の彼には、死後も縁のない話しなんだ。小さい頃から親元を離れていて、道を誤った。親への恨みもいくらかはあつたかも知れない。いや、彼としては死後の世界を信じたかつたのかな」

笹川弁護士が葉の問いに答えた。

「それで赤石さんはどうしろと？」

「わたしは葉さんに会う予定があると言ったら、歌の世界にも関係のある話かも知れないから、ぜひ、葉さんにも、この話は伝えて下さいと、わたしは頼まれた」

「：わたしにですか。歌に詠むと言っても、わたしは実際には、その、死婚の絵というの見たことはありませんから、それは無理な話しだと思います。それにもう歌は作っていませんし」

「それはそうですね。いや、東京にお住みの方に、つまらぬ話をしてしまいました。こちらの方に、東北の民間信仰の話し、余り関係のないことですよ」

笹川弁護士は言い、非礼を詫びた。

笹川弁護士に次の約束の時間があり、二人は、ほどなく、喫茶店を出た。

松ヶ谷葉は横瀬菊世の素顔に戻った。

街路を一人で歩くと、秋風が身に染みだした。いちよりの黄色い葉が風に煽られ菊世の足元でまつわりつくように舞った。

(何のこと？勇二がわたしを死者の花嫁に選んだって話なの、これは：。巡礼行は菩薩様を引き連れての同行三人でことになっていくけど、勇二は逃げ伸びた山中で最後はわたしに、一人罪を負うと誓ったはずよ。何なの？どこまでも、付き合えと、勇二はわたしに言いたいのかしら？それとも、死刑の執行の前に、勇二はわたしを裏切る気になっている？もはや、すべては決着がついたことなの)

例え、勇二が菊世が共犯者として、告発したとしても、一事不再理の法により、審議がやり直されることはない。確定判決をした場合、再び、控訴の提起を許さないというこの刑法の原則に立てば、菊世は山形の佐田仁助夫婦殺人事件に関しては、罪に問われることはないのであった。

だが、菊世は自らが手を下した横瀬公次郎殺人事件については、この限りではなかった。

迂闊(うかつ)にも、逃避行の途次、一人だけ逃げ出さないための証しを勇二に求められ、菊世は岐阜の事件の一部を口にしてしまった。

犯行の方法も、どこか、似通ったところがあった。上ノ畑観音堂の下に土を掘って埋めた巡礼具は、一切、勇二は取調官には明かしていなかったもので、いまも土中にある。

岐阜の山中の祠堂の下に、埋めた凶器や、着衣などの存在も、話しをつなげば、それらしい事件の輪郭は浮き上がってくるはずだった。自分の身辺を探っている岐阜から来た刑事がいる？菊世はそのことも気になっていた。

(死刑になる前に、勇二がすべての事柄を明らかにしたら？)

菊世はすべてをばらすぞというメッセージを、勇二が獄中から送ってきたような思いに捉われた。うそ寒い思いに菊世はぶるつと体を震わせた。

「横瀬菊世が松ヶ谷葉という歌人だったとはな。こりや初耳だがや」

土岐広次刑事は同僚の刑事の顔を見ながら言った。

隆慶寺を二人の刑事が訪れていた。短歌誌「さわらび」が発刊されて四日後のこと、今日は十月二十三日、雲一つない秋晴れの日のことであった。

「うちのやつの遠縁の者が、ちよつと短歌をやるものでえ、たまたま、この「さわらび」に紹介されている松ヶ谷葉の短歌を目にした。ほら、その歌の一つを書き写してきた。

。ほのぼのと 明ける一日（ひとひ）の 光なり

窓辺に添いて 共に身を染（そ）む。

わしは無粋もんじゃが、これや、恋歌じゃそうじゃ。ようはわからんが、うちのやつの家系のものには、短歌誌に投稿しているもんもいたりするもんで、それで、横瀬菊世の名が知れたというわけなんだわ」

住職の井崎隆見は自分の女房のことを、うちのやつと口にした。

土岐刑事は、「さわらび」を手にし、ページをばらばらと繰った。真ん中ほどに、松ヶ谷葉が死刑囚赤石勇二に贈った恋歌と思える句が、十首紹介されていた。

美談話がここでは誌面を飾っていて、松ヶ谷葉と赤石勇二の往復書簡の一部も掲載されていた。

「それで、横瀬菊世と知れたんはまたどうい理由があるんかいの。和尚にここは一つ、謎解きをしてもらわんと」

土岐刑事は横瀬菊世に関していい情報があると、署に電話連絡を受けてやって来た。

電話で長話しの時勢ではないから、内容までは問い質すわけにはいかず、ともかくも、この場に急ぎやって来たというわけである。

「この新聞の切り抜きは借りてきたんじゃが、前に女流歌人が二人、肺病で死んだ師の後を追って心中事件したことがあった。わしが横瀬菊世のことを、うちのやつに、ほれ、あんたが二年前、横瀬公次郎殺しの事件のときに、わしを訪ねて来たときに、刑事さんが来たと話しをしていたもんで、そのことを覚えていて、それで、この新聞記事をたまたま見つけ出したというわけなんじゃ」

「その新聞、ちよつと見せてくんさい」

土岐刑事が古い新聞の切り抜きを手にした。

和尚が示した新聞記事には、田丸素峰が主宰していた短歌誌「花埋み」と、後追い心中をした二人の女流歌人の話しが、かなり、詳細に記されていた。

その記事によると、吉永踏菁という筆名の女流歌人は昇永水を服毒して死亡、そして、心中の片割れ、松ヶ谷葉は服毒を踏み、救かったとある。吉永踏菁、松ヶ谷葉とも本名も記されており、土岐刑事はその記事で、横瀬菊世の名を確認することが出来た。横瀬菊世が住んでいた番地も記載されていた。

「昭和七年十月三日に、後追い心中事件があったというわけですな。三年前のことだもんで、同じ住所には住んでいないかも知れんが、確認してみる必要はありそうですな。これは」

「刑事さん、横瀬菊世はやはり、公次郎さんが殺された事件と関係があるんかいの」

「いや、犯人と決めつけておるわけやないが、すべて被害者の身辺を洗ったが、なにも出てこん。それに殺し方やが、もの取りでもなく、怨恨説が妥当だもんで。ただ一人、公次郎の身辺の者で行方が知れんのが横瀬菊世、それに有力情報として、三年前の九月二日、菊世らしい女が、多治見の町にいたというのを目撃した者がおるのや。昔、菊世が紡績工場の女工をしとったときに、仲のよかった女で、駅前で午後五時頃姿を見かけて声を掛けようと思っただが、直ぐに列車が来て、駅に入ってしまったってことなんやわ。横瀬菊世と断定はできませんが、事件があった前日、どこかに宿を取つとれば、翌日、犯行現場に向かうのは可能ってことですな」

土岐刑事は和尚に説明をした。手垢の染みた手帳には、メモも何枚か糊で張りつけられていて、手帳は分厚くなっていた。土岐刑事の執念のほどが窺えた。

「女が男を殺すのはよつぽどのことだわな。どうも、わしには精一さんの娘がそのような大それたことするようには思えんのやがな。それに死刑囚に歌を贈るというのも、なんや、優しい心根があるようにわしには思えるがの」

「わたしも心の中ではそう思っとんです。まあ、横瀬菊世の生い立ちなんか聞くと、同情はしとるんやが、いまのところ、この線しか、考えられん状況だもんで」

土岐刑事は隆見和尚に一応は同調して見せた。だが、土岐刑事はごま塩頭に手をやりながら、「地蜂の巣を探して、ほれ、へボ（蜂の子）を採るときに、蜂の足に印をつけて、みんなが後を追うようなもんだで。どこの空を飛んでいたか、さっぱりわからなかった横瀬菊世やが、今日の和尚の話で、どうやら、巣らしきもんにたどり着けるかもしれない。いつも、東京に行ったときは空足ばかり、大分悔しい思いをしてきたでな」

と、自信めいた文句も口にした。

岐阜のあたりは昔から、地蜂の巣を捜し当て、蜂の子を食用とする習がある。捕まえたおとりの蜂の足に、真綿などの端切れをつけ、何人かが組になって、後を追う。

土岐刑事はその蜂の子採りに、自分の搜索行をなぞらえてみせたのだ。

「花埋み心中ですか。とんだところで、横瀬菊世の名前が知れたもんですね」

若い連れの刑事が言った。

土岐刑事は新聞の切り抜きと、短歌誌「さわらび」を借り受けた。

「発行されたのがつい先日ってわけだから、今度こそ、探し当てられるかもしれないで。発行元に質せば住所の確認はできるだでな」

「早速、手は打ってみます」

二人の刑事は和尚に礼を言い、隆見寺を後にした。有力情報を得ていた。二人の足取りは来るときよりも、勢い、力強いものになっていた。

土岐刑事は単身、仙台に向かった。

長野県塩尻市にある短歌誌「さわらび」に岐阜県警としては最初に、横瀬菊世の住所照会をした。そこでは不明で、弁護士笹川義一が仲介者であることが判明した。

地元警察に手配をし、笹川弁護士に連絡を取った。岐阜で起きた殺人事件の内容はまだ話すべき段階にはないので伏せた。

笹川弁護士のほうからは事情を聴いてから、本人の居場所を教える旨の連絡があった。

十月二十四日、土岐刑事は仙台市内にある笹川弁護士の事務所を訪ねた。

「岐阜県警の土岐です。この度はお手数をお掛けしますが、一つよろしくお願いします」

土岐刑事は笹川弁護士に対面するなり、律義に頭を下げた。

小さな事務所の窓からは、朱色のナナカマドの実が街路に沿って一際色を添えているのが見えた。秋の終わりを告げるこの街の風景の一つである。

「突然のご紹介だったものですから、何事かと思いましたが、しかし、松ヶ谷葉さんが岐阜の出身と聞いて内心、驚いているのです。わたしは何も聴いていませんでしたから」

「そうですね。松ヶ谷葉の本名横瀬菊世は先生もご存じのことですが、実は二年前の秋口に横瀬菊世の叔父に当たる男が何者かに殺されるという事件が発生しましてね。未だに犯人逮捕には至っていないのです」

「ははあ、殺人事件の参考人というわけですか」

「まあ、そういうことになりますか。わたしどもでは横瀬菊世の所在がつかめぬままに、今日まできたものですから、岐阜県警から送りました連絡事項で確認していただいたと思えますが、例の短



歌誌、さわらびに死刑囚との愛の交換を歌った短歌が紹介されているのを知りまして、松ヶ谷葉が横瀬菊世と知ったようなわけです」

「それは間違いありませんね。死刑囚の赤石勇二とこれまで二回面会をしていますが、そのときは本名を記しますので、わたしも確認はしています」

「それで、事件のほうですが、犯行は怨恨によるものと、わたしどもは確信しております。捜査の過程を申し上げますと、横瀬菊世は十五歳で上京、それも故郷を追われるようなかつこうでして、もちろん、辛い事情があつてのことです。殺された叔父は横瀬菊世の父親の弟になりますが、家督を継いだ後は長男の遺児である横瀬菊世を他家に出したり、まあ、その間、母親の死にも遭つておりまして、多々、同情すべき点はあるのですが、それはともかくとしまして、捜査線上には横瀬菊世は初めから上がっており、ずっと、岐阜県警としては、横瀬菊世の行方を追つてきたのです」

一気に土岐刑事は語った。

「重要参考人ですか。横瀬菊世の場合は」

「そういうことになります」

「ふーむ、なるほどね」

こんなやり取りの後、土岐刑事は横瀬菊世の東京の住所を笹川弁護士に教えられた。東京城東区（現江東）亀戸五丁目が横瀬菊世の住まいだった。

「これは関係のない話しだとは思いますが、横瀬菊世はどんな縁で、死刑囚の赤石勇二に接触するようになったのですか？」

「それは偶然のことなのですがね」

「偶然ですか？」

「ええ、赤石勇二の犯行動機となつたのは、商品相場に手を出して借金を抱えたのと、起死回生のチャンス欲しさに一獲千金を狙つたことによるのですが、相場師のえーと、ああ、そうそう、陶山利道と言いましたか。この男が横瀬菊世の勤める東京神田のカフェーで、たまたま、この男と知り合いましたね」

「そういうことですか。わたしも何度か、東京のカフェーなどにも足を運びまして、そのような場所に勤めているのではと捜査活動もしたのですが、やはり、そのようなところ」

土岐刑事は実際に、岐阜弁を使う女に注目をし、その所在を確かめたことがある。その翌日、女はその店を辞めていた。

「赤石勇二の起こした強盗殺人事件ですが、一応、参考までに事件のことは調べさせてもらったのですが、山形で起きた事件、公判では初めから単独犯行で進行したんでしょうか」

「と、おっしゃいますと？」

「いえ、刑事を長年やっていると、なかなか偶然とかいのが信用出来なくなりましたね。どうなんでしょうかね。赤石勇二に愛の短歌を贈るといふ話しもわたしが無粋な人間のせいかな、どうもでき過ぎのような気がしまして」

「何ですか？土岐刑事は赤石勇二と、松ヶ谷葉との間に、特別の事情があるとおっしゃりたいのですか？それはちよつと違う話しだとわたしは思います」

二人はしばし、顔を見合った。

「そうですね。赤石勇二の死刑は確定しているわけですし、二人の因果関係を探つたところで、何も出て来るわけなし」

土岐刑事がごま塩頭を搔いた。

それ以上、話が進むことではなかったが、このとき、土岐刑事は刑事の直感を信ずるなら、赤石勇二と横瀬菊世の両者の関係を嗅ぎ当てていたことになる。事実を説明するにはすでに時機を逸してはいたが。

「単独犯行を赤石勇二は終始、主張してきましたし、検察側も共犯説を取るに足るだけの証拠も提

出していませんからね。現場検証の結果も、単独犯行を裏付けるものとなっていきます」

「わかりました。その通りだと思います。すみませんが、もう一点だけ訊かせて下さい。横瀬菊世が赤石勇二に面会したのは二回とおっしゃいましたね。そのときの様子なども差し支えなければ教えていただけますか」

「その前に松ヶ谷葉さんから獄中の赤石勇二宛に手紙が届きましてね。それが確か、事件が起き、第一審が始まる頃のことです。昨年十月のことでした。その年の暮れに松ヶ谷葉さんのほうからどうしても会いたいという申し入れがあり、赤石勇二に是非を問うたところ、会いたいと申し出たので、わたしが中に入って、面会させました。二回目は今年の春、四月三日のことです。二回とも、赤石勇二はあまり口をきかず、主に、松ヶ谷葉さんが歌に寄せた愛の気持ちなどを、赤石勇二に伝えていたようです」

その笹川弁護士の話をも、土岐刑事は手帳に書き止めた後、

「愛の物語りですか。これは。どうもわたしはこういうのに弱い。どうですか？先生のご感想では松ヶ谷葉のほうに愛の気持ちがあつたのでしょうか。それともう一点、それ以後は二人の仲はどうなっていますか？」

と、刑事顔になり問うた。

「松ヶ谷葉に愛の気持ちがあつたかどうかはわたしにはわかりません。激情家のようにでしたから、歌を作るために、恋に恋するようなどころがあつたのかも知れませんが、それから後のご質問ですが、第二審で死刑が確定してからは、赤石勇二のほうに面会を断っていました。ああ、それから、手紙の受け取りも拒否しています」

「拒否？何か、理由があつてのことですか？」

「それはわたしにはわかりません。二人の愛の問題かも知れませんが、本人が死刑を覚悟し、この世に未練を残したくないと考えたのかも知れませんし」

「そうですね。いや、色々失礼なこともお訊きしまして申しわけありませんでした。松ヶ谷葉ではなくわたしたどもは横瀬菊世に関心があるものですから、その点、ご容赦下さい」

土岐刑事は事務所の応接椅子から立ち上がり、ていねいな口調で言った後、笹川弁護士に一札をした。

「この後は東京に行かれるのですか」

「ええ、そういうことになると思います。それから、出来ましたら、赤石勇二の事件についての資料など見せて下さいませんか」

「ああ、いいですよ。どうぞ、ご覧になって下さい」

土岐刑事は笹川弁護士から示された事件関係の書類のページを繰り、必要事項をメモした。陶山利道の線もたどるべく、土岐刑事は一応、住所など確認したが、この陶山は折からの不景気もあり、仕事も変わっていたりで、その後の調べでは足跡がつかめなかった。

笹川弁護士と土岐刑事が顔を合わせたのは、このとき一度だけだった。

が、のちに笹川弁護士も愕然となる事態が発生することになるのであった。その意味で、この日の二人の出会いには、お互いにとって生涯忘れることの出来ない日となるはずだった。

仙台宮城拘置所は市内を外れた場所にある。

まわりは一面たんぼだったが、収穫も終わり、いまは寒々とした風景が広がっていた。

赤石勇二は今朝は早めに目が覚めた。鉄格子の窓の外はまだ暗かった。

掛けふとん代わりに与えられた毛布は二枚だから、この季節になると朝方は体が冷えた。

雨が降っていた。昨夜から聞きつけていた音だった。

昨夜はまたいやな夢を見た。その夢のせいで、赤石勇二は一旦、目が覚めた。先日、両親が面会に来たとき、山形地方に残る死婚風習のことを口にした。

夢の中身はそのこととつながりがあった。

赤石勇二は獄中にあることで、かえって性欲が増進することが間々あった。

上ノ畑観音の祠堂内で、横瀬菊世との情欲に身をまかせたのが最後、赤石勇二はいまは完全に娑婆と隔離されていた。

夢では誰とは知れない女が登場するのが常だった。一度も松ヶ谷葉こと、横瀬菊世がそのままの姿で現れたことはない。

初めに夢の中でこれは夢なのだと思いに言い聞かせている場面に遭遇する。これも娑婆と隔離されている哀しい現実がさせることであつた。

昨夜の夢では、白無垢姿の花嫁が暗い丘の上に立っていた。早く近づかねばと気ばかりが焦っていた。直ぐにでも目の前から去ってしまうのではと、自身は恐れていたのだ。

風が舞い上がり、白無垢の裾がはだけた。

だが、赤石勇二が近づこうとしたとき、なぜだか、女は怖い顔をして彼を睨みつけた。

「力づくでも、女を犯してやる」

赤石勇二は夢の中で呟いた。

が、それも束の間のことであつた。

いつものように思いを果さぬまま、女は暗い闇の向こうにふーと消えていた。

目覚めたとき、赤石勇二は横瀬菊世を呪つた。どうせ、共犯だと主張したところで、自分自身の罪が軽くなることもない。

そんなあきらめから、単独犯を通してきたが、結果のみじめさだけが、いまは、赤石勇二の心に重くのし掛かつていた。

「あいつに唆（そそのか）されて……」

これも何度か口にした台詞であつた。

浅い眠りのまま、朝七時の起床の時間が告げられた。

赤石勇二は起き上がり、床をたたんだ。

「まだ、おれにはお迎えが来るはずはない。刑が確定して半年ほどだからな」

そう、自分に言い聞かす。

この別棟舎房に収監されている死刑囚たちは、今日は自分の番ではないかと、内心恐れ、びくびくして朝を迎える。年の暮れになると在庫一掃を狙い、法務大臣が『死刑執行書』に判を押すという話しを、すでに、他の死刑囚から、赤石勇二は聞かされていた。

掃除、洗面を終わり、粗末な朝食を摂った後、しばしの静寂の間が訪れる。死刑囚にとっては、もっとも緊張をするひとときであつた。死刑執行は朝の十時までに終わることが、一応、法律で決められているのだった。

この日、別棟舎房にときならぬ靴音が響いた。いつもは交替時間で看守が引き継ぎを行うだけなのに、赤石勇二は規則正しい看守たちの足音を聞き取った。

二畳のたたみの間に正座していた赤石勇二だが、慌てて身を起こし、扉の目の位置にある視察孔（しきてんまど）に寄り、その隙間にある小さな扉を外側に押した。郵便受けほどの大きさの横長の視察孔だった。

赤石勇二の心臓はきゅんと締まった。

（あの足音が自分の房の前で止まれば、もう、万事休すだ）

視察孔の隙間から外がすべて見えるわけではない。せいぜい、視野が行き届くのは三メートルほどの外の空間だけであつた。

死刑囚の誰もが、身を凍らせ、外の様子を窺っているに違いなかった。

点呼をとる看守たちの整序の声音（せいおん）がやや遠くから聞こえてきた。次に看守たちは隊列を組んだらしく、コンクリート道にはね返る靴音が天井の高い房内に響いた。

（おれじゃない。おれじゃない…）

赤石勇二は呪文のように唱え続けた。

がつ、がつ、がつ、靴音が一層高まった。その分、赤石勇二の心臓も脈打った。

一步、一步、近づいて来た処刑者の列は、赤石勇二の房を通り過ぎた。

「おれじゃない。おれじゃ…」

そう呟いた後、赤石勇二はその場に、へたへたと座り込んだ。いちばん外れの房のあたりで、一騒ぎがあった。

誰かの叫ぶ声が房の高い天井を打った。

（断末魔の叫びのようだ…）

赤石勇二はそのようなことを考えていた。この日、死刑を執行されたのは、婦女暴行の末、三人の女を殺した凌辱魔の男だった。

その日、一日、赤石勇二は気持ち晴れなかった。執行のあった日は楽しみにしている運動場での運動時間も中止となる。せつかく、雨も止んだのに、終日、赤石勇二は狭い独房に閉じ込められたまま過ごした。

やはり、頭の中に去来するのは、横瀬菊世のことだった。

（おれはあいつを許したのか。愛の歌など、獄中のおれには関係ない。あいつの魂胆は見え透いている。おれが単独犯を主張し、あいつを庇い立てたものだから、そのお札のつもりで、あいつはあんな出過ぎた真似をしたんだ。だけど、おれはもはや、自分の運命を変えることは出来ない。やはり、あいつを許してやるべきなのか。へまをやったのはこのおれだってことは間違いない話なんだ。これは）

赤石勇二は鉄格子の窓から、外の風景を見ていた。もう、冬間近だということがわかった。雨は止んでいたが、鈍色の空があり、そして、同じ造りの何棟もの獄舎が、彼の視野を遮っていた。

「冬が来るのか」

そう、声を出して赤石勇二は言った。

急に寒くなり、ぶるっと身を震わせた。

土岐刑事が東京の土を踏んだのは、翌日、十月二十五日、午後二時過ぎの頃のことであった。

この日は北風が強く、土岐刑事は背広の襟を立てた。街路樹の枯葉が一気に吹き千切れ、しばし、足を止めるほど、枯葉が舞った。土岐刑事は東京の道には不案内である。横瀬菊世の住む下町に行き着くまでに、何度も人に道を尋ねた。

亀戸の番地はちょうど亀戸天神社の近くと知り、電車を降りた後はなんとか道に迷うことなく目的地に向かった。途中、亀戸天神社を見つけ、そこから、また、歩いた。

（こんなことなら毛糸のセーターでも着込んでくるんだったな）

土岐刑事は一向に止まぬ季節風を気にしながら、縮かんだ手には―と息を吹き掛けた。

小さな路地の多い場所だったので、土岐刑事は番地を探し当てられず、煙草屋の店に立ち寄り、横瀬菊世の住む場所を確認した。

「五丁目と言やあ、あのあたり一昨日に大火事があったさ。二十軒ほどが焼け出された。今日みえてに風の強い日で、ね、あんた、手押しポンプが何台も出て消火に当たったが、どうにもならなかった。三人、逃げ遅れて死んだ」

「大火事？人まで死んだ？」

「番地はどこ？」

と、店番をしている男が尋ねたので、土岐刑事は番地を口にした。

「ああ、あの貸家がかたまっているところか。あのへんになんじやないの。火事のあったあたりは」土岐刑事はいやな予感がした。教えられた通りの道筋をたどったが、路地をいくつか曲がると、まだ、黒焦げたままの焼け跡の一角に出た。人の姿は見当たらず、すっかり焼け落ちた家の跡や、半焼状態の家々の黒焦げの木組みだけが、やたらと目についた。

焼け残った家の一軒に足を運び、土岐刑事は横瀬菊世の安否を尋ねることにした。もつとも、本名を名乗っているわけではないから、それらしき人物を訊き出すしかない。

この家の三十代半ばの留守居をしている女が玄関先に顔を出し、

「さあ、わたしのところでは、ちよつと。貸し家の大家さんを教えますから、そつちで尋ねてみて下さいよ」

と、素つ気なく告げた。

結局、土岐刑事は亀戸天神社の方角にもどり、その近くに住む大家を訪ねた。横瀬菊世の小さい頃の写真を取り出し、六十過ぎの老人に見せた。

「人探しか。名前はなんてえの。それであんたは？」

うさん臭そうに老人は土岐刑事を見た。土間になった玄関先での立ち話しだった。

「事情があつて身元は隠していると思うのですが、三十一文字のあの短歌を作っている女性で、松ヶ谷葉と名乗っているかも知れません。あ、わたしは仙台的弁護士の事務所です。司書をしているもので、笹川と言います」

土岐刑事は自分の身分は告げず、無断借用だったが、笹川弁護士の名を使わせてもらった。警察関係者と知れ、横瀬菊世が知って用心するようになっては困る場合もある。

「ああ、あの松ヶ谷さん、松ヶ谷ひこ乃さんのことか」

老人は話の符丁（ふちょう）が合ったので、気を許したようだった。口が軽くなった。

（松ヶ谷ひこ乃？これは横瀬菊世に違いない。松ヶ谷の名に愛着があるのか？）

土岐刑事が咄嗟に考えたことである。

「この写真は六歳頃のものですが、似ていませんか」

「どれどれ」

老人は一枚の古びた写真を改めて手にすると、老眼鏡を掛け、写真を眺めた。

「似ているな。だがよくはわからんが、この額の広いところはそっくりだな」

「それで、松ヶ谷さんは焼け出された後、どこにお住まいで？」

「友達のところにといい残してましたが、行く先までは聞いていません。一部、荷物が残っているんで、ここに戻ってくるかも知れん。あの人、夜の勤めで、火が出たとき、まだ、寝ついているかっただんで、丸焼けにはならなかった。身の回りの物は大方持つて行ったようだから、戻らんかも」

「それから松ヶ谷さんはどこかのカフェー勤めと聞いたのですが、店の名などわかりませんかね」

「さあ、そんなことまではわからんよ」

男は素つ気なかった。

「松ヶ谷さんについて、他に、何かご存じなことはありませんか」

「あんた、刑事さん？」

「いえ、弁護士事務所の者で、ちよつと、松ヶ谷さんに連絡させていただきたいことがあります」

「ふーむ」

土岐刑事はもう一押ししたが、男はうさん臭そうに、土岐刑事の顔を見返した。

二人の間でしばし沈黙が続いた。

こういうときは、こちらからべらべら喋らないで、相手が何かを口にするのを待つのがいちばんだった。

男が焦れて、口を開いた。

「そういうえば、何か、どこかは知らないが、宗教関係の信者だとか、聞いたことがあるな。家賃を取りにいったらね。何のお経かは知らないが、写経していて、そんなとき、松ヶ谷さんは故郷を離れていて亡くなった両親の墓参りもしていないから、一人で供養しているんですとか言ったな」

「宗教関係の信者だというのは？」

「一人じゃ大変でしょうと言ったらね。宗教の教えも受けていますって言ったんだよ」

「なるほど。色々とありがとうございました。それではもし松ヶ谷さんから連絡があれば、こちらの住所に連絡をくれるよう伝えていただけませんか」

土岐刑事は仙台市の所番地と電話番号を記し、笹川弁護士事務所の名を記した。

外に出ると、風がまた足元で舞った。

（火事とは運の悪いことだが、ここまで、横瀬菊世は追い詰めた。もう一步だな。地道に一步、一步、捜査の常道を歩むだけだ。別にむだ足を踏んだわけじゃない。宗教関係か。そのへんを探ってみる必要があるな。もつとも、まだ、こちらは雲をつかむような話だが）

悔しさの思いはあったが、土岐刑事は自分にそう言い聞かせた。広い東京とは言え、水商売関係の職についているなら、捜査の対象は絞られる。また、宗教関係なら、それなりに対象を絞り込む方法もあった。

土岐刑事は二日間だけ、時間をもらい、東京のカフェーを中心に聞き込み捜査をした。

だが、この時点で、すでに、横瀬菊世は同じ水商売でも、バー勤めに身を変えていた。結局のところ、土岐刑事はこの捜査行では、横瀬菊世を探し当てることは出来なかった。

正日蓮会の教祖、城ノ内魁の女性問題にからむ醜聞は、信者たちに大きな動揺を与えた。

各支部のリーダーたちは、教祖が元芸者のところに通っていた事実は知っていた。元々は川崎本部をとり仕切っている松村安明が教祖の周辺に女性問題のトラブルが生じては困るので、各支部のリーダーたちに相談した上で、外に漏れぬように画策したことであった。

が、この醜聞は、新聞報道だけでなく、週一回の講和会に現れる信者にも悪質なビラがまかれたりしたので、講和会どころではなくなった。

特高課の指示でビラは作られ、日当をもらった人相のよくない男共が、この仕事を請け負った。

横浜支部は信者数も多いことから、会の中核的存在だったが、リーダーの星田はこの事態を深刻に受け止めた。

すでに、何回か、幹部連が川崎本部に集まり、善後策を協議したが、元芸者のところに城ノ内が通ったのは事実だから、教団としては事態を静観するしかなかった。

内部でもっと厄介なことが起こった。

一時、正日蓮会と離反の動きを見せていた青年部の沢藤修平以下の決起盛んな若者が、正日蓮会の名を汚されたことで、街頭の布教活動がままならず、揚げ句に、女蕩し教団の罵声を浴びせられたりで、会合の席で幹部連に喰ってかかった。

教祖も幹部も、警察による妨害工作で、事実無根、これは法難だと言いのがれに努めたものだから、なお、青年部の連中は激高し、川崎署に押しかけ、シロクロをつけると言い出す始末となった。

十月二十六日、三回目の全体会議が開かれた席上で、これまで、青年部の者をなだめに掛かっていた城ノ内が態度を豹変させた。

日蓮聖人の法難話をひとくさりみんなに語った後、城ノ内はおもむろに、白い袍衣の内懐から、一通の奉書を取り出した。

城ノ内は血判書でも示すように、奉書の巻き紙をその場に広げた。城ノ内は墨書の文字に目を落とすとした。

次にみんなの顔を眺めた。

「不惜身命（ふしやくしんみょう）、きみらは法難のために殉じて死ぬことが出来るか」

四、五秒の間は並みいるみんなは沈黙した。

城ノ内の青白い顔が一層青白さを増す。こめかみのあたりに青い筋が浮いた。目つきも鋭く、凄味の加わった面相になった。

「青年部は今度の法難とは関係なく、先生のためには不惜身命の覚悟でまいりました」

と、沢藤が膝を乗り出すように言った。

「いや、わたしのためではない。日蓮聖人様の教えを純正にわれらが守り、後世に伝えるためだ」  
城ノ内が論峰鋭く切り返し、今一度、何秒かの時を置いた。

このとき、横浜支部を預かる星田が露骨に顔をしかめた。

元々、青年部のこれまでの過激な行動を戒めてきた穏健派の人物、教祖の強い語気に、星田は危険な匂いを嗅ぎ取っていた。

「よし、みんな聞け。わたしはここに正日蓮会の決起文を用意した。いまから読むからみんな心して聞いてくれたまえ」

また、座は静まり返った。城ノ内は決起文を目の高さに掲げ持った。

「真日蓮主義にわれらは殉ずる覚悟あり。不惜身命とは正義を守るために身命を惜しまぬ義なれば、法華経の色読（法華経精神の体験、發揮）の歓びを一身に感得するものなり。現在のわれは過去のわれなり。また、未来のわれは現在のわれなり。正日蓮会の信者たるもの、法華経に殉じて死するは、これ、日蓮聖人様とわれらが異体同心となることと、われは見付けたり」

そこで、城ノ内は一呼吸置いた。

この決起文については、幹部連は事前に知らされていなかったもので、直ぐには幹部の者は返事が出来なかった。

横浜支部長の星田も、財政担当を引き受けてきた大津も、教祖のそばに仕えてきた松村もみんな呆気に取られたように、狂気じみた眼差しを向けている教祖の顔を、怖々、窺い見た。

「死のう、死のう！わが祖国のために死のう。正日蓮会の教義のために死のう！」

と、初めに沢藤が沈黙を破り叫んだ。

続いて、八木征治が右手の拳を高く突き上げ、沢藤に呼応して叫んだ。

「生まれた、生まれたのよ！法に殉ずる死の直参（じきさん）が、ここに。今生の悪はわたしたちの殉教によって清算されるべきなのよ」

そう、声を張り上げたのは加来貞子だった。

たちまちのうちに、二十代の若者の間に、死への讃歌とも取れる耽美な想いが伝播していった。

城ノ内は考えあぐねた末に、人格化された自分の教祖としての位置が、俗な醜聞によってただの下劣な人間に墮ちることを極度に恐れ、もう一度、同士の心のうちを凶るために、この過激な行動案を口にしたのだった。

信徒に踏み絵を強いていたことになる。

だが、何一つ、まだ、具体的な行動案は用意されていなかった。

青年部の連中に、加来貞子、道子の姉妹、理性を持ち合わせていたとみられていた小学校教員の前野里子も、殉教という耽美な言葉の響きにつられ同調した。

教祖の城ノ内に身も心も預ける決意を、このとき、賛成した者たちは示したことになる。

時代の流れも血腥さを増していた。

元日蓮宗の僧侶で血盟団を名乗る井上日召らの政財界の要人を狙った暗殺事件。

そして、この時代、警察も国家の治安を乱す者として、共産主義者の締め付け、弾圧の術に出ていた。

世に広く知られる昭和十一年二月二十六日に起きた陸軍皇道派青年将校らの決起した二・二六事件への伏線ともなるべき不満分子の動きは、この昭和十年の時代にも、すでに、察知することが出来た。

正日蓮会の信徒だけが、死を賛美する考えに傾倒していただけではなく、世の全体の動きも、軍国主義の台頭と共に、おのれの死を賭ける風潮が明らかに生まれつつあった。

「先生、わたしたちは先生と共に参ります。この殉教の熱い想いを先生に誓うために血判書を用意させて下さい。墮落したくそ坊主どもの誰を殺すか、どの本門を襲うかは後にして下さい。

口先だけで死を決意したような者がいては困るのです」

沢藤が申し出た。

「いや、待て。血判書まで用意することはない。この中には妻子のいる者もいる。死を迫られて、まだ、心の整理のつかぬ者もいる。迷いながら血判書に名を列ね、血判を押ししたところで何になる



うか。今夜のところは決意の表明だけでいい」

城ノ内はさつきから、古株の幹部連が困惑した表情のまま自分に対して知っているのを知っていた。それで、ひとまず、沢藤の発言に待ったを掛けた。

織維問屋を営み、正日蓮会を財政面で助けてきた大津、横浜支部長で、検数会社社長である星田、それに、蒲田、江戸川、小岩などの支部を預かる者たちは年配者が多いことからみんな一様にほっとした顔になった。

保土谷支部長の大貫は、警察に通じた男なのでこの会には出席してはず、事実上、保土谷支部は解体の憂き目に遭っていた。

この日は夜を徹して、これからの正日蓮会の行動方針が討議された。

白々と朝が明ける頃、城ノ内は体のけだるさを感じていたが、みんなの熱気に自分の病いのことなど忘れた。

そばについている加来貞子に、城ノ内は生き生きとした表情を取りもどし言った。

「何年ぶりのことかな。布教を始めたばかりのときも、このような熱気があった。正日蓮会が大きくなるにつれ、この、漲る力は失われてきたような気がする。危難を乗り切ることの出来る機運が生まれてきたようだ」

「わたしも、先生について参ります」

二人だけの秘密を胸に貞子が言った。

## 2

川崎署特高課の原島課長が正日蓮会の「殉教千里行」の計画を知ったのは、十月二十七日のことであった。

川崎本部に信者として出入りしていた植木職人辻本伊三次が情報源であった。尾関刑事の内偵が功を奏した。

決行日は十月二十九日、横浜市磯子区の杉田梅林前の広場に午前八時に有志三十人余りが集合する手筈であった。

辻本が参加を希望する旨告げ、委細を尋ねたところ、次のようなことがわかった。

千里行はどこまで続くかわからないし、各自が持参する費用も限られるから、どこかで餓死する者も出るかも知れず、家族などには別れを告げてくること。

日蓮聖人様に命を預けたのだから、すべて、正日蓮会の命令に従うこと。

当日は白のさらし木綿の羽織りを着用、袴は黒で短いもの、脚絆を巻き、草履を履くこと。また、檜棒を持ち、頭には白鉢巻をすることも義務づけられていた。

「ともかく、目障りな連中だ。不穏な動きを見せるようだ」と、全員、引っ捕える。妙なかつこうで集まるようだ。白鉢巻に経帷巾か、まるで死に装束だ。どうせ、旗のぼりなども持つての行進だろ。農民一揆のむしろ旗ならまだしも、奴ら、血盟団気取りでいるんじゃないか。杉田梅林から金沢街道に出て、鎌倉まで行進する予定らしい。日蓮宗の寺でも見つけければ、火付けだってやりかねん連中だ。様子を見るために、私服刑事をつけ、妙な動きを見せたら一斉検挙だ」

特高課の一室で、部下を見渡し、原島課長はまず檄を飛ばした。

特高課の尾関刑事に、三神玄義、西田克三、亀井重晴の各刑事が顔を揃えていた。

すでに、神奈川県警の山上勝行県警特高課長には、事前に正日蓮会の行動計画については報告がなされていた。

県警側には目立った動きはなく、静観する構えだった。集会の届け出は出ていなかったが、初めからことを構える気はこの時点では、県警側にはまだなかった。

「向こうが仕掛けてこなければ、こちらから挑発に出ましよう。われわれの体に少しでも触れれば、

文句なく逮捕し、今度の目的はなんなのか、徹底的に調べましょう。幹部の面は割れていますから、事情に精通した者をしよつ引いてきますよ」

これまで、正日蓮会を内偵してきた尾関主任が、オクターブの高い声で、原島課長に応じた。いよいよ、自分の出番がきたという高ぶりの気持ちが見れていた。

「向こうの特高課は相次ぐテロ事件で、随分と点を稼いだからな。神奈川県警の特高課だって負けてはいられない」

原島課長の言った向こうとは、東京警視庁の特高課のことである。政治テロに関係した右翼や、共産主義分子に対する弾圧、悪名が聞こえていた分、その活動ぶりは際立っていたというわけだった。

尾関主任を責任者とする実働部隊は、各自の役割を決めた後、十月二十九日決行予定の殉教千里行の準備を整えた。

（十月二十九日。午前八時）

当日は秋風が梅林をわずかに吹き過ぎていた。

秋晴れの一日を思わせる気候のよさであった。

総勢二十六名の信徒たちが指定された白鉢巻、さらし木綿の羽織り、黒袴、脚絆に、わら草履のいでたちで杉田梅林前に集合をした。予定より、七、八名、参加者は減っていた。参加した者の中には、家族と水盃を交わしてきた者や、職場を辞めて加わった者もあって、一種の悲壮感を漂わせていた。

教祖の城ノ内魁は、この集合場所には姿を現していなかった。

幹部連が教祖に直接、官憲の手が伸びては困るので慎重になり、軽率妄動を戒めた。様子を見てからの参加を求め、城ノ内もこの点は了承をした。予定では二日後の十月三十一日に、千里行の通過点の一つになる鎌倉八幡宮で同士らと落ち合う手筈を整えた。鎌倉を旗揚げ地に選んだのは、古い社寺が鎌倉には多かつたからである。

旗幟りも数本用意されていた。それぞれに檄文が墨書されている。

「不惜身命、われらは世直しのために死ぬのだ。」

「死して国土を改たむ！！」

などの世直しを訴えたかけたスローガンから、

「死のう！死のう！死の抗議を！」

「死のう！血を流せ！」

「死のう！きつと死んでみせる！」

と、言った過激な文句まであった。尾関刑事は新聞社のカメラマンを装い、自転車に乗って、午前八時前には杉田梅林広場にやって来た。

正日蓮会は報道機関に勝手な推測の情報を流されては困るので、前日の午後十一時に、主だった新聞社に決起の趣意書を配布し、万全を期した。

世直しをするための金も力もない教団だから、世を立て直し、宗教界の腐敗を正さんがため、全員、死んで果てようとも歩けるところまで歩き、世の正義である日蓮聖人の法を説いて、全国行脚の千里行を実行する——と言った内容の檄文がそこには記されていた。

初めに尾関刑事は、一緒に班を組んだ亀井重晴と共に、新聞社のカメラマンよろしく、三々伍々集まってきた信徒たちの顔を撮りまくった。

女も七、八名参加していた。この中に、加来貞子、道子の姉妹、前野里枝の姿も見受けられた。

あとは中年の夫婦者が連れ立って参加していたりで、大多数は壮年者、若者で占められていた。杉田梅林での集会の責任者は青年部の沢藤修平で、行進の指揮は八木征治が取った。それに、加来貞子、道子、前野里枝などが首謀者グループの一員と、尾関刑事は読んだ。

信徒が決意の表情を浮かべ一列に並んだ。

午前八時十七分、出発に先立ち、沢藤が同士に向かい檄を飛ばした。

「死のう！死のう！正義のために！」

右手の拳を振り上げると、他の者たちがこれに唱和した。

沢藤が先頭に立ち、次に旗幟りを掲げた一団がこれに続いた。七、八人で横に列を組み、殉教千里行の目的のもと、正日蓮会の決起集団が行動を開始した。

みんながみんな威勢がいいのではなかった。米三合と飲水持参の指令が出ていたので、古いリュックサックを負った者、風呂敷包みをたすきのように肩にかけた者など、一見、貧相な連中にも見えた。

しかし、全員が白鉢巻をし、鉢巻には日の丸の赤を配していたので、維新の土を思わせるいでもあった。

一行は杉田梅林を出た後、南下の道筋を取った。鎌倉に向けての行進だった。

何人かの幹部が列の横につき、時折り、

「死のう！死のう！」

と掛声を掛けた。

信徒たちがシュプレヒコールを繰り返す。法華太鼓が打ち鳴らされた。法難に立ち向かう殉教者というには緊張力を欠いていたが、道行く人は、この時ならぬ異様な集団の行進にみんな足を止めた。

新聞社の取材記者やカメラマンが列を追ったりで、金沢街道に入る頃には、物好きなやじ馬の連中も加わった。

この間、特高課の亀井刑事が、近くの交番に駆け込み、逐一、本署の原島課長らに、正日蓮会の行動の様子を報告し、指示を仰いだ。原島特高課長は事前に情報を入手していた川崎署のお手柄ぶりを示すために、県警特高課を通じ、各署の右翼担当、左翼担当の刑事の一部に動員を掛けた。取締まり行動部隊を編成し、万全を期したのである。

行進は途中、何の小競り合いもなく一日目の野営地、逗子町池子の桜山に到着した。

暮れるに早い秋の一日、あたりにはもう闇の気配が迫り始めていた。

自炊する気で鍋、釜なども一行は持ち込んでいた。桜山は名の通り桜の名所の一つであった。裏手の雑木林に入り、信徒たちは枯枝を集め、炊き出しの準備に掛かった。

遠足にやって来たような楽しさの気分もあったのか、人々の間では笑い声なども入り交じった。

みんなが食事を了え、焚火なども囲んで、一休止していた頃、音もなく一台の大型バスが、雑木林の側面に近づき、暗闇に紛れて停まった。

賑やかに鳴き立っていた秋虫が、人の気配に、いつとき、その鳴き声を止めた。

三十人余りの特高刑事、それに地元署の巡査が非常招集されており、彼らは指示に従って、このとき、草葉の陰に身を忍ばせた。

午後八時過ぎの時刻のことだった。

現場指揮の責任者、尾関特高主任が用意した懐中電灯で、反対側の桜山の入り口に配置しておいた取締まり部隊に「掛かれ」の合図を送った。

「お前ら、ご用だ！」

「全員逮捕だ！」

口々に叫び、十人余りの制服姿で、サーベルを手にした巡査がまず信徒らを雑木林に追い込むべく、とつぜんのこと、休憩中の一団に襲い掛かった。

裏手の雑木林は狭く、その奥は急斜面の坂になっていたので、追い立てられると逃げようはなかった。その手前には一本のロープが張られ、足をすくう仕掛けが用意されていた。

「おい、待て！お前ら何のつもりだ！」

と、リーダーの沢藤が叫んだが、その声は信徒たちの混乱の叫びに打ち消された。

「死のう！死のう！これは法難だ！」

沢藤はなお叫び続けた。

が、信徒たちの唱和はなく、それより前に、首謀者の沢藤に目をつけていた特高課の刑事が三人、沢藤を目がけて突進して来た。

慌てて焚火を消す者がいたが間に合わなかった。広場は真っ暗闇っというのではなかった。右往左往する信徒たちは、取締まり部隊のかけここの餌食となった。雑木林から飛び出して来た特高課の男たちは樫の棍棒を手にしていた。彼らは信徒たちの向こう脛を払った。多くの者はその場にならずに叩きのめされるかの目に遭った。

が、ただ、一人だけ、この騒乱の闇の中から逃げ伸びた者がいた。青年部の副リーダー、八木征治で、彼はたまたま桜山の広場の隅で小用を足していたときにこの騒ぎに遭った。

桜の木に咄嗟のことによじ登り様子を窺った。八木は青年部の中でも、特に血気盛んな若者だった。本来なら取締まり部隊に向かい、得意の空手五段の技を活かして一戦交えるところだったが、情勢不利と見て、緊急避難の法を選んだ。

殉教千里行はまだ先がある、そんな思いも働いていた。ことの次第を盟主の城ノ内に報告する必要もあると考えた。

広場の騒ぎは十分ほどで終息した。

焚火も燃えつき、桜山の広場には元の静けさがもどった。真っ暗闇の空には、欠けた月が懸かっていた。

捕えられた信徒たちは、用意された大型バスに押し込まれた。

誰からともなく「死のう！死のう！死のう！」の声が出、みんなもそれに和した。傷を受け、呻いている者も「死のう！」と叫ぶことでその痛さを忘れようとした。

全員、その夜は葉山署に留置された。副リーダーの八木征治を取り逃がしていたことを尾関主任が確認したために、正日蓮会の川崎本部に通報がなされていると判断、残存の信徒たちが一斉蜂起する可能性もあるので、最高責任者、神奈川県警特高課、山上課長は東京警視庁にも正日蓮会の殉教千里行のこの顛末について報告を行った。

かねて、目の敵とされていた池上の本門寺をはじめ、正日蓮会が街頭演説をかけた寺社などには、緊急配備の警察官が張りついた。

警視庁主導ですすんできたこれまでのテロ狩りに対抗して、神奈川県警特高課は、初めて大掛かりな思想犯々罪者を、この時点で手掛けたことになる。

山上課長は得意満面だった。

この後、神奈川県警特高課は、功名心のあまり暴走をし、孤立化して行くのだが、いまは、意気軒高としており、みんな鼻息が荒らかった。

翌朝の各新聞は正日蓮会の殉教千里行を大々的に採り上げ報道をした。

邪教集団か、第二の血盟団かと言った見出しや、狂信世直し教の実態を暴くと前置きし、城ノ内魁の女性問題の醜聞と共に、逮捕された者の中には、女性も含まれることから、男女間の乱れを興味本位に採り上げた新聞もあった。

。男女二十数名が山中で焚火！。

と、小見出しを付し、いかにも何かあったふうに、その新聞は読者の興味を煽り立てていた。また、別の新聞は葉山署の一隊が桜山の山林に忍び寄せた際、男女互いに抱き合い、腰をくねらせ、怪しげな踊りを踊っていたと、署長の談話まで発表していた。

当然のことながら、すべての新聞は、世相を乱す事件に関して、官憲の検閲を受けていたから、これらの記事はいずれも神奈川県警特高課が情報操作した内容のものであった。

殉教千里行に参加し、逮捕された者たちは翌日、葉山署、伊勢崎署、戸部署、水上署、川崎署、加賀署の各所に分散留置された。

首謀者と目される沢藤修平他の青年部員数名と、加来貞子、道子、前野里枝の女性三名は、直々、特高課原島課長らに取り調べをするため、川崎署に護送された。

また、翌日には川崎本部、それに横浜、程ヶ谷、小岩、江戸川などの支所、それに古参幹部の自宅も神奈川県警、東京警視庁の係り官によって一斉に家宅捜索が行われた。

川崎本部にいた教祖の城ノ内魁はうまく逃げおおせた八木征治から電話で連絡を受けたので、警察の暴挙については一部始終を知っていた。

十月三十日の早朝のことである。

一人、殉教千里行の集団から逃れ出た八木征治が池上の本門寺前に現れ、頭に白鉢巻を巻き、さらし木綿、黒の袴の千里行時の服装に身を固め、短刀で自らの腹を掻っ切って割腹自殺を図った。

が、発見が早く、近くの病院に運ばれ、八木征治はともかくも一命をとり止めた。懷中に、一死報告。の遺書があり、騒ぎは一層大きくなった。

教祖の城ノ内魁、大津啓作、星田守人、松村安明らは殉教千里行には参加しなかったものの家宅捜索に來た特高課員に任意同行を求められ、のち、逮捕状が執行され川崎署に留置されていた。

従って、城ノ内ら逮捕者は八木の割腹未遂事件のことは知らずにいた。

城ノ内は不当逮捕であることを訴え、全信徒の即時釈放を強い口調で求めた。

十数時間に及ぶ取り調べ中、城ノ内は真日蓮教の説法などもしたが、原島らは耳をかすことはなかった。いわゆる馬の耳に念仏というやつである。

千里行に参加した者たちは全員、遺書を懷に忍ばせており、取調官の前でも「死のう！死のう！」の合い言葉を連呼したりで、みんな法難に酔っているふうがあった。

教団の連中に死の全国行脚をされ「死のう！死のう！」と叫び続けられたら悪しき風潮が全国に蔓延してしまう。

原島課長は各署に分散留置された信徒たちに対し、各取調官に苛酷な取り調べを求め、また、教団からの脱退、転向を求めるよう指示した。いかさま宗教ときめつける前に、特高課員は、親のある者は親も逮捕すると脅し上げたりもした。様々な老獪（ろうかい）な法が使われ、転向者が続出、彼らは誓約書を書かされたあと、即日、釈放された。

城ノ内魁、大津啓作、星田守人、松村安明の千里行不参加の逮捕者のうち、大津啓作財務担当、星田守人横浜支部長は逮捕三日目に脱会の意を示し、釈放された。

川崎署の留置場から城ノ内魁、松村安明、それに沢藤、加来貞子、道子姉妹、前野里枝の六名がその後、横浜刑務所内の拘置支所に同じ護送車に乗せられ移送された。

全員、三角帽をかぶされ、数珠つなぎ、私語も交わすこともならなかった。

この護送車には川崎署の尾関主任も同乗した。出発に先立ち、尾関がみんなに聞こえるように卑猥な文句を吐いた。

「お前ら、カストリ雑誌に書いてあるようなエロ行為を働いているんだってな。おい、女ども、お前ら一人も処女はおらんそうじゃないか。世間じゃお前らのこと、エロ教団と言っておるぞ。何しろ、教祖様が無類の女好き、色情狂ときているからな」

「黙れ！貴様、あの世に地獄があるのを知っているのか。あの世もこの世も一つの世界だ。権力の

衣をかぶっただけの輩に、真日蓮主義のことがわかるはずはない。俗人輩（ばら）は舌の根を抜かれて、あの世でさらし者になるだけだ。何ならいま法力を用いて、貴様を頓死させてやろうか！」胆力の据わった声を出し、城ノ内は「かーっ」と喝を入れてみせた。びりびりとあたりの空気が張り詰めた。

尾関の心臓に痛みが走り、もう、その迫力に押されて、尾関は黙った。

同行していた信徒たちは、全員、身を引き締めた。同時に教祖に対し、あらためて彼らは畏敬の念を強くした。

松ヶ谷葉は正日蓮会の殉教千里行を新聞の記事により知った。

信者になって一度、月例会に出ただけの身、葉のところには千里行への誘いはなかった。

「馬鹿な連中ね。世直し世直しだったって、何がどう変わるっていうのかしら」

邪教集団の蛮行ときめつけられた殉教千里行の記事に一通り目を通したあと、葉はそう呟いた。

（みんな本当に死ぬ気はあるの？遺書を全員が懐にしていたっていうけど、きつと見せかけのものよ）

小さな借家にはまだ家具調度品は揃っていなかった。亀戸で火事に遭い、身は助かったものの身の回りのものを持ち出すのがやつとだった。いまは豊島区巢鴨三丁目の町中に葉は移り住んでいた。火事に遭った後、亀戸には残った荷物を取りに一度だけ行った。このとき、葉は元大家から笹川弁護士が直接、火事の翌日に訪ねて来たこと知らされた。様子を訊くと、年恰好から笹川弁護士でないことが直ぐにわかった。

（あの岐阜から来たという刑事かも知れない。わたしが松ヶ谷葉と名乗る歌人であることも、その男の口ぶりでは知っているようだった？やはり、赤石勇二が短歌誌に発表させた愛の短歌が、誰かの目に止まったということなのだろうか？）

葉はいやな思いを持った。今度はかなり具体的に相手の行動が読めた。もちろん、笹川弁護士に居場所を連絡する気はない。葉は危険な匂いを身辺に嗅ぎ取っていた。いまもこの借家を借りるとき、松ヶ谷ひこ乃と彼女は名乗っていた。あとから気がついたことだが、名前を変えればよかったと自分では思っていた。そんな不安な思いを抱えている矢先に、今度の殉教千里行の事件が持ち上がった。

殉教千里行のあった翌日、青年部の八木征治の池上本門寺門前で割腹自殺騒ぎが新聞に載った。

葉は少なからず、この自殺行にショックを受けた。

三年前の自分自身の自殺未遂事件のことをいやでも思い出してしまった。

吉永踏菁が後追い心中をしようと、葉に迫ったときに口にした文句がまた頭の中に甦った。

『先生の死はわたしたちの歌の死に関係なしとは言えないわ。歌人なんて、もう、これからの時代には必要のないのよ。そのことを予告するように先生は暗冥の世に旅立たれた。わたしたちだって、生きながらに暗冥の世を歩まされているようなものだわ。歌とともに生きたから、歌の終わりの時代を告げるこの漠然とした、これからの沈黙の時に黙したまま、わたしたちは死ぬべきなのよ』

あのときはそれほど痛切な文句とも思えなかったのに、心境の変化というのか、葉の心には踏菁の心情が伝わって来た。

死刑囚赤石勇二に心変わりされなかったために、偽の歌を連ね、歌人の真似事をしてきた女―ほんとうの歌などわたしは歌ってはいない。

わたしは相心中事件のとき、何に未練があって、死ねたはずの昇昇水（しょうこうすい）を口にしなかったのか？

女の意地？素峰をわがものにして、死のうとした踏菁へのあれは面当て以外の何ものでもなかった

た？まさか、馬鹿馬鹿しい。

素峰などという女々しい歌詠みに少しばかりの恋心を抱いたわたしの幼さにわたしは自分に腹を立てたんだわ、きつと。

殺人犯、横瀬菊世。いまのバー勤めの名は千代乃。そして、歌人、松ヶ谷葉の名が通用するのはいまは正日蓮会だけのこと。

そんなふうには葉は自分のことを考えた。

（わたしの身の隠し場所？そうね、こんなときだからこそ、正日蓮会に忠誠を尽くす気構えをみせなくちゃあ。わたしが追い詰められつつあるのは事実よ。いざということもあるんだから。それに城ノ内魁にわたしの恋の遊びとやらいうのをぶつけてみる術もあるわ。教祖を取り巻く女たちに、わたしの存在を思い知らせてやるってのも悪くないわね）

部屋の中を見回しながら、葉は一人言を呟いた。続きの六畳と三畳間、家具もないので、とても、うそ寒い光景だった。小さな火鉢を抱え込み、一人、暖を取っている女―わたしのこれまでの人生に似合うこれは情景の一つよねと、葉はいまの自分の立場を考えてもみた。

自分をこのような自堕落な人間に追いやった叔父への恨みつらみをいまさらのように燃え立たせた。火箸で炭火を掻き起こす。かつと、いつとき、火は勃った。

「何がくそだーけよ。殺しても殺し足りないヤツ、わたしを弄んだ男どもより、あの男の方がずっと下劣よ。お金のことを言えば、わたしにだって財産の貰い分があったはずなのに。でも、そのことを察してか、わたしはさっさと養女に出された。みんな、あの男は計算づくだったのよね」

菊世は一人ぶつぶつと呟いた。火鉢の炭火を掻き立てた。手先と頬のあたりだけが、暖かくなった。だが、がらんとした部屋のこと、葉の体は芯から暖まることはなかった。

## 6

横浜拘置支所に身柄を移された正日蓮会教祖城ノ内魁は、特高課の特別の計らいで、看守用宿舎のある別棟の一室に収容された。

特別扱いにしたのには意味がある。

特高課は他の逮捕者に先に口を割らせ、傍証固めをしてから、教祖に治安維持法違反の犯罪事実をつきつける気だった。

逮捕された者たちの容疑事実の立証は難しいと検事局はこの段階で判断しており、また、城ノ内ら殉教千里行に参加していないものたちの拘留も、渋々、認めたという経緯もあった。特高課の強引さが目立っていたことになる。

が、千里行の首謀者と初めから目されていた青年部のリーダー、沢藤修平、それに加来貞子、道子、前野里枝の四名については、特高課の尾関主任、三神、西田、亀井の四名の刑事が苛酷な取り調べを続けた。

全員、顔を合わせぬように時間をずらして、取り調べは行われた。

取り調べ室はコンクリートで周囲を固めた窓のない縦長の部屋で、扉は鉄格子扉の外に、もう一つ、引き戸式の鉄の扉が設けられていた。奥行き四メートル、間口三メートルほどの広さがある。

どんな拷問をしても、外部に悲鳴などが漏れないように造られた特別の取り調べ室で、内部の者はこの部屋のことを、地獄部屋と呼んでいた。

四十ワットの裸電球が一つ、天井の嵌め込み式のソケットに取りつけられていた。部屋の隅に暖を取るための火鉢が置いてある。

いちばん、意志強固なのは、血気盛んな二十一歳の沢藤だった。第一回目の取り調べのことである。四人の特高課の刑事たちが、沢藤を取り囲んでいた。

「口を開くと、死のう、死のうか。死のうか。お前、誰のために死ぬんだ」

「真日蓮主義のためだ」

「それでこの地獄部屋でお前、どうやって死ぬ？」

尾関と沢藤は対面したかたちで、睨み合っていた。傍らに亀井が立ち、時折り、机を拳で叩いた。西田はコンクリートの床の上を靴音を立てせわしげに歩いた。

三神は壁際で腕を組み、憎々しげに、沢藤に罵声を浴びせた。

いちばん奥の壁際には、手足を拘束するための拘具が、コンクリート壁に打ち込まれており、鉄の鎖もその輪止め状の拘具には垂れ下がっていた。

「おれのことを虫けらと思っているな。日蓮聖人様が枕元に立ち、お前ら地獄の獄卒どもに血を吸わせてやれと申された。人間の皮をかぶった鬼どもの正体をこのおれが見届けてやる。おれは死ぬことなど恐れてはいないぞ」

「そうか、世直しとかいう前に、お前のその性根を叩き直してやらなくちゃな。ここは地獄部屋だ。鬼と言われずとも、特高課のもんは鬼の役をこの世で引き受けて、お前らの血を吸って生きているのよな」

尾関の顔に朱が注いだ。亀井に目で合図をする。沢藤は手錠を掛けられたままだった。このこと自体、違反していたが、彼らに頓着はなかった。

沢藤は壁際に連れて行かれ、その手錠に鎖が巻きつけられた。壁に背をつけ真っすぐに立たされた。

「おれはこんなところで犬死にはせんぞ」

なお、沢藤は声を張り上げた。

(こいつも割腹自殺の真似ごとがしたい口だな)

沢藤自身はその事実は知らなかったが、尾関はそのように考えた。特高課のベテラン刑事ともなれば、すでに、数多くの拷問に立ち合ってきた。自らも実行者になり尾関はこれまで容疑者を痛めつけてもきた。

白白調書を取るのが目的ではなかった。特高課が用意した治安維持法に反するテロ集団の烙印を押すために都合のいい調書を作り上げ、それに署名させるだけでこと足りた。

無抵抗状態におかれた沢藤の両頬に、亀井が続け様にビンタを喰わせた。次に舌を噛むから歯を喰いしぼっていると告げてから、亀井は拳固を沢藤の口元に見舞った。次に舌を噛むから歯を

がきつと音がし、沢藤の前歯が折れた。途端に血が沢藤の口から溢れ出た。

「ぐっ」

と、沢藤は血のあぶくを亀井の顔に向けて放った。手慣れた亀井はよけていた。

二時間ほどの取り調べの内に、沢藤は足の親指の爪をペンチで剥がされ、顔や手に煙草の火を押しつけられ何カ所も火ぶくれの跡が残った。沢藤が独房にもどされ、息も絶え絶えになっている頃、次に加来貞子と同じ拷問室に連れ込まれた。

がらがらと空疎な音がし鉄の扉が閉まった。目を見張り貞子はあたりを見回す。気持ちを奮い立たせが体の震えは押えようがなかった。

「お前が加来貞子か。こんなに暗い部屋じゃ残念だな」

と、尾関が貞子にとって意味不明の台詞を吐いた。次に貞子は後ろ手に手錠を噛まされた。四人の刑事の目がぎらついたものになった。貞子は立たされたままだった。

「おい、後ろ手錠にされちゃ、何をされてもおれたたちの顔をひっかくわけには行くまい。よお、教祖の色オンナ」

尾関は初手から貞子を辱める術に出た。

貞子は両足をつつ張り、自己防衛の姿勢を取った。黒の長袖の上着に、スカート、貞子は地味な恰好をしていた。

「教祖の野郎に乳繰られたおっぱい、なめられた跡があるかどうか、じっくり調べてやるよ」



「何を言うのです！」

貞子は声を張り上げたが、その声は震えを帯びていた。

「なあ、お前、城ノ内の野郎の女房気取りなんだろう。一週間に何度、可愛がってもらった。一回やると毛がこすれて、陰毛が五本は抜けるそうだ。その数も数えなくちゃな。陰毛が抜けた跡をさ」  
「あなたたち、わたしに指一本でも触れたら舌を噛み切って死にます」

その貞子の反抗心を見取った亀井が、貞子の後ろに回り、貞子の顎に手を掛けると、顎をぐいと上方に引つ張り上げた。そうしておいてから、三神が貞子が舌を噛まぬように、日本手拭いを用い、口中に喰い込むほどに、きつく縛った。

「さかりのついた雌犬めが。教祖の野郎とイッパツやるときは犬みたいにいつも後ろからか」

口のきけなくなった貞子は、白眼だけを剥き、尾関を睨みつけた。男たちは容赦なく、貞子を壁際に伴い、両手を上げさせると、拘具で貞子の手の自由を奪った。両の足首には足枷が噛まされた。股間を否応なく開かされるかたちになった。

「さあて点検といくか」

尾関の指示で、二人の刑事がそばに寄ると、貞子が着ていた黒の上着とスカートが剥がしに掛かった。

貞子は何か叫んだが声にはなっていないかった。

メリヤスのシャツと深目のズロースだけの姿にされていた。バストアップされた姿勢だったので、両の乳房はメリヤスのシャツを通して、もっこりと盛り上がっていた。ブラジャーなどは着けていないから、乳首の形状も男たちの目には、はっきり見えていた。

こういうことには慣れているのか、亀井が小刀を手にし、貞子の頬にその冷たい刃を当てた。

「この顔に傷がつく。遊びじゃないんだぞ。尋問にはちゃんと答えろ」

凄みをきかせて亀井は言い、ついでに、貞子の頬を小刀の先でびたびたと叩いた。

「教祖の野郎とこれまで何回やった？お前、やってないとは言わせないぞ。数を数えてやるから、首を振って合図しろ。おい、数を数えてやれ」

尾関に捉がされ、西田が数を数えた。二十の数を越えたが、貞子は一切取り合わず無視した。

「おいおい、数が数えきれないほどやりまくったのか。百回はやったのか」

「こいつしらを切りやがって」

「いいだろう。そのおっぱいのよ、なめられた跡の、ほれ、なめくじみみたいな跡を点検すれば、そんなのわかるよな。おい、しつかり、点検してやれ」

尾関と亀井が言葉を交わした。亀井は手にしていた小刀で、メリヤスのシャツを破りに掛かった。左手で胸のあたりの布地を持ち上げると、小刀の先で下から上にと裂いた。

あとはそばにいた西田がその裂け目に手を入れ、乱暴にメリヤスのシャツを引き裂いた。

双つの乳房が飛び出す。

「へえー、いいおっぱいしてるじゃねえか。亀井、匂いを嗅いでやれ」

亀井は鼻先を近づけると、貞子の乳首の匂いをわざとらしく嗅いで回った。

貞子は羞恥心を持つ前に、屈辱感に全身を震わせた。齒軋りしたが、口には猿轡が噛まされている状態なので、呻きだけになった。

「なあ、教祖の野郎に騙されて処女を奪われましたと一筆書けば、お前は釈放だ。他に教祖のおもちゃになった女が、例の芸者の他に信者で五人もいた。前野里枝はお前が入信する前に、教祖の野郎にある夜、便所に行くところを待ち伏せされて、あの野郎に後ろ向きでやられて、それ以来の臭い仲間なんだよ」

尾関の擲論の文句に、男どもは卑猥な笑い声を立てた。

(前野里枝が？まさか、教祖様が…)

貞子は自分に嘘だと言いつ聞かせ、気丈に目を見開くと、教祖を侮辱した尾関を強い視線で射すく

めた。

「こいつはしたたかな女だな。臭いアソコも点検してやれ。やなことだが職務上、これも止むをえん」

尾関が吐き捨てるように言った。が、舌なめずりしてみせた尾関の口元は歪んでいた。

両手を縛られ、豊かな乳房をさらしている女の上部を見ているだけでも男の獣欲をそるに充分だった。柔らかなような乳房のかたちだったが立錐形の固さも内に秘めた上反りの美しいかたちをそこに示していた。

亀井の手が貞子のズロースに掛かった。貞子は固く内腿を閉じようとしたが、足枷には横棒がついていて、股間は開き立てられたままの姿勢を強いられていたもので、抵抗することは適わなかった。

「ちよい待ち。お前のアソコを点検する前に、もう一度訊く。鎌倉で教祖と待ち合わせた後、初めに日蓮宗の南院に火をつける謀議を、出発前夜にお前ら幹部でしたそうだが、それは本当のことか。正直に言えば、点検は中止してやる。首を縦に振れば、お前の臭いナニの点検をしなくとも済む」

尾関が尋問をした。横浜の拘置支所に送られる前に、何度かこの件は検事局から来た取り調べ検事に貞子は質されていた。

でっち上げのことだったが、鎌倉・南院襲撃の件に尾関らがこだわったのは、事前謀議があれば起訴可能と踏んでのことだった。

おのれの意志を示さなかった貞子だが、この件に関してだけは首を横に振った。

「そうか、火つけてももんがどんなに恐ろしいもんか、お前は知らんわけだ。おい、マッチ遊びをしてから、草っぱらに火をつけてやれ」

その尾関の指示に従い、亀井と西田がマッチ箱を手に、貞子の剥き出しになった股間に顔を近づけた。猛ったふうの陰毛を、西田が二、三回手指で撫でさすった。

「火つけの前に点検作業だな」

まず、亀井がそう言い、マッチを擦ると、開き立てられた貞子の陰部にマッチの明かりを当てた。この行為は露骨なものだった。一本、マッチが燃えつきると次に西田が代わった。しげじげと貞子の陰部を眺めてから、西田は残り火で陰毛を焼いた。じりじりと毛の焦げる音がした。男たちは代わる代わるマッチ遊びをし、貞子の陰毛に火をつけ楽しんだ。その度に男たちは卑猥な笑い声を出した。

「お前、教祖の野郎と火遊びしたこれは罰だよ。さあて、中に何か隠していないか点検だな」

と、尾関が半分ほども焼かれた陰毛地帯を見遣りながら言った。

貞子にはもつと苛酷な拷問が待っていた。実行者は尾関自身で、握りの太い万年筆を取り出すと、それに白い鼻紙を巻きつけた。男二人が貞子が腰を動かさぬよう太股部分を押さえつけた。尾関は貞子の陰部を覗き込む恰好で足元にしゃがみ込んだ。

「処女の証しを見せてもらおうか。どれ」

尾関は言い、左手で陰部を開き立てておいてから、万年筆のキャップ部分のほうを握り締めると、筒状の万年筆の先端部を貞子の割れ目に突き入れた。

貞子は腰をびくとさせたが、悲鳴は上げなかった。万年筆は半分ほども膣道に分け行っていた。二、三度、尾関はおのれのを突き入れるような仕草で万年筆を行き来させた。すーと抜き、鼻紙が血を吸っているか子細に確かめた。

「へっ、やっぱりこの阿女、教祖野郎とチンチンカモカモをしてやがる。太平洋にごぼうだな。ずぼずぼ入るぜ」

そう言い、尾関は万年筆を亀井の手に委ねた。

「くせえ穴さ」

亀井は鼻を近づけ匂いを嗅いだ。亀井がまた万年筆で貞子の膣道をこすり立てた。

「うっ、ううんっ」

貞子は首を左右に振り腰を突っ張った。

亀井が楽しんだ後、尾関が言った。

「びらびらのどっかに入れ墨をしておいてやれ。処女じゃねえって印になるだろうよ」

尾関に命じられた通り、亀井は貞子の小陰唇部分を引っ張り上げるようにすると、万年筆のペン先で五、六カ所に傷をつけた。

「ぎやうーっ」

と、叫ぶのが精いっぱいであった。貞子は目から血の出る思いで涙を流した。口をきける状態にされたとき、やっと、貞子は城ノ内に三度だけ抱かれたことを告白した。

それから、妹の道子は一切、わたしのようなふしだらなことはしていないし、齢もまだ若く、信仰の道に引き込んだのはこのわたしだから、直ぐにでも釈放してやって欲しいと懇願した。

(妹がわたしと同じ目に遭わされたら?)

その恐れのみ持ちだけが先立った。

「よしわかった。お前の願いも聞き入れてやるから、城ノ内が鎌倉南院の焼打ち謀議の首謀者だと認める自白書を作成するから、お前、その書類に署名しろ。いいな」

「それは事実には反したことです」

「それじゃ妹の口から聴くか」

と、こともなげに言い、机の上に広げていた自白調書の書類を尾関は片づけに掛かった。

「あの、いえ、やっぱり、教祖様を裏切ることは出来ません」

「お前は教祖様の野郎と乳繰り合った仲だからな。ちよっと聞くが妹は処女か」

「当たり前です」

屈辱感にまみれていたが、貞子はきつとした表情になり言い返した。

「妹の取り調べは明日だ。齢が十九と聞いて、特高課長様が直々のお出ました。ま、明日の午前中までによく考えておけ」

尾関が責任者顔で言い、貞子を独房にもどすよう部下に命じた。

世間は正日蓮会のことを、死のう教<sup>ウキウキ</sup>などと騒ぎ立てたので、正日蓮会は異教団と見なされるようになった。

元々、過激な街頭説法と言い、日蓮宗主管派の格式のある寺などに押し掛けるやり方と言い、正日蓮会は激越の士が集まった教団との見方があった。

教祖の城ノ内魁は十日間の拘留の末、釈放された。検事局がそれ以上の身柄拘束を認めなかったからである。

釈放された城ノ内は熱狂的な信徒に迎えられ、川崎本部の会館にもどったが、さすがに十日間の拘留のせいで、瘦身が一層細り、胸の病いも進行しているように見えた。

が、その実、城ノ内は横浜拘置支所では特別扱いで、他の幹部たちのような苛酷な取り調べは受けなかった。

検事局の係官は、城ノ内の真日蓮主義なるものの本旨をメモするだけで、正日蓮会を一人一殺を掲げる血盟団とは同等と見なしていないふしがあった。

しかし、川崎本部にもどつてみると、特高が介入した事実を恐れてか、信徒の数は激減していた。ナンバー2の立場で、主に会の財政面を担ってきた大津啓作、横浜支部長の星田守人、他にも主だった者が脱会、転向を表明し、正日蓮会を離れていた。

機関紙発行の責任者、前野里枝も獄中で転向を警察側に約し、会館には寄りつかなくなった一人であった。結局、会館に集まったのは、加来姉妹の母親うらと、蒲田、江戸川、小岩の一部の信徒たち、それに青年部に籍を置いていたが、母親の危篤の知らせで、佐賀に帰郷、殉教千里行に加わることのできなかった十九歳の神崎勇が母親の葬儀を了えたあと馳せ参じていた。合計八名だけの寂しい顔合わせ、城ノ内にはまだ釈放されていない松村安明、沢藤修平、加来貞子、道子の身が案じられた。

ここ、十日間に発表された新聞の記事に目を通し、城ノ内は愕然とした。

正日蓮会は、あたかも、第二の血盟団のように扱われており、邪教の刻印を押され、あまつさえ、自分自身は色情狂のエロ教の教祖で、信徒の女のほとんどに手をつけているような中傷記事が、世間には公表されていた。

城ノ内が会館に帰った二日目の午後、一人の女が城ノ内を名指し、会館に訪ねて来た。加来うらが、松ヶ谷葉を城ノ内に取り継いだ。

「松ヶ谷葉？ ああ、あの女流歌人の女（ひと）か。書齋のほうに通しておいてくれないか」  
微熱が出、臥せていた城ノ内だが、着替えをするために床を出た。多くの信徒に裏切られ、失意の底にあったから、この騒ぎの中を訪ねて来てくれた女性に心救われた思いがした。

城ノ内と葉は書齋で向かい合った。

「先生、ご心痛のほどお察し致します。わたくし、日蓮聖人様の教えには精通しておりませんが、このような危難のときにこそ先生のお役に立ちたく、おそばでお仕えしたくて参りました。身辺整理はして参りましたので、どうかわたくしを先生のおそばに置いて下さいませ」  
畳に三つ指をつき、葉は深々と頭を下げた。

断髪頭は変わらなかったが、白のガーディガンに絹地の白のブラウス、地味な黒の長目のスカート、化粧も控えめにしていたので、城ノ内の目には、葉は素人女のように見えた。

「葉さんの歌集、まだ、みんな目を通していないが、とても、才気が感じられる句が多いと思う。そうだ。わたしの気に入った句があった」

「そう言い、城ノ内は葉が置いていった歌集の一冊を手に取り、葉を挟んでおいた。ページを開いた。その句のいくつかを葉に示した。

せつない恋心を歌った内容のものだった。

花埋みの 肌の白さや 微温なる やるせなき宵 乱れ髪梳(と)く<sup>、</sup>

花埋みの 風温(ぬく)し闇 汗ばみて 握りし指の 可細さを見る<sup>、</sup>

生腥(ぐさ)き 柔肌の香や 汗吐息 気高き双乳(もろち) 凜(りん)と立ちたり<sup>、</sup>

「先生、嬉しゅうございます。わたくしは二十一になります。身も心もとろけるような恋をしたことがございません。いえ、いつか、荒川土堤近くの寺門の前で、先生のご説法をお聞きして以来、わたくし、先生を恋い焦がれ、今日まで、ただ、ただ、お慕い申し上げて参りました」

葉は齢の数を二つ少ない目に告げた上、いま一度、両手を畳につき、頭を下げたまま、容易に顔を上げようとはしなかった。頬を赤らめている様子でもある。ほんとうの意味での恋心を葉が抱いていたわけでもない。当面の相手に城ノ内を選んだようにところもあった。

「ま、顔を上げなさい。そのままではわたしも話がしにくいよ」

照れたように言い、城ノ内は葉の顔を上げさせ、改めて葉の顔を見直した。

白い肌の眩しさに、整った顔立ち、凜と張った眼、脂粉を落とした葉の素顔は、城ノ内の目にはまだ男の肌を知らぬ処女のようにも見えた。下唇の厚さは淫蕩な女を思わせたが。

「先生、わたくしをおそばに置いて下さいませか。実はわたくし、親に書き置きを残して、家を出て参りました。決意は固いのです。教学の勉強にも励まさせていただきます。先生のお世話も何なりとお申しつけ下さい」

「それは：。身の回りのことはいいよ。まず、教学に通じ、真の日蓮主義を、葉さんには理解してもらいたい。そのことが先だろう」

城ノ内の頭の中には、加来貞子のことがあった。同時にまだ獄中にあり、法難のさなかにある貞子に対し、城ノ内は申し訳ない思いも持った。

城ノ内は葉を初めに、加来うらに紹介し、会館内に住まわせるので、万端よろしく頼むと告げた。うらは露骨にいやな顔をした。

葉は薄化粧だったが、長年、水商売をやってきたうらには、女を見る目が養われていたから、内に淫情をためている女というふうには、葉のことを女特有の直感で感じ取った。

それで、頭のでっぺんから足元まで、葉の正体を探るような目つきで見まわした。露わな敵対心をそうやって、うらは葉に示してみせた。

教祖様の言いわけだから、うらは従うしかなく、会館内にこのとこ詰めている信徒たちに、新入りの同居者を紹介して歩いた。

松ヶ谷葉こと、横瀬菊世は巢鴨の貸家を、このあと出払った。身の回りの品だけを会館内に持ち込んだ。岐阜の実家を出るときに後生大事に持ち出したただ一冊の父親の形見の品、女流歌人の合著歌集『恋衣』、それに同人誌『花埋み』も数冊、葉は持参していた。

この会館内では、歌人松ヶ谷葉で通す気だった。警察の手が身辺に及ぶようなことがあれば？考えたくないことだったが、葉はそれなりの計算も立てていた。隠れ家としては都合のいい場所だと葉は考えていたふしもあったのだった。

神奈川県警川崎署の特高課長、原島は自ら陣頭指揮をし、松村安明、沢藤修平、加来貞子、道子らに拷問を加えた上、虚偽の自白調書を作り上げた。

「正日蓮会をテロ目的の秘密結社に仕立て上げた。」

政府の各閣僚、内務省警保局、宗教局、警視庁、控訴院、検事局宛てに、教祖城ノ内魁を主魁とするテロ集団である旨の報告書を送付し、川崎署特高課の声名を一躍高めた。

上部機関である神奈川県警特高課も、支援の特高課員を、この事件に投入、東京警視庁との対抗意識を全面に強く押し出してきた。

しかし、政府機関は、先の血盟団事件や、五、一五事件のような暗殺事件が現に発生しているわけではなく、また、宗教局は正日蓮会の排除を日蓮宗主管派の意向を受け、賛意を表したものの、それ以上の態度表明は避けた。

当初からのことだったが、検事局は特高課の突き上げで、逮捕状の請求、身柄拘束を認めたものの、いま一つ、弱腰の姿勢だったため、十一月五日、横浜拘置支所に拘留されていた四名は釈放されることになった。

事実上、正日蓮会の信徒は離反し、正日蓮会は潰滅的な打撃を受けていたので、これ以上の表立った活動は不可能と、内務省警保局が判断したのも、四名の釈放の理由となっていた。

健康回復後、城ノ内は県警特高課の山上勝行課長（警視）に連日、面会を求めた。また、自分自身、正日蓮会の立て直しを図るため、一時、緊急避難の考えに立ち、殉教千里行は今後行わない旨の誓約書を手交していたのも、釈放には効力を発揮したようだった。

千里行から十七日目、釈放される同士のために、城ノ内には残った信徒数名を連れ、横浜拘置支所に迎えに行った。

トラックの運転手である青年部の神崎勇が会社の車を借り受けてきて、拘置支所の出口に横づけにした。

全員が釈放されるまで、四、五十分の時間を要した。

初めに松村安明が姿をあらわす。全員の拍手で獄中の闘士は迎えられたが、三十七歳の壮年の男は憔悴しきっており、顔面には一部、火ぶくれの跡なども残っており、出迎えた者たちは、途中で拍手をするのを止めた。

続いて釈放された沢藤修平は二十一歳の若さだけに意気軒高ぶりを示したが、手に包帯を巻き、顔面にも殴打の跡が残っていたので、出迎えた者たちは今度は怒りを露わにし、口々に拘置支所の塀に向け罵声を浴びせた。

「お前らそれでも人間か！」

「坊主を殺すと七生祟る、その文句を知っているのか！」

その信徒たちの叫びを受け、城ノ内が少し疝高い声で怒りを表した。

「これは法難だ！日蓮聖人様はみんなお見通しだ。不信心の者どもには必ずや、天罰が下る。そのことをよく覚えておけ」

教祖のよく透る声に和し、信徒たちが同じ意の文句を番所にいる看守たちに浴びせた。

「娘たちは……」

と、加来うらが、白髪の増した髪を掻き上げながら言い、城ノ内の目の内を覗き見た。

「別棟の女区だから最後になるのでしょうか。お母さん、大丈夫ですよ。気丈にお待ち下さい」  
城ノ内が不安顔のうらに告げた。

五、六分、待たされたが、松村も沢藤も内部で起きたことについては言葉を慎んでいた。

加来貞子、道子がひどい目に遭わされたであろうことを、すでに、城ノ内は察知していた。  
その分、無口になった。

みんなが息を呑む思いで待った。

やっと、看守に伴われて、加来貞子が裏門の衛所から出て来た。しつかりとした足取りで、髪も梳いたと見え、髪かたちは整っていたが、左顔面が紫色に腫れ上がっているのがみんなには見えた。だが、さすがに足取りはおぼつかなかった。みんなの顔は見ず、貞子は目を伏せたまま、母親のいる方にと歩いて行った。

「貞子、お前……。ひどい目に遭って」

みんなの列から、うらが走りだし、貞子に抱きつくくと、感極まっておいおいと声を上げ泣き出した。

が、貞子は泣かなかった。

ただ、立ったまま、体を揺すられていた。

顔をきつと上に向け、必死に何かを堪えていた。

「道子、道子はどうしたの？」

やっと、貞子が言葉を発した。妹の身を氣遣ったその顔は苦渋に充ちていた。

城ノ内は貞子のそばに寄ることを、一瞬、躊躇った。どう、声を掛けたいものか、その言葉が見つからず、女の身の上に何があったかと、そのへんのことも配慮している自分に気づいた。髪が整っている分だけ、顔の傷跡が生々しかった。やはり、紫色の殴打の跡が残っていた。

さつきから、自分の背に松村や、沢藤の視線が焼きついていようにも思えた。

殉教千里行を言い出した自分の動機について、獄中にあるときから、城ノ内は煩悶してきた。ことは自分の女性問題の醜聞から発したことのように彼には思えた。

一気に青年部の者を中心に煽り立て、殉教千里行の断行を言い出し、「死のう！」の意志統一をさせ、正日蓮会のいま一度の再興策を図ったのは、余りにも軽挙妄動であったように、彼は自省の念を強くしていたのであった。

その揚げ句が全員逮捕の悲劇を生み、獄中で転向を拒否した者たちは拷問に身をさらすことになったのだ。

自分だけ獄中で厚遇を受けたのも、同士に対して、この場合、負い目になっていた。

衛所のあたりで、一際、高い女の叫び声があった。城ノ内が見ると、釈放される身の加来道子が、外に出まいとして、出入り口の低い金網にしがみついていた。

数人の拘置所職員が道子を引き離そうとして、群がっていた。

貞子が急に走りだし、その後を母親のうらが追った。

無理やり、道子は鉄柵から引き離され、門の外に連れ出された。母親と貞子に迎えられた道子だが、そのまま、ぺたんと砂の道の上に座り込んだ。じっと動かない。泣いているふうではなく、呆気たように、ただ、空の一点を見詰め、座り込んでいた。

母親と貞子だけが道子の背を抱いた。

他の者はとてもそばによれる状況ではなかった。

貞子が母親が持参したカーディガンを、道子の顔のあたりに掛けた。道子の顔にも殴打された痕が生々しく印されていた。

やっと、道子は立たされ、二歩、三歩と歩んだが、途端によるけ、その場に崩折れた。

トラックの助手席に貞子と道子に乗せ、荷台には他の者が乗った。寒風に吹かれながらの帰り道、誰も口をきかなかった。うらだけが泣きじゃくっていた。

（これ以上の法難があるろうか。わたしは絶対に、信徒たちの身と心を蹂躪した連中を許さないぞ。徹底抗戦あるのみだ。みんな一緒に死ぬことを誓った仲間ではないか。無力な者なりの抵抗の仕方がある。いまに見ておれ。特高課の連中に天誅を加えてやるからな）

城ノ内は莖(むしろ)の敷かれた荷台に座したまま、正日蓮会が行動指針の一つにしてきた日蓮聖人の遺文の一部を誦(そら)んじた。

「末法ノ始メニ一閣浮堤（いちえんふてい）ニ弘ラセ給フベキ瑞相（ずいそう）ニ、日蓮先ガケタリ。若党共二陣、三陣ツヅイテ、迦葉阿難ニモ勝レ天台伝教ニモ越エヨカシ」  
日蓮の教えに続けと『遺文の種々御振舞書』中の一文は、ここに檄文を掲げていたのである。

正日蓮会川崎本部に、逮捕拘留されていた者たちが戻ったとき、出迎えの者の中に、松ヶ谷葉の姿があった。

加来道子はトラックが会館に着く前に、城ノ内の配慮で、自宅のほうにうらが連れ帰った。道中、時々、道子は奇声を発した。精神錯乱の状態のあるものと思われた。

会館に入ったとき、初めに貞子が新参の葉に、敵意に充ちた目を向けた。さすがに城ノ内の手前、難詰することはなかったが、その間の女同士のやりとりについては、城ノ内もそばにいたので目撃することになった。

留守を守っていた老婆の川村あきが、松村、沢藤、貞子の三人の拷問によって痛みつけられた顔や手足の傷を見つけ、一人、一人の手を取ってむせび泣いた。

「みんな書齋に行こう。特高の連中のやり方に対してわれわれは断固戦う」

城ノ内の青白い顔に血の気が浮き、額に青筋が立った。

このとき、間合いを図っていたように、前野里枝が玄関にあらわれ、応対に出たあきに城ノ内に会わせて欲しいと告げた。あきが書齋のみんなに取り継いだ。

みんなは疑心暗鬼のまま、顔を合わせたが、

「いいだろう。ここに呼びなさい」

と、城ノ内が言ったので、前野は書齋に入ることを許された。

「先生、それからみなさん、わたしは転向などしていません。でも、あのときはどうしよもなく……」  
「後は言わなくともいい。同士であることを誓えばいい。去って行った者たちもいるのだから」

内心、城ノ内はほっとしていた。

拷問に遭っていないのが自分だけというのはどこか肩身が狭かったからである。

ともかくも、前野は城ノ内のとりなしで、一座に加わることができた。

城ノ内を上座に、前野を加え、三人の幹部と、青年部の沢藤、神崎の合計六名が書齋の間で顔を合わせた。

「これからのことを話し合う前に、今日帰って来た者たちに言っておかねばならぬことがある。沢藤君の片腕になって青年部の活動を支えてきた八木君が、殉教千里行の当日、会場から逃れ、わたしにこの様子を告げてくれた後、翌日、抗議のために、池上本門寺の門前で割腹自殺を果さんとした。目的を果すことはならず、病院に収容され、現在も重体の状態にある。だが、八木君は官憲に対して一矢を報いた」

「八木がですか。本懐を遂げなかったのは残念ですが、不惜身命、八木はその目的の一端は果した。そうですか。出迎えにも姿がないので、意志強固で、断固弾圧をはね返す彼のこと、獄中で拷問のために獄死したのではと、そのことを案じていました」

その、城ノ内の報告を聞き、沢藤ははらはらと涙をこぼした。

「先生、川崎署の連中は」

と、みんなを代表する立場で、年長者の松村がまず口を切った。

「きみたち、一人一人の憔悴状態を見れば、どれほど人権が蹂躪されたか、一目瞭然だ。わたしの場合は、これは奴らの手口に違いないが、特別室を用意され、拷問も加えず、懐柔策に出た。検察側はたとえ、全員を起訴したとしても、公判を維持するだけの証拠を揃えるのは困難と見ているふしがある。権力側は正日蓮会潰滅作戦に対してはほぼ目的を達したはずだ。見たとおり、幹部とし



て残った者はわずか、横浜、保土ヶ谷の各支部長が脱会、また、蒲田、江戸川、小岩などの各支部には警察の者が張りついていて、一般の信徒は近づけない状態にされている」

みんなにいちばん衝撃を与えたのは、財政担当として会を支えてきた大津啓作が、正日蓮会との関係を今後一切断つ旨告げてきたことであつた。

「誰が正日蓮会を離れて行こうと関係ない。いまこそ、真の日蓮主義者だけが結束するときだ。いいね、前野君、君には特に気を引き締めてやってもらわなくてはいけない」

「はい、みなさんにご迷惑をお掛けした分、わたしなりに全力をつくさせていただきます」  
城ノ内が前野を名指しで言つたのは、官憲の手先に前野が仕立て上げられていることを案じてのことだつた。

「その前に、先生と、松村さん、沢藤さんとわたしとの四人で話し合いたいことがあります」  
「どういうことか？」

「獄中であつてきびしい取り調べに遭つた者の意見をまず聞くべきです」

その貞子の気迫に押され、城ノ内が同意した。同席していた前野と神崎が退席した。

「先生、前野さんがわたしたちがこの会館に到着した時刻に合わせてやって来たこと、それに、獄中で転向の誓約書を書かされたに違いなことを考えると、前野さんは警察が情報をとるためによこした内偵者の疑いがあるのではありませんか？それから、一ヵ月ほど前に入信したとかいう松ヶ谷葉、あの人も疑わしいとわたしは思います」

貞子が四人だけになつた理由を述べ立てた。

「うーむ、それはどうかな。たとえ、そうであつても、一人一殺のテロ行為を具体的に計画しているわけじゃなし、治安維持法に引つかかるようなことは、正日蓮会は何もしていないよ。内偵されたとところで何も出てはこない」

「先生のおっしゃる通りだと思いますが、同士の前野君については止むを得ず、転向を誓つたのだと、取り調べの状況から、わたしは推断しますが、松ヶ谷葉とかいうのはどうも正体不明、加来君の考えは当たっていないわけではないかも知れない」

松村が城ノ内に答えた。

「わかつた。ともかく、いまの二人については充分注意しながら挙動を見守っていこう。加来君の説にも頷けるところがある」

「特高課の者は何でも捏造することなど簡単なことなんです。その点は先生もご承知のことでしょう」

なお、貞子が喰い下がつた。

みんなを見回してから、城ノ内が壁際に背をもたせ、一人、黙然としている沢藤の態度が気に入り声を掛けた。

「沢藤君はこれからのわれわれの官憲に対する態度、どうあるべきだと考えているのか」

「はい。自分はこの際、青年部はひとまず、正日蓮会を離れ、先生や正日蓮会に迷惑を掛けないのが最良の策と考えています」

熟慮したすえか、沢藤は過激な発言はせず、押し殺した声で告げた。

「迷惑を掛けないとは何のことを言っているのか？」

「同士が、どれだけの拷問に耐えたぬいたか、わたしは爪を一枚剥がされる度に、特高課の連中の一人一殺を心から叫び、苦痛に耐えました。他の同士とて同じことだと思ひます」

「それは……。だからこそ、正日蓮会はどんな法難が待ち受けていようと、戦いを彼らに挑む」

「どんな方法をもつてですか？」

「検察庁は県警特高課のやり過ぎを認めたからこそ、長期拘留を許可しなかつた。これは誰とは言えないが、某弁護士がわたしのところに電話をよこした。左翼テロ裁判に関わっている思想団体所属の者と告げたが、法的に闘争を挑めば充分、勝訴可能だと連絡してきた」

「しかし、そのような人物と関わり合いを持たず、特高課の連中の思う壺でしょう。もしかしたら、左翼の連中との連携の事実を捏造しようとする警察の策かも知れません。死のうと一致団結したわれわれではないですか。死ぬことこそが、われわれの断固たる意志表示だと殉教千里行を決行する前に決意したからこそ、同士の八木征治は割腹自殺の挙に出たのでしょうか」

「死ぬことだけで、官憲に報復はできない。その前に彼らと徹底抗戦する必要がある」

城ノ内と沢藤が議論を交わした。その二人のやり取りに貞子が加わった。

「そうです。たとえ、わが身の恥をさらそうとも、警察がわたしたちに加えた屈辱的な拷問の事実を徹底糾明されるべきです。正日蓮会はこの悪しき世に對し、厳とした態度で臨む必要があります」

貞子はすでに沢藤の胸の内を読んでいるような発言をした。

(沢藤修平は八木征治と同じ挙に出ようとしている。死の美学に彼はいまは酔っている)

貞子はそうさつきから寡黙だった沢藤の心中を読み取っていた。城ノ内も気づいていたことではあったが。

「訴訟の件ですが、われわれに勝ち目はあるのですか」

と、松村が殴打の跡も生々しい顔で問うた。「おっつけ、秘密の文書を受け取ることになっている。うらさんのところに電話連絡があり、この件に関しては、うらさんに協力してもらおうつもりだ」

「しかし、特高相手にことはそう簡単にすすむでしょうか？それに沢藤君の意見通り、官憲が仕掛けた罠の場合もあります。用心したほうが」

松村が自分の意見をさし挟んだ。

「その件はわたしに任せて欲しい。慎重にことは運ぶつもりだ。いま、為すべきことは、正日蓮会は法廷の場に今度の事件の持ち出そうとしているのだから、まず、全員、医師の診断書を取ってもらいたい。拷問の事実を明らかにするには、この診断書が絶対不可欠だ。このことはわたしのところに電話をしてきた某弁護士の見解でもある」

城ノ内が強い決意を込めて言った。

「わたしはそのつもりです。覚悟はできていますが、でも、妹の道子の場合には……」

と、貞子が考えあぐねた末に言った。

貞子自身にも、そして居合わせた他の男たちにも、女性の場合の拷問がいかに苛酷で、辱しめを伴ったものか、これまでの事例から、おおよその想像がついていた。

「拷問の事実、そのことを立証することで、殉教千里行に参加した者全員逮捕の不当性が明らかになる。それが果せれば、正日蓮会の散り散りになった信徒たちも、また、わたしの元に馳せ参じるだろう」

教祖の痩せ細った顔は、青褪め、眼は宙空に据えられていた。決意のほどが、みんなに伝わった。座がしんと静まり返る。

「わかりました。道子のごことはわたしにお任せ下さい。何とか、方法を講じてみます」

ややあって、貞子が言った。

重苦しい空気のまま、他の者は、ただ、頷きを返したただけだった。

城ノ内魁は拷問の事実を法廷に持ち出し、断固官憲と戦うべく、松村安明、沢藤修平、加来貞子、道子姉妹の体罰の診断書を揃えさせた。

加来道子については、姉の貞子が薬剤師の資格があることから、道子に睡眠薬を飲ませ、意識のないうちに医師を呼び、診断させ、必要書類を整えた。

煙草の火による手足、乳首などの火傷、十一カ所、また、道子は取り調べの刑事連の面白半分の辱めに遭い、陰毛が全部剃り落とされていた。

さらに、医師は処女膜損傷、膣内部の擦過傷、小陰唇の表面に刻された万年筆のペン先使用によってできた入墨様の黒インクの斑点を、六カ所、見つけ出し、この事実も診断書に記入していた。同様の凌辱行為は貞子の場合にも言えた。道子は目が覚めた後、常人に一時戻ったが、家族の者にも異様な道子の行動が目につくようになっていた。

夜中に突然、起き出し「ぎゃーぎゃー」と喚き出したのが最初で、男になるのだと言って髪をさみでざくざくと切り、それを止めようとした家人にもそのはさみを向けた。

着たきりなので、下履きを母親や、貞子を取り替えさせようとすると、固く股間を閉じ、脱がせまいとして、揚げ句に誰とかまわず、噛みついた。

また、家の回りをざんざり頭に、汚れた服装のまま、徘徊し、あらぬことを口走るので、近所の者も、道子の異常さを噂するようになった。

十一月十一日、城ノ内魁は加来道子の母親うら、姉の貞子、松村安明を伴い、横浜検事局に行き、訴訟に関する書類を整えた上で、川崎署特別高等課の原島課長、尾関主任、三神、西田、亀井他の取り調べ官に対し、人権蹂躪、不法監禁ならびに傷害の罪を問ひ告訴した。沢藤修平はこの時点では、一人、川崎本部を出ており、みんなとは行動を共にしていなかった。

この頃には、各新聞社も正日蓮会への攻撃を控えており、新しい活動もないことから無視していた。

県警特高課と下部組織の川崎署特高課の間では、正日蓮会の今後の扱いをめぐって意見の喰い違いが生じていた。

横浜検事局は正式に、城ノ内らの訴状を受理、一応、法治国家としての手続きに応じた。この日、深夜、告訴状に名を連ねた一人、沢藤修平が、横浜拘置支所の見える小高い丘の雑木林に入り、抗議の遺書を残して割腹自殺を遂げた。

今度は場所柄、発見が遅れたので、沢藤修平はおのれの初志を貫いた。

この事件をまた新聞が採り上げ、死のう団の死の抗議は各紙が報道するところとなった。

同時に、正日蓮会が横浜検事局に信徒の不当逮捕、拷問の事実などを記した告訴状を提出したことも、翌朝の紙面を飾った。

告訴状を正日蓮会が提出した二日後、城ノ内は神奈川県警特別高等課に呼び出された。県警特別高等課の山上勝行課長と他に係長が、別室で城ノ内と向かい合った。

城ノ内は背を伸ばし、二人を初めに睨みつけた。

「正日蓮会からの告訴状は一応、目を通させていただきました」

傲慢な態度で対した城ノ内を咎め立てることはせず、山上課長はていねいな言葉使いでしゃべった後、城ノ内に自分のほうから一礼した。二人が名刺を出したので、二人の身分を確認した。

「川崎署特高課の原島課長らを同席させるところですが、その前に正日蓮会側のご意見を伺っておきたいと思ひまして、本日、ご足労をお願いいたしました」

山上課長の口調に、城ノ内はちよつと拍子抜けした。もつと、居丈高な態度で出てくるものと思つていたので、城ノ内自身も負けまいとして、肩肘を張っていたのだ。

「初めにお願ひがあります。目下の情勢もあり、これから両者で話し合うことは内密に願ひます」津田という名の係長が意味不明の文句を口にした。

「内密と言いますと？」

「いえ、この種の裁判は長引きますし、その間、いろいろ、誤った情報が各報道機関もふくめて飛び交います。これは両者にとって得策のこととは言えません」

「誤った情報ですか？それは正日蓮会側にはそのような情報操作の意図はありません。警察側のそ

れは都合というものでしょう」

「まあ、まあ、初めからそうムキになられては話がすみません」

「正日蓮会は訴状を提出した。その法的手続きをとったことで、法的に正日蓮会はあなた方と対等の立場にあります」

「もちろん、そのことは承知しております」

この受け答えは津田係長がその役を務めた。

「これは一つの提案だが」

と、津田係長に露払いの役をさせてから、おもむろに山上課長が口を開いた。

「訴状を出されたのは、万止むを得ぬ事情あつてのことと、あなた方の心情のほどは察しております。われわれとしては何とかここは穏便に取り計らっていたきたいと」

「穏便に？おっしゃる意味がわかりせん」

城ノ内は頑な態度を崩さなぬまま、山上課長に答えた。

「つまり、告訴状を何とか、取り下げてもらえないかと。人間と人間が極限状況の中にあつて為したことであるし、誤りがなかったとは必らずしも言えない。第一、二年、三年と長期にわたって裁判で事実審理するには、この時節柄では」

「この時節柄とは何のことを？二年、三年？われわれには覚悟はできております。これは日蓮聖人様がわれわれを試しておられるのです。法難を乗り越えよ、そののちに、真の日蓮主義が育つのだと。わが正日蓮会は日毎、夜毎、聖人様の有り難いお言葉を一人、一人が耳にしているのですから」

「うむ。勉強不足で日蓮宗たるものについて論及することはできんが、現実には起こり得る問題については、わたしは事前にお話し申し上げることができるとは」

「告訴をし、裁判で争うことは、現実の問題そのものです」

「その通りだ。訴状には取り調べ中に、拷問を受けたという女性が数名いる」

「精神的拷問もです」

「それもあるだろう。しかし、人権蹂躪の件についてだが、あなたが精神的拷問という文句を口にされたので言うが、訴状にある性的侮辱の行為があるとすれば、法廷の場で、原告側の女性は、関係者、傍聴人の前で、いま一度、女性として知られたくないことを、明らかにせねばならぬことになるのですよ。こここのところを、人権を守る立場から、わたしは告訴はお取り下げになつたほうがいいのではと申し上げているのです」

山上課長はさして表情も変えず、これだけのことを述べ立てた。

「たとえば、加来道子は処女の身であるにかかわらず、訴状では局部にまで、異物を挿入されている。精神的屈辱のために、精神に異常を来し、左手が麻痺の状態にある。訴状に目を通したのであれば、厳しく、部下の非人間的な行為を罰するのが、上司の立場というものでしょう。正日蓮会としては、告訴を取り下げる気はまったくありません」

「きみきみ、それは短慮に過ぎる」

山上課長はあなたと城ノ内のことを呼んでいたのに、本性をあらわし、急に城ノ内をきみ呼ばわりした。

「沢藤修平が割腹自殺を遂げました。わたしが強制したのでもありません。みんな真日蓮会のためなら死ぬると覚悟を決めているのです。死のうを相言葉にしているだけで、わたしは死に方まで指示しているのではない。みんな、日蓮聖人様の法難を乗り越えよのお言葉を直に耳にしているのです。もう一度申し上げておきます。告訴状は取り下げません。川崎署特高課の拷問犯どもは裁判で、その鬼の皮を剥がねばならぬのです」

「そうか。それならそれで、こちらにも覚悟があるぞ」

山上課長が態度を豹変させ、恫喝（どうかつ）の文句を浴びせた。

秋の一層深まる一日のことであった。

川崎本部の会館に籠城のかたちで、城ノ内魁、松村安明、加来貞子、前野里枝、神崎勇、それに老婆の川村あきが残り、これに、新参者の松ヶ谷葉が加えられた。

官憲の回し者ではと疑われた前野里枝は、女の黒髪を剃髪し、正日蓮会に忠誠を誓った。松ヶ谷葉はいちばん加来貞子に疎んじられたが、これまでに貯めた金を、正日蓮会に差し出した上、物静かに写経をし、教義の勉強に努めたので、同士として迎えられていた。

一切、外出はせず、外部の者と接触をもたない旨の誓約書も葉は差し出したので、牒報者の疑いは一応晴れた。

城ノ内がみんなに正式に通達したのではないのだが、万策つきたら、全員、抗議のために、この会館内で餓死行をしようという暗黙の了解が成り立った。

どこまで、公正な裁判が行われるのか、疑問でもあったし、その後も、新聞記者に成りすました警察関係者が、告訴の取り下げの件を持ち出したり、元幹部の大津啓作、星田守人が顔を出し、正日蓮会の正常な布教活動は今後保障されるから、告訴はひとまず、取り下げたほうがいいと二人連れでやって来て説得にも掛かった。

だが、城ノ内は頑として告訴取り下げの件は拒否した。

なお、県警特高課は懐柔策を図り、告訴されている被告人の川崎署特高課の原島課長、尾関主任の二名を、まず、直接、謝罪させるために会館に差し向けるので、告訴の件について、再度、話し合ってもらいたいと使者をよこした。

この申し出も城ノ内ははねつけた。

その翌日には、にわか坊主と思える編笠に袈裟衣、手甲脚絆の修行僧に似せた男がやって来て、城ノ内に会見を申し入れた。

「正日蓮会の世直しの考え方はすべて正しい。わたしも日蓮宗の寺門のあるものだが、考えるところあつてこうしてたく鉢僧の道を選び、諸国を回っておる。本日、参上したのは、正日蓮会の今後のことを思つてである。現在の状況は決して正日蓮会にとって好ましいものではない。警察相手に一人拳を振り上げるその姿は勇ましいが、間違つてはいてもお上はお上、その力を教祖様はあなどつてはいないか。死のうなど叫ぶこと自体、わたしは正日蓮会の存亡を危うくするものだと考えているがいかがか」

たく鉢僧は論の合わないことを口にし、城ノ内を説得に掛かった。

城ノ内は玄関先の土間に立った僧の正体をすぐに見破った。

「日蓮聖人として反逆の人です。時の幕府を敵として法難に何度も遭われています。われわれはお上に押し潰されようとも、全員、死のうとかまわないのです。歴史の流れが正日蓮会の正当性に光りを当ててくれるのです。殉教一人行、何をか恐れんの意気が全員に漲っているのです」

「宗教心の強さはあらゆる生命力に比しても強い。しかし、時機を見る必要があります。長いものに巻かれる。誠にいやな言葉ですが、巻かれる振りをするのも一策ではありませんまいか」

「死ぬ覚悟をしたら、裁判で恥じをさらすことなど何でもありません。決着がつくまでは生き伸びるつもりですから、ご安心下さい」

城ノ内はこう言い残し、さっさと奥に引き下がった。僧は何やら口の中でぶつぶつ言いながら会館から去った。

（特高課の連中は相当焦っているな。天日の下に、拷問の実態がさらされたら、警察の権威にかかわる。天誅を加え、奴らの思い上がりに一撃を見舞つてやる）

城ノ内は警察を一人で敵に回している気になり、心の高まりを覚えた。

書齋にもどると、貞子が隣りの六畳間に布団を敷き伸べていた。

「先生、お熱のある体です。少しお休みになって、今後に備えられたほうが」

「いや、そうもならんよ」

「ほら、お熱がこんなに」

貞子は城ノ内のそばに寄りその額に手を当てた。

と、そのとき、書齋のほうにと廊下伝いにやって来た葉が、姿をあらわし、この二人の寄り添った様を目撃した。

気づいた城ノ内はあわて、

「この熱だ。少しの間、休ませてもらうよ」

と、弁明をし、それから寝間着に着替えるために、貞子にあきを呼ぶように命じた。

それで貞子が書齋を出たとき、城ノ内のそばに葉は擦り寄った。

「先生、葉はいつも先生のおそばにいます。お慕い申し上げながら」

「それは…」

と、だけ城ノ内は答え、葉から視線をそらせた。葉の白いうなじだけが妙に城ノ内の瞼の裏に灼きついた。

「わたしはどんなことがあっても、歌人の心は忘れないつもりです。つれづれの折り、先生のために詠んだ歌に目を通して頂ければ、それだけでわたしは嬉しゅうございます」

葉は美濃紙で漉いた淡い緋色の封筒をそつと、書机の上に置かれていた本のページの間に挟み込んだ。

城ノ内は微かに香水の匂いを嗅いだ。余程、気を集中していないと嗅ぎ取れないほどの秘められた薫りだった。

貞子があきを連れてもどつて来た。葉は一礼して書齋から出た。

城ノ内は間が取れず、わざとらしい咳をした。

しばらくの間、城ノ内は午睡の時間をとった。

（葉はわたしの心を惑わす女だ。あの、わたしを見詰めるときの妖し気な目つきは何だろう。わたしを慕っているから？男の体を知っているようで、そうでないようなところもある…いやいや、処女そのものだ。身のこなしには、どこか、そのようなところが）

城ノ内は勝手な想像をした。

部屋に一人残されていたので、城ノ内はさっき葉が置いていった封書のこと気がなり、床から這い出した。淡い緋色の封書を手にする。何か気恥かしかった。

漉き紙の薄い便箋に、何句かの歌が達筆の文字で書き記されていた。

城ノ内は歌の文字を追った。最初の句に目を通す。

一生（ひとよ）なる 儂くもある 花埋みの 恋衣をば われは捨つる身

最初の句だった。あとの句もどれも恋歌で、中には処女（おとめ）の文字も句の中には表現されていたりし、また、男心を少なからず、くすぐるような危うい句もいくつかあった。

途中で城ノ内は便箋を元にもどした。

机の引き出しの奥に封筒を隠した。

二人だけが禁断の実を手にしてるかに思え、城ノ内は自分を律したのだった。

貞子の母親うらの計らいで、加来の家の特棟で何回目か、貞子を抱いて以来、城ノ内は体の関係を持っていない。

肺の病いは性欲が昂進するとよく言われる。滋養を摂り、安静にするので体力が回復すると、何となく熱っぽい体温のせいで、上気するためもあるようだった。

世間では城ノ内のことを色情狂のように喧伝しているむきもあった。

口では真日蓮主義を唱え、おのれを日蓮聖人に擬していたが、城ノ内自身は色好みの性向がないわけではなかった。教祖と奉られたときから、何人かの女に言い寄られ、危うい関係になったこともある。

（わたしは三十をいくつか越えた齢で、肺の病いで死ぬ。そのような天命だ。生き急ぐ、わたしはこの言葉が好きだ）

どこかに厭世気分の漂った思いも、城ノ内の頭の中にはあった。この時代の青年たちの持つ一つの側面を表すこれは考えである。

この後、正日蓮会の信徒たちは、日一日と、死の美学のようなものに、引き擦られて、官憲と立ち向かって行く法を選ぶことになるのであった。

## 第九章 薄明の闇

1

正日蓮会は県警特別高等課の告訴取り下げの働きをすべて拒否、川崎本部の会館に籠城をし、裁判の早期開始を司法側に訴える作戦に出た。

このままでは、ずるずると時期を伸ばされるのは必至で、検察庁も警察も、正日蓮会と持久戦に持ち込み、正日蓮会が自然消滅するのを待つ作戦と思われた。

資金面の援助も外部からはないので官憲は承知していたから、年末までは正日蓮会は持ちこたえられないと踏んだ。

十一月十八日の夜のことである。

みんなが寝静まった頃、一人、前野里枝が廁（かわや）に立つふりをしてそっと床を出た。

会館内では、前野里枝と松ヶ谷葉は同じ部屋で寝起きしていた。部屋は全部で四つあり、一つは城ノ内の寢所、隣りの部屋に松村と神崎、そして、加来貞子は川村あきと、同じ部屋で寝ていた。床を出た里枝だが、葉は里枝が床を抜け出したのを知っていた。

この日、どこか、里枝は落ち着きがなく、葉は里枝の挙動が気になっていた。葉が床に入ってからも、里枝は葉の寝息を伺っているようなところがあった。

里枝は床を出た後、部屋の障子を音がしないように用心をしてそと開いた。

（何？この女、もしかして、城ノ内のところに、夜這いでもする気なの？新聞報道から推察すると、城ノ内はここに居ついている加来貞子と、この前野里枝も自分の女にしたということになるけど、ほんとうかしら？）

葉はそんなことを考えた。

だが、後はつけなかった。障子の開け閉めの音だけで相手に気づかれそうだったし、もし、忍んだとしても、この非常時、城ノ内が相手にするはずもないと思った。

それで、里枝が部屋にもどって来る時間だけを葉は計っていた。

里枝は渡り廊下を足音を忍ばせて進み、廊下の端にある和式の便所に向かった。夜間、小用を足すことは不審の行動ではなかったが、里枝は用心しているふうだった。厠に入ると、竹柵の組まれた丸窓から、外を窺い見た。合図通り、土壁を三つ、軽く叩いた。黒い男の影が里枝の視野の先で動いた。

特高課の者が白いハンケチを手にし、上下に振ってみせた。

それを確認してから、里枝は懐から取り出した封筒を便所の外に落とした。

男が拾い、その場を去った。

何食わぬ顔で、里枝は元の寝所にもどった。

（やはり、厠に行ったの？でも、どうしても、わたしの寝息を伺ったりしたのかしら？その内、問い詰めてやらなくちゃね）

葉は里枝の弱点をつかんだ気になり、そう、呟いてから、眠りに就いた。

剃髪して、仲間に忠誠を誓った前野里枝だが、拘留中に転向を誓わされ、警察の内通者になることを求められた。拷問室は外から一部覗けるようになっていて、前野里枝は加来貞子が実際に拷問され、辱しめを受ける場面に立ち合わされた。

裁判ともなれば教団側の有力な証人となるはずだったが、余りの酷い様に、怖じけづき、前野里枝は特高課のイヌになる道を選んだのだった。教員の仕事はすでに辞めていたが、事件解決後は、警察側が復職の法をとる約束も、両者の間にはできていた。

川崎署特高課の男は、前野里枝から提供された会館内部の状況書を、早速、持ち帰り、その資料分析に掛かった。

その翌日、会議がもたれた。

「城ノ内魁に松村安明、加来貞子、前野里枝、川村あき。それから、青年部の生き残り、神崎勇は時々宿泊して行くことあり、外で何をしているか尾行つきか。うむ？松ヶ谷葉、二十歳ぐらいの女？女流歌人となるな。こいつは何者だ？物好きな女もいるもんだ」

会館内に止まっている者の名を確認したとき、原島課長が部下に言った。

「新入りですか。松ヶ谷葉？身分を洗ってみる必要がありますね」

尾関主任が答えた。

「まあ、一人増えたところで関係はない。こっちの興味は、この女も教祖野郎のお手つきかどうかということだけだ。女流歌人か。城ノ内が好みそうな女ではあるな。婆さんの川村あきを除けば、若い女が三人、教祖野郎はハーレムでも作っている気になっているんじゃないか。常住している男は松村だけ。あの男は教祖に芸者を薦めたぐらいだから、女衞（ぜげん）気取り、まったく、これじゃ、神様も馬鹿にされたものだ。女と乳繰りながら、淫売宿でご託を並べているようなものじゃないか。いい気なもんだ」

原島課長はこの後、松ヶ谷葉なる人物の経歴を調べることに。

続けての前野里枝との接触を持つこと。

規定方針通り、正日蓮会は裁判に持ち込む前に、潰滅させ、告訴を取り下げさせること。そのためには年内には会館からの全員撤去のための法的処置を取ることなどを部下に語った。

会館の持主である元信者の大津啓作に、明け渡し要求をさせる方針で、すでに、特高課は大津啓作の同意を取りつけていた。城ノ内らを立ち退かせるために、特高課は周到な作戦をこの段階で練っていたのである。



ところで、特高課の松ヶ谷葉の身元調査の際に、特高課はこの女流歌人について新しい事実を知ることになった。

一つは女流歌人と名乗っていることから、その方面に詳しい者から、話を聴いた結果、松ヶ谷葉のプロフィールが浮いて出た。三年前に『花埋み』という短歌同人誌に投稿していたこと。また、その同人誌の主宰者、田丸素峰の死を悼んだ女の同人が二人、後追い心中事件を起こし、世間を騒がせたこと。一人は死んだが、生き残りの一人が松ヶ谷葉であることなどが判明した。

また、死刑囚赤石勇二に、愛の歌を詠んで送り、その短歌の一部が法曹関係者が出している短歌誌に紹介された事実も、特高課はつかんでいた。

警視庁が管轄している特別捜索人願いの資料の中にも松ヶ谷葉の名があった。

捜索願は岐阜県警の土岐広次刑事から出されたものであった。

現在のようにならぬが、全国が電信ネットワークで結ばれている時代ではないから、各都道府県の警察は特殊な事件を除き、まだ協力体制にはなかった。

土岐刑事がとった苦肉の策だったが、思わぬところで、この件に関しては警察機構の網に掛かったことになる。

本名横瀬菊世、二十三歳。岐阜県恵那郡遠山村上手向が出身地で、岐阜・山岡で起きた叔父殺しの重要参考人となる。

神奈川県川崎署特高課から、紹介の手紙が岐阜県警土岐刑事宛てに発信された。

十一月二十九日のことであった。

## 2

「どうやら、今年の暮れは大量の死刑執行がありそうで、赤石勇二も危ないかも知れません。それで、松ヶ谷葉さんの居所を知りたいと思いましてね。わたしのほうでも調べたのですが、前に住んでいた亀戸にはもう居ませんで、それ以後の連絡先がわからないのです。いざというときに、住所がわからないようでは、悔いを残すことにもなりかねないと思いまして」

「この前、亀戸まで行っただけですが、運の悪いことに、ちょうど前日に火事があった、横瀬菊世には会えませんでした。警察の者の名を名乗るわけにはいかなないので、笹川さんのところに連絡をくれるよう元大家の男には告げておきました。先日、問い合わせたところ、荷物の一部を取りに、本人は元大家のところに十一月十一日に立ち寄っていました、わたしからの伝言も相手に伝わっているのですが、先生のほうに連絡がないということはその連絡を本人が無視していることになるわけです。わたしが張りついていけば、対面できたのですが、そうもいかないのが辛いところです。こちらでもその後の行方を探っているところなんです、変わった後の住所は不明のままです」

岐阜県警の土岐刑事のところに、仙台の笹川弁護士から長距離電話が入った。  
その電話は思い掛けぬ内容を含んでいた。

「時間的に間に合いませんね。直ぐにでも連絡したかったです」

「一応、警視庁のほうにも、捜索人依頼はしてあるのですが、まだ、何の連絡もありません。横瀬菊世は、やはり、水商売関係で生計を立てていると思うのですが、これまでとは違ってカフェー勤めはしていないようで、他の水商売についているのかも知れません。お陰で無駄足を。ああ、それから、何か、新興宗教に入っているらしいという情報もあるのですが、まだ、そちらは確かなことはつかんでいません」

「新興宗教ですか？そんな話はわたしは聞いていませんでしたね。わかりました。ともかく、土岐さんのほうで、彼女の居場所が確認出来れば、申し訳ありませんが、わたしのほうにご一報下さいますか」

「横瀬菊世が赤石勇二の死刑執行の日時を知ったとしても、果たして面会に行くでしょうか？」

少々、ぶつしけな質問だったが、土岐刑事は正直な気持ちをつけた。

「さあ、それはわたしにもわかりませんが、これまでの経緯から考えて、わたしとしては、二人の間に、心残りがあってもいけないし、最善はつくすべきだと考えて、電話させていただきました」

笹川弁護士は穏やかな口調で告げた。二人の間の電話が切れた後、しばらく、受話器を握り締めたまま、土岐刑事はぼんやりとしていた。

（あの山形での事件は単独犯とされているから、横瀬菊世とは関係ないが、どうして、村山菊世は赤石勇二に接近したのか？どうも、その点が引っ掛かるな）

前にも考えたことを、土岐刑事は頭の中でなぞっていた。死刑囚との愛の短歌のやり取り？土岐刑事はそのようなロマンチックなことは考えられない性格であったせいもあるが、両者の関係にうさん臭いものを感じていた。

横瀬菊世が果たして死刑囚に会いに来るだろうかと疑い、そんな質問を土岐刑事は笹川弁護士にぶつけたのだ。歌人松ヶ谷葉の行動は純粹愛の世界の話ではないように土岐刑事には思っていた。

（行方を探るとしたらやはり新興宗教関係ってことになるのか。残されている線はこれだけだ。しかし、その宗教教団を特定しているわけでもないから、こちらも、まだ、暗中模索の段階ってことになる）

岐阜に住んでいるので、特に正日蓮会の活動状況などを、土岐刑事は知り得る状況にはなかった。横瀬公次郎殺人事件は事件発生からすでに二年余の歳月が経っていた。

明日は未解決事件に関する合同捜査会議が、本署の岐阜県警で開催されることになっていた。土岐刑事も署長とともに出席することになっている。

正直なところ、気が重い。

このとき、すでに、神奈川県警から、事件解決を促がす可能性のある一通の手紙が發送されていたのだが、まだ、土岐刑事はその果報については知らずにいた。

### 3

十二月二日。

赤石勇二は死刑執行の朝を迎えた。

死刑囚だけが収監された別棟舎房のコンクリート床に、時ならぬ靴音が響いた。死刑確定から日は経っていないが、この年は全国で大量の死刑執行が行われた。時節柄、死刑囚たちは厳しい状況に立たされていたのである。いわゆる司法関係者のいうところの在庫一掃というやつであった。午前九時十五分、時計の針が運命の刻（とき）を刻んだ。

「おれじゃない。こんなに早いわけがない」

赤石勇二は呪文のようにいつもの文句を唱えたが、その念は通じなかった。

すでに、十一月に入ってから、この別棟舎房から、二人の死刑囚が処刑場に引き立てられていた。

複数の者の足音が、赤石勇二の獄舎の前で止まった。赤石勇二は目をいつばいに見開き、視点も見定まらないまま、扉の外を見詰めていた。

がくがくと膝が震え、体中から力が抜けていった。

看守が鍵穴に、鍵を差し込む。その音を彼は聞き取っていなかった。

急に扉が開いたように思えた。何人かの男の顔が並んでいた。

初めに教育部長の男の顔が目についた。

「所長がお呼びだ」

教育部長が口を開いた。その言葉はやさしかったが、背後に控えているのは、特別の任に就いた看守たちで、併せて十数人はいた。みんな、一様に緊張した顔つきになっている。

いまから何が起きようとしているのか、この事態を明らかに見せつけられ、赤石勇二は何か、言おうとしたが、ただ、口をばくばくさせただけだった。

死刑場に引き立てて行くときに暴れる者もいるから、警護の任も彼らは負っているのであった。少しでも抵抗する素振りを見せれば、たちまち、彼らは赤石に飛び掛かるに違いなかった。

(以外に早いお迎えだ。もう、おれは殺されるのか：)

ちらと、そんな思いが頭を掠めた。

赤石勇二は黙ってその場に立ちつくしていた。膝の震えはまだ止まらない。

二人の看守が房内に入り、舎房を出るよう赤石勇二を促した。もはや、逃れようはなかった。赤石勇二は背を押された。

前後左右を看守たちに固められ、赤石勇二は所長室に連行された。舎房全体にびーんと張り詰めた空気が流れる。コンクリート道はとて長く、赤石勇二はいつの間にか、擦り足で歩いていた。

やっと、所長室に着く。

朝の光りが窓の外にはあったが、赤石勇二の目には入ってはいなかった。

初めに所長が彼の名を確認した。

「赤石勇二だね」

「はい、そうです」

「本日、死刑執行の命令書が下りた。いいね、君と別れるのは残念なことだが、これはすでにきめられたことである」

所長が死刑執行の宣告をした。

そう告げた後、所長が改めて声を掛けた。

「まだ、少し時間がある。何か、書き残すことがあれば、書きとめておいてもいいんだよ」  
「いいいな言葉使いだった。」

「ここで書くのですか？」

赤石勇二は小さな声を発した。

「いや、ここで書きにくければ、教戒室でもいい。お別れの前に遺書を書く者もいるからね」

「はい。わかりました」

赤石勇二は消え入りそうな声だったが、所長に返事をし、一礼をした。

宮城拘置所内の死刑執行室は拘置区舎房とは塀を隔てた場所にある。比較的、死刑囚舎房とは近いところにあった。ひっそりとした森の中に身を隠すように建っていた。

赤石勇二はその小さな森に囲まれた刑場に引き立てられた。

森と言っても、冬の最中、檜林の木々の枝は、冬空に向け、そそげ立っているように赤石勇二には見えた。木造平屋建ての粗末な感じの建物内に、否応なく赤石勇二は連れ込まれた。

処刑場の建物の内部は八畳ほどの広さがあり、処刑室に、教戒室、それに仏間などが用意されていた。

板床はそのまま剥き出しの状態で、一部には床板がささくれ立っている場所もあった。

入るなり、寒々とした思いに、赤石勇二は捉われた。

個人教戒室には僧侶が待ち受けていたが、赤石勇二は遺書を認めたため旨、申し出た。処刑予定時刻の三十分前のことであった。

(こんなかたちで決着はつけないが、おれ一人で背負って行くことでもない。女流歌人に化けて姿を現さなかったら、おれはあいつを許したかも知れない。おれが一人でやっただけ張ってきただけ以上、あいつには身の危険はなかったんだ。愛の歌？あの女に愛の気持ちなどあるわけがない。余計なことをした罰をあの女は受けるべきなんだ。あれは自分可愛さにやったことなんだから。おれはあいつの卑怯な保身術が、ずっと、がまんならなかった。観音菩薩様と同行三人、ほんとうにあの女が愛の歌を贈ったのなら、この道行きは当然のことだろう。それに、岐阜であいつは人を殺

している：あいつも殺人者だ）

赤石勇二は、この際に、もう一度、頭の中を整理した。

死の恐怖から逃れるために、最後の最後に、一芝居を打ってやろうと、赤石勇二は獄中であつてこの顛末を考えてきたのであつた。

法曹関係者の発行する短歌誌に、愛の歌を発表させたのも、彼が意図してやったことであつた。美談話ではないことを知らせるために、彼は敢えて、このような挙に出た。一種の嫌がらせの心理も働いていた。

そうでもしなければ、とてものこと、おのれの短い命を終えることはできなかった。

この場で、赤石勇二はこれまで黙秘を守つてき横瀬菊世との共犯の事実、そして、その証拠として、上ノ畑観音堂の下に埋めた二人分の巡礼用の袈裟衣や、錫杖などの存在を書き連ねた。

また、横瀬菊世が彼に一部語つた岐阜・山岡での叔父殺しのそれらしき話しの一部を併せて書き記した。

お迎えが来たら、このように最後はしようと、前々から赤石勇二は考えていた。どこか恨みがましくもあつたが、その思いをこの世に残して死ぬことは出来なかつた。

菩薩様を加えての同行三人、偽装のために用いた袈裟衣の背には、そのような文字が書かれているはずだつた。

すでに赤石勇二は線香の匂いを嗅いでいた。

原則として、この場で、死刑に立ち会う者たちは、遺書の中身までは確かめない。そのような時間の余裕もなかつた。

「心の中で南無阿陀仏と唱えなさい。声を出すと舌を噛み切ることがある、いいね」  
立ち会い人の一人、所長が告げた。

午前十時、赤石勇二は仏間に線香の薫りが立ち、教悔師の唱える四弘誓願（しぐぜいがん）の読経の声が響く中、処刑台上に上がった。両手錠が嵌められており、目隠しがされていた。首吊りの縄がしっかりと首輪に巻きついた瞬間、足場の床板が落ちた。

赤石勇二は二十七歳でその短い命を終えた。後には一通の遺書だけが残された。

4

十二月に入ると、オーツク寒気団が南下してきて、寒い日が続いた。

正日蓮会に対する川崎署特高課の締めつけは一段と厳しくなつた。

県警内部では対策に苦慮していた。正日蓮会の完全潰滅を図るか、裁判の始まる前に、川崎署の原島課長、それに実行責任者の尾関主任らを引責辞職させ、あくまでも、正日蓮会からの告訴取り下げを取りつけるか、意見が分かれていたのだ。

だが、苛酷な取り調べの実態が世に出ることは絶対に避けなければならなかつた。県警側も強硬弾圧の法に出ることに同意した。

川崎本部に立て籠もつた信徒たちは、初めは意気軒高だったが、かぜをひいていた川村あきが、老齢と心労のせい、肺炎に罹り、信徒の手により、病院に担ぎ込まれた。

蓄えておいた食糧が乏しくなり、買い出し係りのあきも倒れて、籠城組の士気は低下した。いつも、会館の外には数人の私服の特高課員が徘徊しており、出入りする者は規制を受けた。こんな事情で、いつか、会館にいる者たちは孤立化していった。

そんなある日、肺炎で入院していた川村あきが、一人、静かに息を引き取つた。

教祖の城ノ内もかぜの熱のために、何日か、床に臥せた。一人、一人の顔にも疲れの色が滲み出ていた。

が、松ヶ谷葉だけはみんなと違つた。

まだ、明けきらぬ早朝に、葉は起き出し、会館の裏庭に掘られていた井戸水を汲み上げ、白い木綿の肌襦袢を素肌に着けると、水垢離（みずごり）の行に励んだ。お題目の南無妙法蓮華経と唱える声が、凍りつくような朝の空気を破って響いた。

初めに行を行った朝、城ノ内は水垢離をとる葉の姿を目撃した一人だった。気温差のために水蒸気の白いもやが立ち、その中に白衣で素足のままの葉の姿を認めたとき、城ノ内はその一途（いちず）さに心を打たれた。

が、次に、城ノ内は、女性（によしろう）の美しいまでの体の線に視線を釘づけにした。びしょ濡れのままの白衣は、葉の体にまつわりつき、乳房のかたちと共に、双つの乳首までもがはつきりと表されていた。

腰のくびれに、丸く張った下半身、さらに冷水を浴びると、葉は下履きも着けていなかったため、太腿の露わさに、黒い陰毛までもが、城ノ内の目に灼きつけられた。

このとき、葉は厠の側の廊下に立つ城ノ内の姿を目の端に捉えていた。

冷水を浴びる度に、葉は少しずつ、城ノ内のほうに向け、体を正面に持って行った。

乳房の張りりと、内腿の白さ、猛った陰毛の淫らさなどを、このまま、白衣を捨てて、城ノ内に見せつけてやりたい思いに葉は駆られた。

この水垢離の行のせいで、みんながかぜ気味なのに、葉だけは暖房のない寒い部屋でも、かぜ一つ引かずに過ごせた。

お陰で体調を崩した貞子に代わり、葉は城ノ内の看病役を務めることが多くなった。

「葉さんには歌の道があつていいね。ここに居る者とはまた違った眼で世の様々のことを見ている。文学の道に手を染めた者はなよよとして余り好きじゃなかったが、葉さんを知ってわたしはその思いを改めたよ」

と、城ノ内は折りに触れ、葉のことを誉めた。熱のために上気した頬に、そんなときははにかんだような笑みが浮いた。

川崎署から使者が来て、大津啓作の持物である会館の明け渡し請求の書類が正式に、正日蓮会側に手渡された。

城ノ内がみんなを書斎に集め、これからの行動方針を伝えた。正日蓮会は追い詰められていた。会館の明け渡しは、みんなが路頭に迷うことを意味していた。

「特高課の連中はあくまでもわれわれを孤立化させるためにあらゆる手段を弄してくるようだ。いま、われわれにできるのは、一人、一人が最後の気力を振り絞り、この法難に立ち向かうことだ。何ができるか。抗議の意志を示すには断食行しかないと思う。例え、飢えて死のうとも、われわれの殉教の精神は、後世で評価される時が来るだろう。死ぬことで永遠の命をまつとうする。その輝かしいときが、いま、目の前に用意されている……」

城ノ内の上気した頬に赤味がさした。

やつれた顔にはすでに死相が浮いているようでもあった。

みんなに混じり、葉も教祖の話は聞いていた。

だが、いま一つ、断食行には心は動かされなかった。他の者は口々に「死のう！死のう！」を例によって連呼した。その文句に酔っているようである。

結局、抗議のために全員が、断食行を実行することになり、誓文書に名を連ね、教祖の認めた抗議文には血判が押された。各自、遺書も作成した。葉も一応はみんなに倣（なら）った。

（ここに来たのは逃げ場所を求めてのこと、もし、わたしが追い詰められているのなら、わたしはここを死に場所にしたって構わない。城ノ内のために死ぬ？そんな思いはもはやないけれど、死の遊びにつき合って、秘密は胸に抱いたまま、自分のために死ぬのも悪くない趣向だわ。断食行？でも、痩せさらばえて死ぬなんて。わたしは美しいまま死にたいわ）

葉はみんなの顔を見回しながら、自分だけは別のことを考えていた。

この日から、一日一回だけ、薄い粥に梅干が一つの断食行が始まった。食糧もすでに底をつき始めていた。この情報は、前野里枝によって、川崎署の特高課員にもたらされた。

十二月二日の夜のことである。

葉と一つ部屋で過ごしていた里枝が、葉の耳にそつと囁いた。

「あなたは死刑囚に恋歌を贈った歌人として、名を知られているんですって」

「それが何か？いまはそんなこと関係のない話よ」

菊世は不意をつかれ、うろたえた声を出した。暖房のない部屋では寒く、断食行が始まって数日が経っており、体力も弱まっていたので、早々に二人は床に就いていた。

「その死刑囚の人のことで、あなたにぜひ、耳に入れておきたいことがあるんだけど」

里枝は半身を起こし、葉のほうににじり寄ってきた。暗い行灯が一つ灯っているだけの部屋だった。里枝の丸坊主の頭には、薄い毛が生え初めていた。目の端に意地の悪そうな光りが宿してゐるのを菊世はみとめた。

「そんな話の前に、前野さんに尋ねたいと思っていたことがあるの。あなた、夜中になると、そつと寢床を抜け出すようね。あれは何の真似なの？」

「別に…。ね、あなたはと思う？ほんとうにみんなはここで餓死してでも、抗議の気持ちを貫く気なのかしら？」

里枝は話題をそらせた。

「ちゃんと答えを聞いていないわ」

「それなら言うけど、赤石勇二って死刑囚、執行時間がもう迫っているそうよ」

「…どうして、そんなことをあなたが。何者なの、あなたは？」

菊世は一層、狼狽した。

薄暗いので顔色まで読まれることはなかったが、その声は震えを帯びていた。

里枝は平然とした口調で言葉を継いだ。

「裏切っているつもりはないわ。正日蓮会は本来は正当な宗旨を持った教団よ。だから、わたしはこのまま、弾圧されて滅びて欲しくないと思っっているの」

「だから何？あなたは外に居る連中の手先なの？それで…」

「特高課の人は丸く治めたいと願っているのよ。みんなが餓死行を遂げる前に、ここは撤収されることをわたしは願っている。いま、死の抗議をしようとすることも、自己満足のためだけのよな気がして」

「待って。さっきの話だけど、あなたはどれだけの話を知っているの？あなたが特高のスパイだっことはわかったけど、わたしはそんなこと何とも思わないわ」

「松ヶ谷葉の本名は横瀬菊世、そして、あなたは岐阜の出身で、そうね。相手から渡されたメモを渡したほうが早そうね。ちよつと待って」

里枝は言い、床を出た。

部屋の一隅に寄り、里枝は背伸びをすると、鴨居の裏側の溝に手を入れ、紙片を取り出した。

小さく折り畳まれた紙片を、葉は渡された。行灯を引き寄せ、その文面に目を通した。

『松ヶ谷葉。通称歌人を名乗る。本名横瀬菊世。岐阜県恵那郡遠山村上手向（かみとうげ）の生まれ。短歌同人誌『花埋み』に籍を置いている時、主宰者、田丸素峰の死に際し、同人吉永踏書と後追い心中を遂げるも、当人は未遂に終わる。また、獄中の死刑囚赤石勇二に愛の短歌を贈り、その間、本人は宮城拘留所に二回赴き、赤石勇二と接見。尚、前記住所で起きた叔父横瀬公次郎殺人事件の重要参考人として、岐阜県警ではその行方を追っている』

その紙片を持つ、葉の手がぶるぶると震えた。すーと血の気が引いた。(まさか、ここまで、わたしのことが知られているなんて。拘留所に面会に行った回数まで記入されている：岐阜の事件もわたしを犯人と断定しているように思えるわ)

「殺人事件と関係ないなら、あなたは警察に出頭すべきなのよ。もし、思い当たるふしがあるなら、あなたがいくらわたしの秘密を握っていても、どうってことないの。わたしの協力者になればここからうまく逃がしてあげる法もあるわ。どうなの？その点は？」

攻守と場所を変えていた。

里枝は床の上に起き上がったまま、葉を威圧的な目で見返した。

「そうね。わたし、正日蓮会の真の信者かと問われれば、確固とした信念の持主とは言えないもの。死の美学とやらに取り憑かれているみんなの死に様を見届けてやりたいという思いもどこかにあるのよ」

葉は直接には岐阜での事件のことには触れなかった。これ以上、うるたえたふうを里枝に見せるのを恐れた。

「わかった。加来貞子だけが先生となら死ぬ気になっているのよ。宗教心からではなく、きつと、あの女、先生との情死を望んでいるはず。動機は純粹とは言えないわ」

二人の女は、お互い顔を見合わせ、頷き合った。

この時点で、里枝は警察側から、葉の監視を申しつけられていた。外との通信は便所の窓からの投げ文と、庭の縁石の下に、警察側が通信文を隠す法が取られていた。

木枯らしの鳴る音を耳にしながら、この夜、葉は眠りに就いたが、風音に身を刻なまれるような気がしよくは眠れなかった。これまでの自分の半生が甦っては消えた。

叔父の公次郎が酒をくらって寝入っているとき、菊世は縄を手にし公次郎の首を絞めに掛かったことがある。裸の折檻を受け、ケヤキの木に縛りつけられた後のことで、菊世は本当に公次郎の首を絞めようとした。そのときは、公次郎が寝返りを打ち果さなかった。その怨念のままに公次郎を殺害したが、いまは、その罪を裁く場に、菊世は引き立てされようとしていた。

すでに、菊世は追い詰められていた。

あれこれ、思いを巡らせているうちに、いつとき、ふーと寝入った。

夜半のことである。

葉は悪い夢を見、魘(うな)された。不動金縛りに遭っていた。ぼんやりした白い闇の背景があり、不意に黒い雲が線香の煙りのように立ち昇った。その途端に葉は首を絞めつけられていた。苦しくなり、手で首を絞めて来る者の手を払おうとしているのだが、かえって、自分の手が首に喰い入って行く…。

「うーむ…」

と、呻いたとき、自縛が解けた。

(赤石勇二が処刑された？まさか…)

葉は寝覚めたとき、急に寒さを覚えた。そんな気配を感じた。

目を明ける勇氣はない。

赤石勇二が直ぐそばに立っているような恐れ of 気持ちを抱いた。両手を握り締め、唇を震わせて、葉は外の白い闇の気配を窺っていた。

十二月三日、神奈川県警からの連絡文書は、岐阜県警土岐刑事の手元に届いた。その文書を読み進めると、横瀬菊世の居所が明記してあった。

「おい、横瀬菊世が身を隠している場所を見つけたぞ。おれは川崎まで行ってくるぞな。やっとなあ

の女とお目もじが叶うってわけや」

一緒にこの事件を追ってきた同僚の一人に、その文面を見せた後、土岐刑事は上司の捜査課長に、神奈川県警からの照会状を見せた。

土岐刑事が情報を得ていた通り、横瀬菊世は宗教団体の一つに身を隠していた。正日蓮会川崎本部とあり、この本部のある建物は、現在、法的に問題があり、二十四時間態勢で、見張りの者が監視している旨、書き添えられていた。

横瀬菊世は、まだ、状況証拠から割り出した容疑者で、重要参考人でしかなかったから、逮捕状執行には無理があった。

横瀬菊世に接触出来たとしても、任意同行を求めた上での取り調べとなる。

この日の午後、打ち合わせ最中の土岐刑事に、仙台の笹川弁護士から、緊急の電話が入った。

「赤石勇二が十二月二日、死刑を執行されました」

「あ、それは。間に合いませんでしたか。実は先生、横瀬菊世の所在がつかめました」

「横瀬菊世はどこにいるのです？土岐さん、あなたに知らせなければならぬ重要なことがあるのです。あなたが追っていた叔父殺しの事件ですが、真偽はともかく、赤石勇二が遺書の中に、横瀬菊世の犯行を匂わせているような箇所があります。まだ、遺書は直接手にはしていないので、仄聞（そくぶん）ですがね。それから、わたしの扱った山形の老夫婦殺しの事件にも、横瀬菊世は見張り役として、加わっていた可能性がその遺書によるとあるようです」

「先生、ちよつと待って下さい。横瀬菊世は二つの事件に関わっていたということになるのですか」

「そのようですね。遺書の中身をそのまま信じればの話ですが」

この後、笹川弁護士は遺書の中身について触れた。

横瀬菊世と知り合った経緯、銀山温泉で被害者の佐田仁助と横瀬菊世が知り合ったこと。それから、山形の事件に関しては、最上三十三ヶ所観音場巡りの巡礼者になりすまし、犯行の夜は上ノ畑観音堂で時間を過ごし、二人分の巡礼の袈裟衣などを、お堂の下に埋めたことなどが書き記されていると、笹川弁護士は土岐刑事に説明をした。

「わかりました。わたしは明日の朝早く、列車で川崎に向かいます。その後のことは追って報告させていただきます。先生、わざわざお知らせ下さってほんとうにありがとうございます」

土岐刑事は筒型の黒い受話器を耳に当てたまま、深くお辞儀をした。笹川弁護士との縁が不思議なことに思えてきた。寄せられたこの情報は、まだ、状況証拠を補強するものでしかなかったが、捜査が新しい展開を見せていたのは事実であった。

十二月五日。

この日、岐阜県警の土岐刑事は神奈川県警川崎署特高課に顔を出した。

土岐刑事は横瀬菊世が潜伏している正日蓮会の現在おかれている状況を初めに知らされた。特高課はあわたたしい状態にあった。

「明日未明、十二月六日に、籠城（ろうじょう）している連中は一斉検挙します。建物に対する不法占拠の罪だけで充分です。すでに立ち退きは通告しており、その期限は今日の午前零時をもって切れます。土岐刑事がお尋ねの松ヶ谷葉こと、横瀬菊世ですが、中にいることは間違いありません。通牒者を内部に潜り込ませてあるので、これは確実な情報です」

尾関主任が告げた。

「わたしも同行させていただけますか」

「どうぞ。捕物劇と言っても、たかが、五人、それも女が三人で、その上、連中は断食行を始めて、四日目、半病人のような連中ですから、われわれに立ち向かう元気などありませんよ」

「その前に、横瀬菊世だけでも、外に連れ出す方法はありますか。わたしの方は別件で取り調べをさせていただけたいのですが」



「慌てることはありませんよ。どうせ、捕まえても、簡単な取り調べで全員釈放です。その後、ゆっくり、あの女流歌人とかいう奴の正体を明かして下さいよ」

長く話をしている暇はなかった。土岐刑事は川崎署特高課の刑事の溜まり部屋で、夜が来るのを待つことになった。

(とうとう、あと数時間のうちに、あの女と対面できる。二年余の歳月が過ぎた。他の事件も抱えながらの捜査行だから、止むを得ない面もあったかも知れないが、やっと、これでおれも刑事としての体面が保てそうだ。あの女が横瀬公次郎を殺ったとおれは踏んでいる。犯人は男物の十文半の地下足袋を履いている？確かに、矛盾するところだが、偽装だとしたら、謎は解ける。爪先の部分の一部、欠落している血の足跡、あの謎も大き目の地下足袋だとしたら、謎が解けぬわけではない。問題の地下足袋を見つけることが先だが。それにしても、山形の殺人事件にも横瀬菊世が関係している可能性ありとは……。犯人というのは同じ手口を用いるところがある。横瀬菊世の場合も、もしかして：)

土岐刑事は長年の刑事の勘で、犯行手口の一つに注目をした。山形の事件では、観音堂の地下に証拠品を埋めたところ。横瀬菊世が赤石勇二と組んで犯行を行ったのだとしたら、遠山村の事件でも、同じ方法で、どこかのお堂に潜み、夜になって行動したことも考えられるのではないか。

犯行当日、山岡の駅近くの茶店で、横瀬菊世らしき美形の女と出会った。また、女工仲間だった女の一人が、多治見市内で、同じ風体の女を見かけたという情報もある―やはり、横瀬菊世は犯行当日、遠山村に現れたに違いない。

土岐刑事はたばこを吸いながら、そう、確信した。

横瀬菊世の薄幸な少女時代のことや、その後の荒んだ暮らしぶりのことなどが、次々に頭に浮かんで消えた。複雑な思いで夜が更けるのを土岐刑事は待った。

「わたしはもしかしたら死に場所を求めて、ここに来たのかも知れない。最上三十三ヶ所巡りの袈裟衣を身にまとったとき、同行三人と背には書き記されていた。昨夜見た夢が正夢だしたら、赤石勇二はもうこの世にはいないのかも知れない。そうでなくとも、いずれ、処刑される身だわ。同行三人のうち一人は観音菩薩様、正日蓮会にわたしが導かれたのも、仏のお導きのせいなのではなからうか」

十二月六日の深夜、寝つけぬまま、松ヶ谷葉は一人呟いた。また、不動金縛りに遭うのではないかという恐れのおもひもあつた。

(わたしはこの中の誰もが餓死行を果すとは思っていない。みんな見せ掛けで、死のう！死のう！と口走っているだけよ。それならわたしが死んでみせてあげようか。松ヶ谷葉は一度は死に臨んだ女よ。吉永踏菁の一人よがりの死の美学にへどが出そうになって、わたしは自殺幫助の真似ごとをしたけど、あのとき、わたしだって、昇昇水をおおることはできたわ。あの女なんかより、余程、わたしのほうがしたたかよ。死ぬことなんか怖くないわ)

松ヶ谷葉は自分の周辺に、捜査の手が伸びていることは充分に承知していた。もし、捕まるようなことがあれば、そして、赤石勇二とやった山形の事件がばれるようなことがあれば、場合によっては死刑も免れないかも知れない。

葉はこの時点では、勇二の遺書の存在は知らなかったが、内心ではそのようなこともあるかも知れないと、恐れている向きもあった。法曹関係の短歌誌に、赤石勇二が葉の歌を発表させた経緯から、葉は勇二の意図をあれこれ推量していたのだ。

岐阜の事件は計画犯行で、その上、親族殺人だから罪は重くなるはずだった。

夜半、午前一時過ぎ、一度、葉は厠に立った。みんな断食行の最中だから、近頃は他人に構わな

くなっていた。

同室の里枝は、葉に背を向け、よく眠っていた。

里枝は未明に、警察の連中が会館を襲うのを知っていたが、この件は葉にも教えなかった。葉自身も警察が関心を抱いている人物であったからである。

葉が廁の丸窓から外を見たとき、微かであったが人の動く気配がした。

会館の裏側になるが、よく見ていると、まわりを鉄条網で囲み、バリケードが張られているようであった。

「何のために？いよいよ、ここの封鎖態勢を固める気？でも、それなら、真夜中にやらなくたって済むことだわ。彼らはわたしたちを一網打尽にしようとしている？夜打ち朝駆けってことばがあるわ。彼らは……。そうね。わたし自身の決着のつけ方は、もう、時間がないみたい。わたしなりに覚悟を決めなくちゃ」

そこまで考えたとき、葉はそそくさと用を足し、廊下を伝って、自分の部屋に戻った。

小用を済ませただけの短い時間のことで、里枝には怪しまれることはなかった。

里枝が眠りに入るのはいつも明け方である。夜半に起き出したりで、不審の行動があるので、つい、朝を迎える頃に、里枝は深い眠りに入るのであった。

断食行を始める前に、城ノ内が全員に経帷巾の死装束を手渡した。その死の衣装を葉は身に着けた。

（誰のために死ぬのでもないわ。わたしのためによ。父親の望み通りに、わたしは歌人の一人にはなれたけど、到底、与謝野晶子や、山川登美子のようにはなれはしなかった。生きるための身の処し方ばかりに長けて、わたしは自分の身を滅ぼしたようね。でも、公次郎を殺したことは後悔はしていない。お父さんと、お母さんの無念の思いをわたしは晴らすことが出来たのだから）

午前五時を少し回った時刻のことであった。

冬の朝のことだから、まだ、東の空は暗かったが、濃い紫色の雲が空の果てには、わずかだが、明るさの兆しを忍ばせ初めているかのようだった。

「わたしは松ヶ谷葉よ」

と、自分に語り掛ける。

遺書のつもりで、葉はこれまで書き残した句と共に、辞世の句を記し、胸懐にそれらの句を収めた。

送り火は 命のごとく ほのめきて

朝灼（や）けの空 吾が身染むなり

雨熄（や）みて 夜空さやけし 朝（あした）なれ

冥途（たび）の想ひに 父母（ちちはは）や在り

美しいままの歌人、松ヶ谷葉の姿を頭の中に思い描いた。

そつと、足音を忍ばせ、部屋を出る。

里枝には気づかれてはいなかった。

中廊下に出ると、葉は麻縄を縁の下から取り出した。この麻縄は里枝から、岐阜県警の刑事らしき男が、横瀬菊世に関心を持っていると聞かされた日に、このようなこともあるのではと、自ら用意したものだった。

凍えた朝の冷気が葉には快かった。

吐き出す息の白さに勇気づけられている自分を感じた。

一步を踏み出す。

なぜか、楽しい気分なのだった。

死途の旅に出るといふ悲壮な思いはなく、これで、すべてのことが楽になるのだと、このとき、葉は思い始めていた。玄関の土間に立つ。

いつか、春の一日、葉は歌集を手はこの会館を訪れた。それもいまは懐かしい思い出の一つとなった。

他の者に気づかれぬように、玄関の戸を中から開けた。つかい棒を中から外す。

肌を刺すような寒さであった。ちりちりと素肌が痛めつけられる。そのせいで、葉の身も心もきゅっと締まった。

前から考えていた通り、玄関先に置かれていたリング箱を持ち出し、その上に足を乗せた。玄関戸の外側上部には小さな外灯があり、木組みの支えの枠がそこにはあった。

葉は麻縄をその木枠の隙間に通した。

首が入るよう麻縄は輪状にされており、のど輪に当たる部分には結節目の瘤が二つ、用意してあった。これだと、深く結節目は舌骨に喰い入る。

（わたしのために死ぬのよ。そのことを、わたし自身に言い聞かせておかなくちゃ。ああ、それから、わたしのお父さんやお母さんがいるところにわたしは旅立つんだわ。こうして、自分に決着をつけるのだから、お父さんも、お母さんも、わたしのことを許してくれるはずよ、きっと。わたしのこと、鬼のような女などと言わないで。お願い……）

この父母への文句が頭に浮かんだとき、初めて、葉の目に涙が滲み出た。はらりと一粒の涙がこぼれ落ち、葉の頬を涙が伝った。

なぜか、赤石勇二のことは頭になかった。ましてや、赤石勇二に贈った歌の文句など、思い浮かぶことはなかった。死ぬのだという実感もない。

葉をこのように追い詰めたのは、赤石勇二だったかもしれないが、死の間際になると、そんな現実的な事柄は頭の中から、すべて、消え去っていた――。

この日の未明六時を期して、警察は会館を急襲し、全員を会館より退去させる策を立て、裏手を除いた三方に、人員を配置している最中だった。

特高課員と共に、岐阜県警の土岐刑事も会館前の小さな広場に身を隠していた。全員が検束されれば、松ヶ谷葉こと、横瀬菊世と対面の機会が得られる手筈となっていた。

二年ぶりの疑念を晴らす時が迫っていたことになる。

何より、赤石勇二の遺書が意味するものに、土岐刑事は重大関心を抱いていた。

遺書に書かれていることが真実ならば、横瀬菊世が叔父殺しの犯人である可能性はかなり高くなる。

会館をそっと抜け出した松ヶ谷葉は、すでに、死の世界にと旅立とうとしていた。

わずかに白い息が漏れた。

その白い息を殺す。松ヶ谷葉は目を閉じた。

東の空の端が急に白み始めていた。

松ヶ谷葉の視線は空の果てにはもはや届いてはいなかったが……。

りんご箱が蹴られた。松ヶ谷葉の体が宙に浮いた。舌骨が折れる鈍い音がした。

数分後、松ヶ谷葉は自ら選択した一本の麻縄に身を託し、二十三歳の短い命を絶った。

朝明けの空がなお白み始めた頃、警察の先行部隊の一人が、会館の玄関先で女の縊死体らしきものを発見した。

報告を聞いた原島課長が慌てて、玄関先に足を向けた。

水蒸気のもやった向こうに、白い経帷巾を着用した女の姿が見え、裸の足が宙ぶらりんになっているのを、原島課長は認めた。直ぐ、そばまで近づき、目を上に転じて行くと、両手をだらりと垂れ、首のあたりが伸び切った縊死体に遭遇した。

知らせを聞き、岐阜県警の土岐刑事も、この現場にやって来たが、すでに遅きに失していた。土岐刑事は地談駄踏んだが、死の世界に旅立った横瀬菊世と出会っただけだった。空の果ての雲間が切れたのか、このとき、朝の光芒が玄関先に届き、女の縊死体を白く焙り出した。

松ヶ谷葉の死体は、風に弄ばれたのか、少し揺らぎ、眩しさの増した光りの中、ぶらぶらとわずかだが揺れていた。さながらに、生きている者のように…。

## エピソード

笹川弁護士が正日蓮会の騒動を知り、そして、松ヶ谷葉の縊死自殺の報を受けたのは、岐阜県警土岐刑事からだ。土岐刑事は後一步のところで捜査の詰めを誤ったことを悔いているふうだったが、笹川弁護士にはその悔しさぶりは余り示さなかった。

勝手な考えだが、笹川弁護士は土岐刑事もまた横瀬菊世の薄幸な生涯に涙した一人だったのであると思ったりした。

松ヶ谷葉はやはり最後は追い詰められたに違いなかった。

土岐刑事の説明では、本人は赤石勇二の残した遺書の内容は知らずに死を選んだようだった。

横瀬菊世が自殺した前後の事情も、土岐刑事は笹川弁護士に教えてくれた。内通者である前野里枝の証言からそれらのことは知れた。

本当に松ヶ谷葉こと、横瀬菊世が叔父殺しの犯人であるならば、この後、苛酷な日々が彼女には待ち受けている。もしかしたら、自分に取っていちばんいい方法を、最後は選んだのだったかも知れない―笹川弁護士は個人に返ったとき、そのように考え、自分なりに、今度の一連の出来事を整理しようと努めた。

赤石勇二の残した遺書を、すべて真実とするには問題もあったが、遺書に記された事柄を、山形県警が再検証し、そして、岐阜県警も同じように、捜査を続けた結果、遺書に書かれていることが、正しいという見解に立つことができた。

山形県警は、上ノ畑観音堂の祠堂の下から、白い笈摺（おいずり）と、錫杖（しゃくじょう）など二人分の赤石勇二が指摘した証拠の品々を掘り出した。また、一時、銀山温泉に横瀬菊世が千代乃の名で芸者をしていた時期があったことも山形県警は突き止めていた。

事件を担当した笹川弁護士としては残念な結果となったが、いずれにしろ、殺人の実行者である赤石勇二の死刑は免れなかった。

一家三人惨殺事件、手を下したのは赤石勇二自身だった。

岐阜県警の土岐刑事は、山形での事件を参考に、証拠品探しを行い、遠山村近辺の祠堂などを捜索した結果、岩村駅近くの村の鎮守社の祠堂下の土中から、凶器の黒出刃に偽装用の十文半の地下足袋、他の証拠の品々を発見した。

岐阜での証拠品の発見話は、笹川弁護士としては信じたくないことだったが、容疑者不在ではあるが、事件として立件されるのはこの場合止むを得ないことであった。

それらの新事実が耳に入る度に、笹川弁護士はもの悲しい思いに捉われた。正日蓮会は解散の憂き目に遭った。

教祖、城ノ内魁の肺の病いは考えていたより病状が重く、その後、入院生活を余儀なくされたことから、告訴状は取り下げられる事態となり、検事局は特高刑事たちの拷問の事実を隠蔽、不起訴処分とし、一連の出来事は不問に付された。

元の信徒は離散、経済的にも立ちゆかなくなったのも、潰滅の理由となった。

加来貞子は精神的な面では立ち直ったが、妹の道子は、いまでも、精神病院を出たり入ったりの状態が続いており、明らかに、拷問の後遺症は残った。青年部に籍を置いた者たちは、ほとんどが、日本の中国侵略の最前線に立たされ、その後、昭和十六年に勃発した太平洋戦争にも巻き込まれて行った。彼らもまた暗い時代の犠牲者となったのであった。

年の暮れも押し迫った日々、笹川弁護士は折りに触れ、松ヶ谷葉のことを想い出した。

笹川弁護士の知る松ヶ谷葉は、知的な美しさと、歌道に対する才気をあわせもった才色兼備の女性であった。

赤石勇二に歌を捧げた動機が、不純なものど知って、がっかりしたのは事実だが、松ヶ谷葉の歌の中には、笹川弁護士を感動させるものも多くあった。

特に、山形に産する紅花を歌った作品には、東北の地に自分が住んでいて、紅花を見る機会が多いせいもあったが、情念の想いが、その色に託されていて人の心を打つものがあった。

紅花は咲いているときは黄紅色だが、人の手を経るうちに、鮮やかな紅色に変わって行く。一名、末摘む花と称されるこの花の呼び名も、歌には採り入れられていて、笹川弁護士は松ヶ谷葉の歌を知ってから、紅花が特に好きになった。

松ヶ谷葉が遺した遺書の中にも、いくつか、好きな句があった。

花埋みの 末摘む花や 野辺（やへん）にて

朱色（あか）き動悸（ときめき） 揺らめきてあり

みちのく路 黄花（きばな）咲かせる

紅花の 末摘む花や 奈辺（なへん）なる夢

旅路にて 手折（たお）る紅花 透けて見ゆ

末摘む花の 紅は恥じらう

いまでも、笹川弁護士は松ヶ谷葉のことを、横瀬菊世という本名では呼びたくないと思っている。女流歌人松ヶ谷葉。

生き急いで短い一生を終えた女性、松ヶ谷葉の怯えた暗い心のうちを知ったことで、笹川弁護士はその歌にも、松ヶ谷葉にも特別の思いを持つようになった。

短歌同人誌『花埋み』の名のままに、そっと咲いた一輪の名もなき花のようにも思えた。大輪の花を咲かせることなく逝（い）った松ヶ谷葉のことを、笹川弁護士はずっと忘れないでいてやろうと思っていた。

松ヶ谷葉は、天涯孤独の身であった。

松ヶ谷葉のいいところだけを見てやり、心に残る想い出を、ずっと、持ち続けてやれるのは自分しかない。

そんな感慨に耽（ふけ）りながら、笹川弁護士は、一日一日を、過ごしていた。

昨夜から、松ヶ谷葉の暗い過去をすべて消してくれるように、東北の地には雪が降った。

笹川弁護士は、書斎の窓から外の雪景色を見ていた。

少し離れた地に川に沿って小さな丘があった。

その丘に、十メートル余の高さがある公孫樹（いちちょう）の樹が一本、ぽつんと立っていた。

いまは、そそげ立っただけの枝しか空には張っていなかったが、それでも、白い雪化粧をし、真白（ましろ）の衣を身にまとい、寒さの中、健気に立ちつくしているのが見えた。

これからの季節、風雪が厳しくなるが、いつも、見やっっている樹は、四季折々の風情を見せて、そこに、おのれの存在感を示して来た。

笹川弁護士にとっては、それらの光景は、瞼の裏に焼きつけられた光景であった。

この日は、珍しく風のない日に思えた。

雪はなおしんと降った。粉雪が、時折り、地面を掃くように走り、そして、花びらが舞い散るように、公孫樹の小枝からも雪が舞い落ちた。

窓の外に広がる雪景色は、どこまでも、汚れがなく、心洗われるものがあった。

松ヶ谷葉が次に生まれ変わったときは暗い時代ではなく、短歌に打ち込める人の世ならばいいなと、笹川弁護士は思った。

無垢無浄、雪の白さはそんなことを教えてくれているようだった。

〈完〉

《参考資料》

- 『死のう団事件』 保坂正康著 れんが書房  
『短歌史』 阿部正路著 桜楓社  
『大逆事件の周辺』 柏木隆法編著 論創社  
『死刑執行』 村野薫著 東京法経学院出版  
『戦後死刑烈伝』 村野薫著 宝島社  
『昭和性相史』 下川耿史 伝統と現代者

花埋み心中

平  
龍生